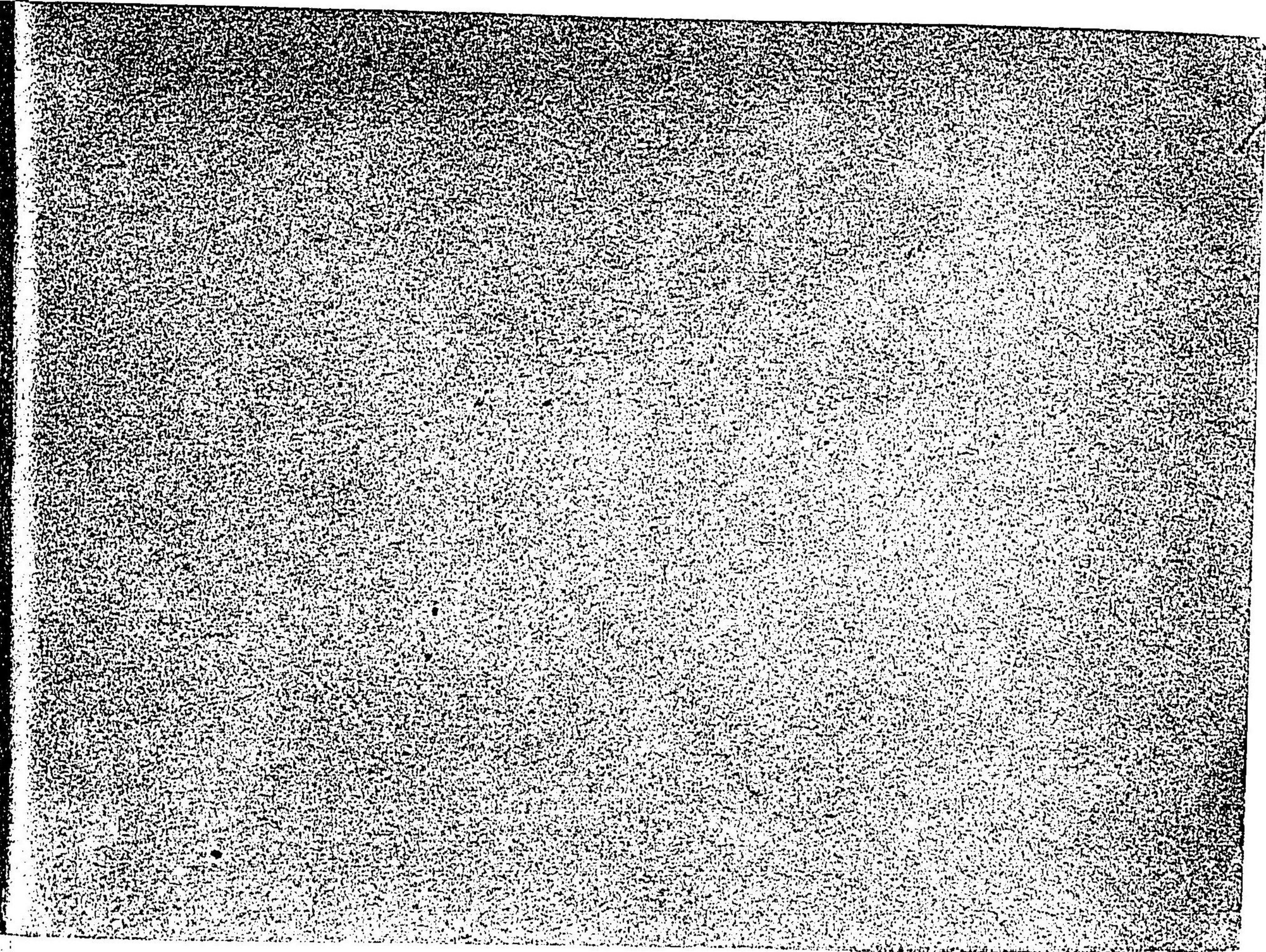
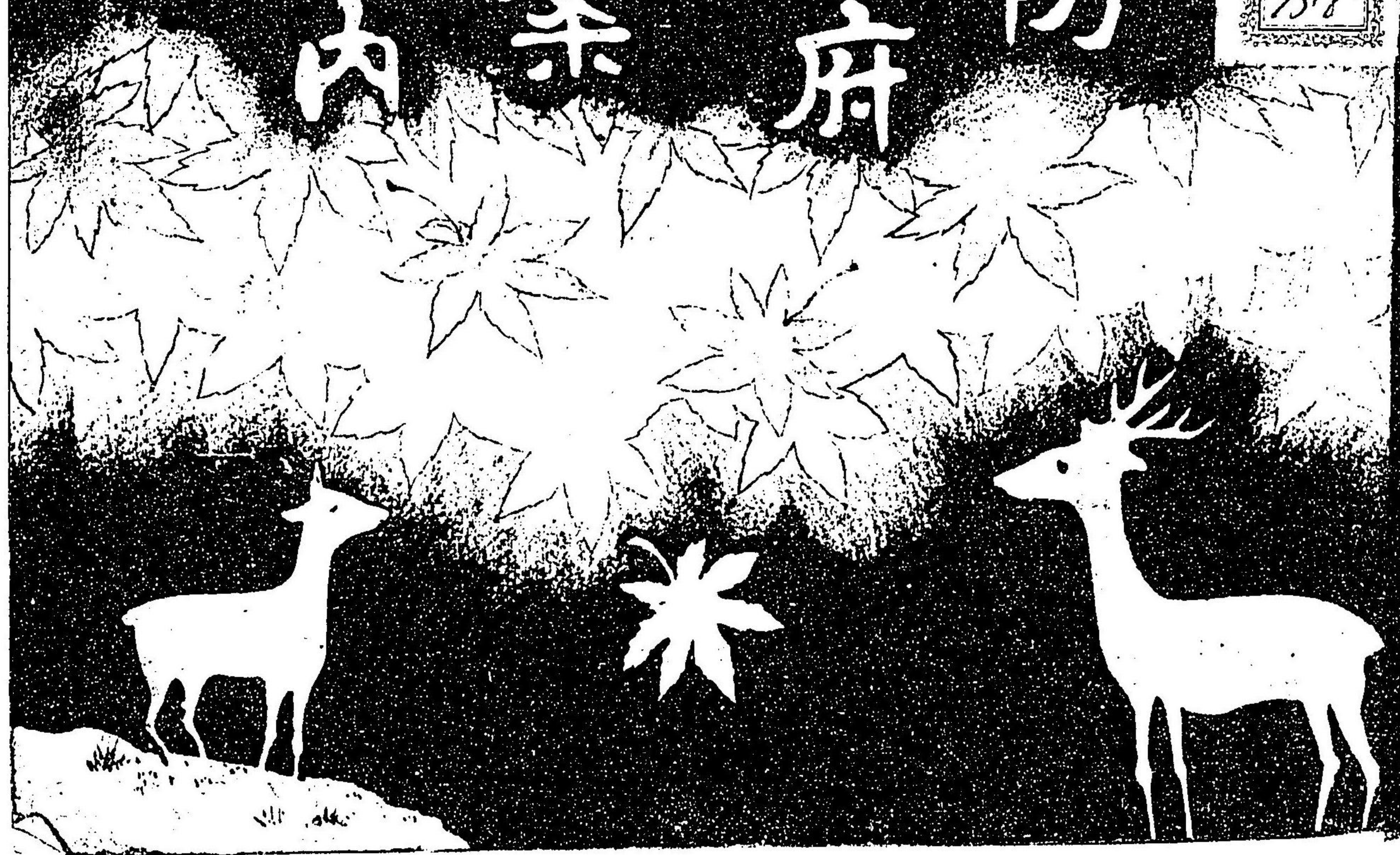


防府案内

74
598



國の露
日本の
名譽

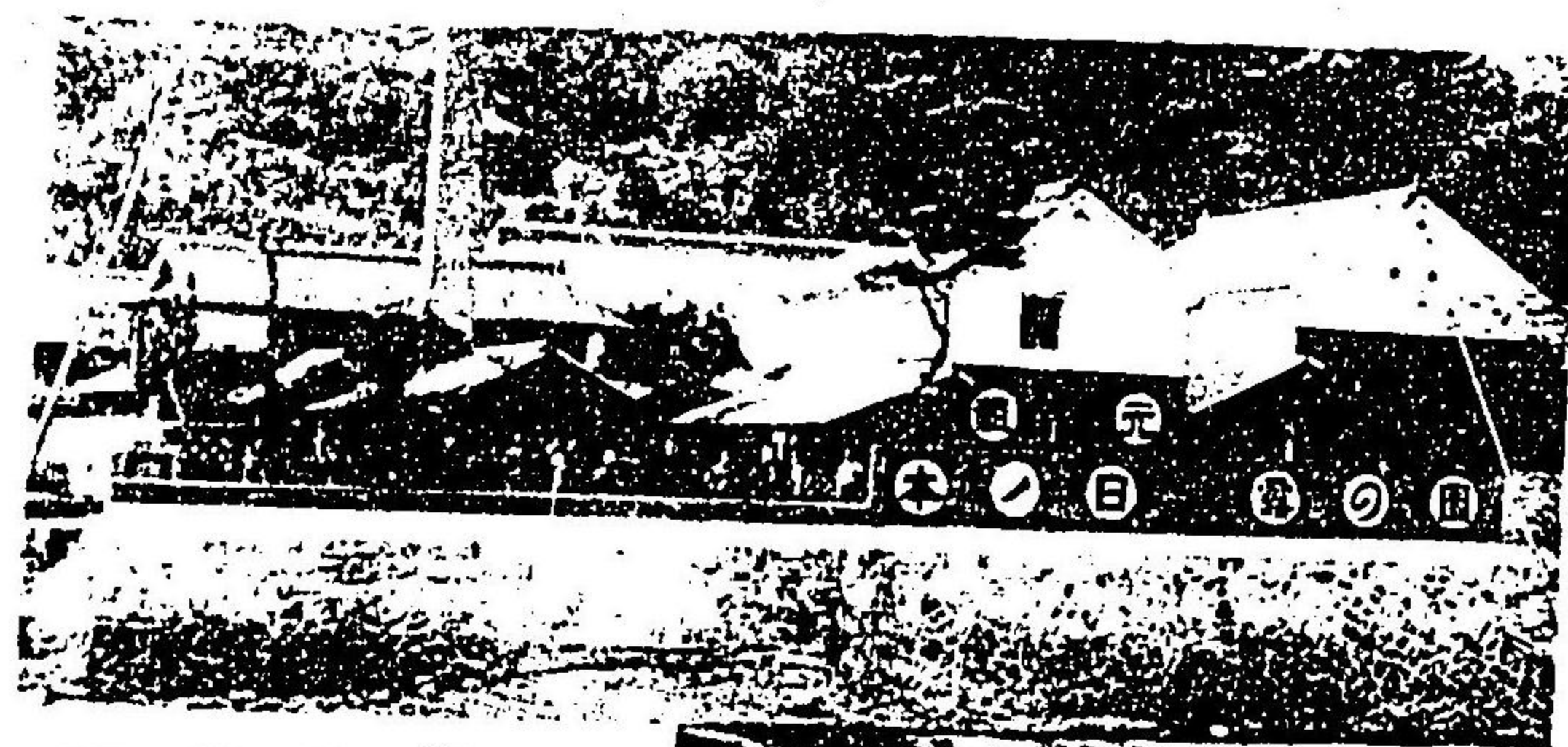
天皇陛下御天覽光景
東宮殿下御買上光榮

各博覽會金銀銅牌數受

米國博覽會金牌受領

醫科大學橋本先生

證明書受領



慈養菓子

**園の露
本の日**

大日本山口縣佐波郡中關町

上田日松堂本店



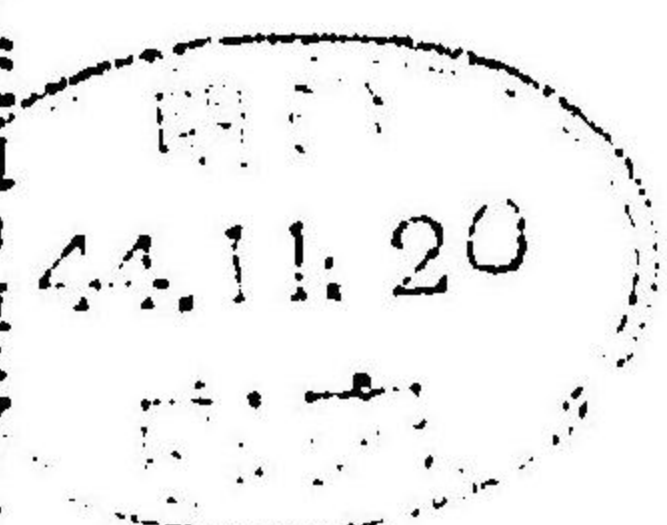
防府案内

緒言

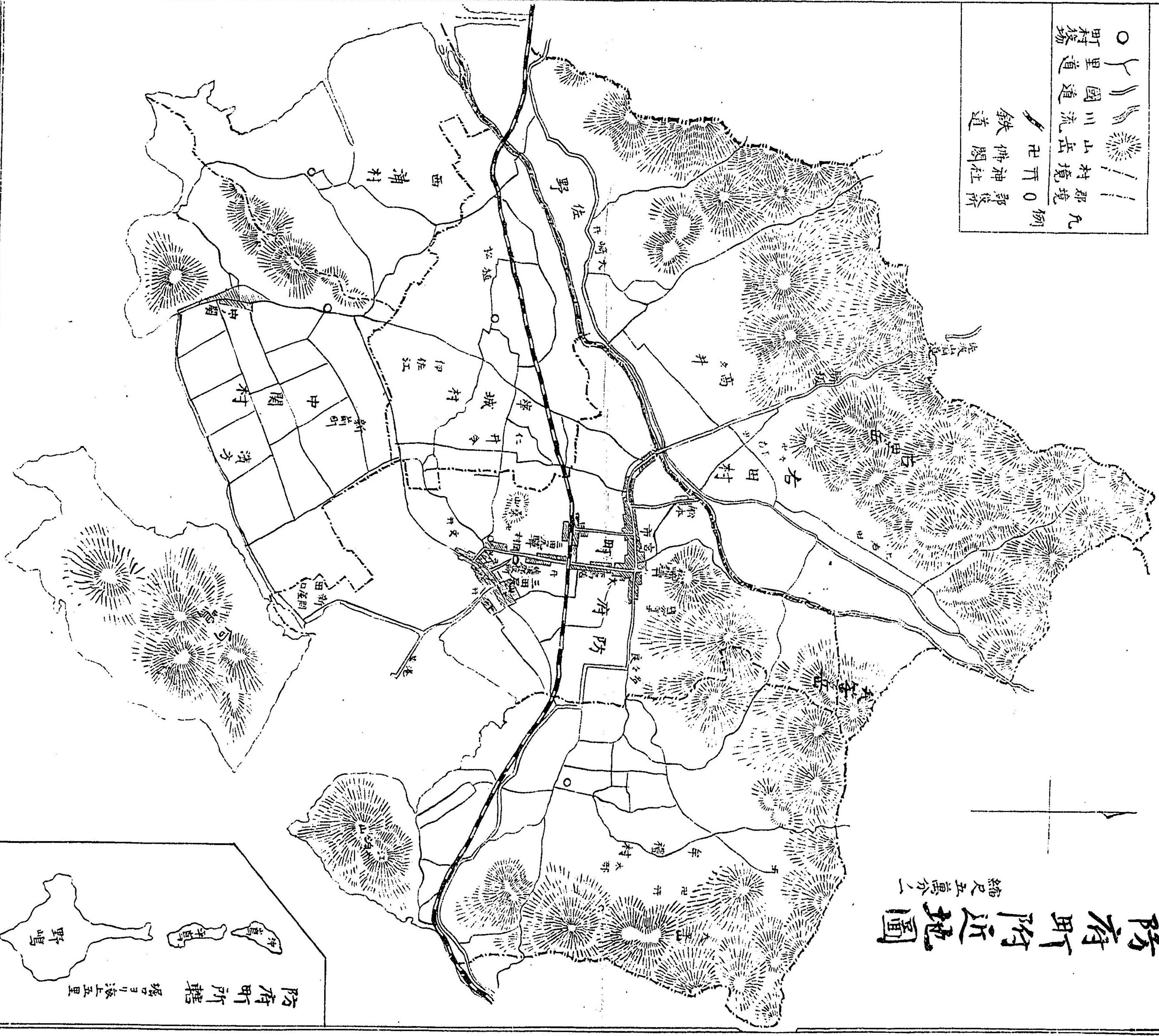
防府の地たる山を負ひ海に臨み氣候温和にして交通の要路に當り殆んど二千年の往古より世に知らる其間時勢の轉變計ふるに遑あらず故に舊址名蹟の多きも固より其所なり明治昭代に至りて百事變々就將の勢會て止まず交通益繁く往來多し文明の利器悉く備り農工商百般事業の向上發展は瞭然として眼前に髣髴たり此時に當り地方の狀況其他を世に紹介するは蓋し無用の業よあらざるべし而して斯事たる素より容易になし得らるべきにあらず不肖の如き何を以てか能く之をなさん然れども區々の念一たひ發し己んど欲して得ず遂に意を決し事に従ひ漸く此冊子を草することを得たり時恰も

聖上陛下の御駐紮を蒙るに際會す此千歳一遇の光榮を記念せんが爲め忽々梓に上す誤謬遺漏なきを保せず後日誤を正し謬を削り遺を拾ひ漏を補ひ大に改訂を行ひ再版に付し以て編者の冀望を滿さんのみ。

明治四十四年十一月黃菊丹楓相映する窓下に於て誌す



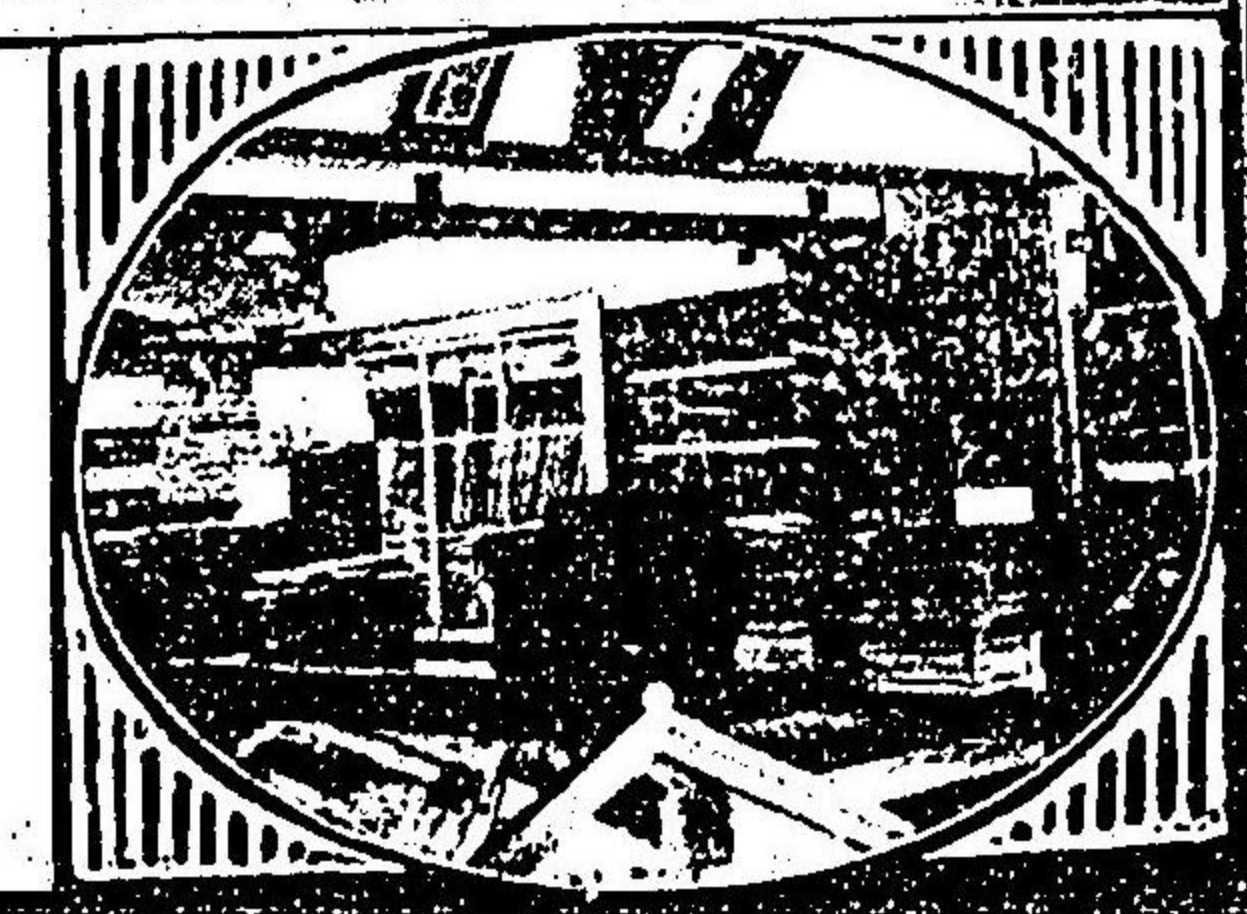
- 九例
- 郡境
 - 村境
 - ⊕ 山岳
 - 〰 川流
 - 〰 國道
 - 〰 里道
 - 町場
- 鐵道
- 佛閣社



弊店は常々都會流行の
 新柄を撰び安き正札直段
 にて御願仕候



部志、場列陳、舗店
 角前宮満天市宮防周
店服吳光中
 番三七話電長
 番壹壹四九阪大野振



自轉車界の一大福音

實用新案登録第二〇九二二號

自轉車乗用 **羽織挾**

美形ニツケル製壹個金三十五錢

○自轉車へ乗りて羽織のいたまぬ器械
輕便にして体裁優美

(圖の用使挾織羽)



周防右田舟橋本町

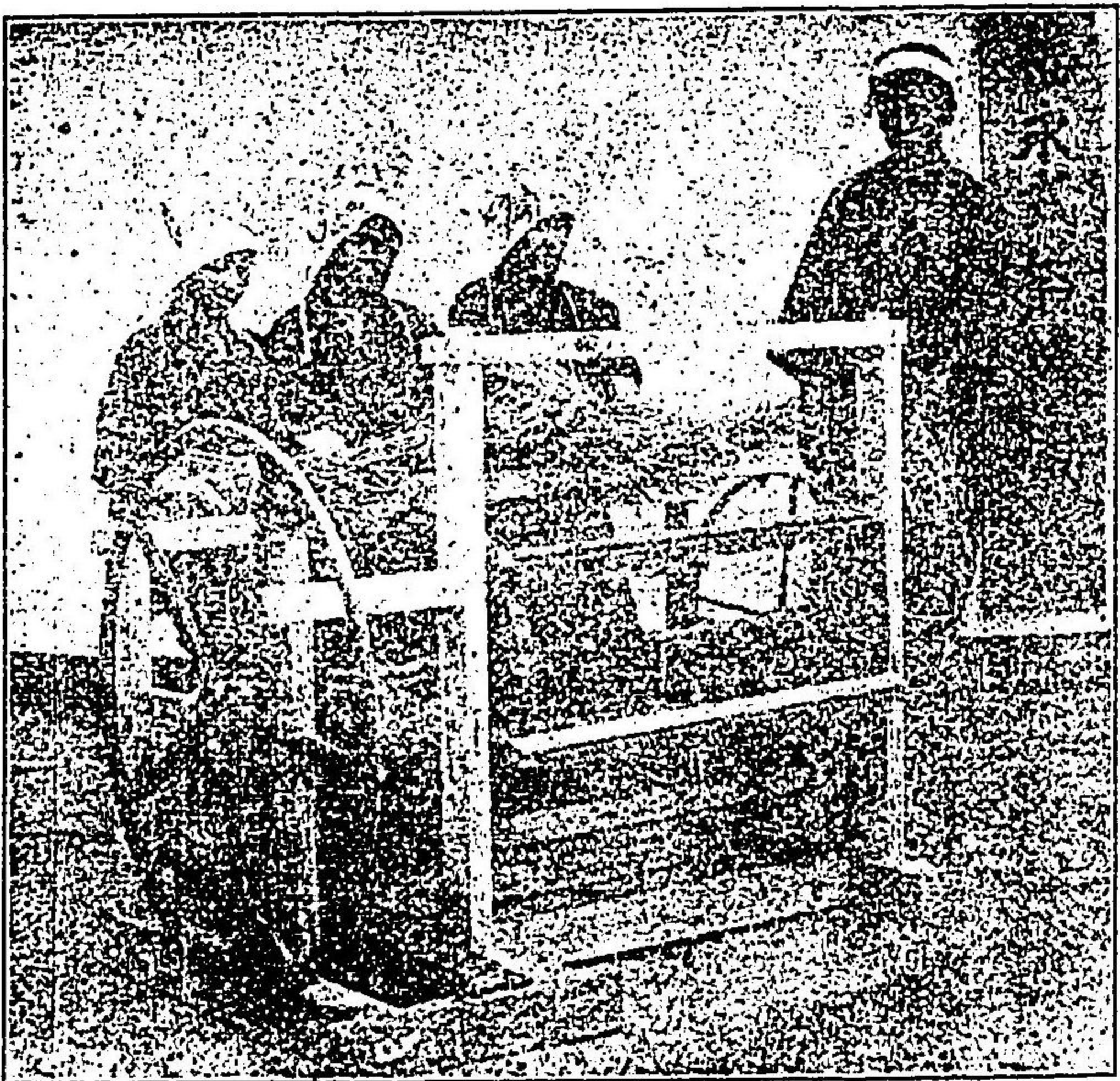
製造發賣所

中村商店

店主 **中村源兵衛**

○各地自轉車店其他に於て販賣せり

農事改良ハ時間之節約ニアリ
時間之節約ハ機械的設備ニアリ



ル當=穂稻度百二千壹上以度百九=間分 線罫驚勿

發明特許福永式稻扱機

登録新案第一號

登録新案第二號

登録新案第三號

福永式見臺付雜糞

山口縣佐波郡牟禮村第七十三番屋敷

發賣元

福永商會

履 荒 雜 足
物 物 貨 袋

卸問屋
并紡績繩
田植網
製造販賣

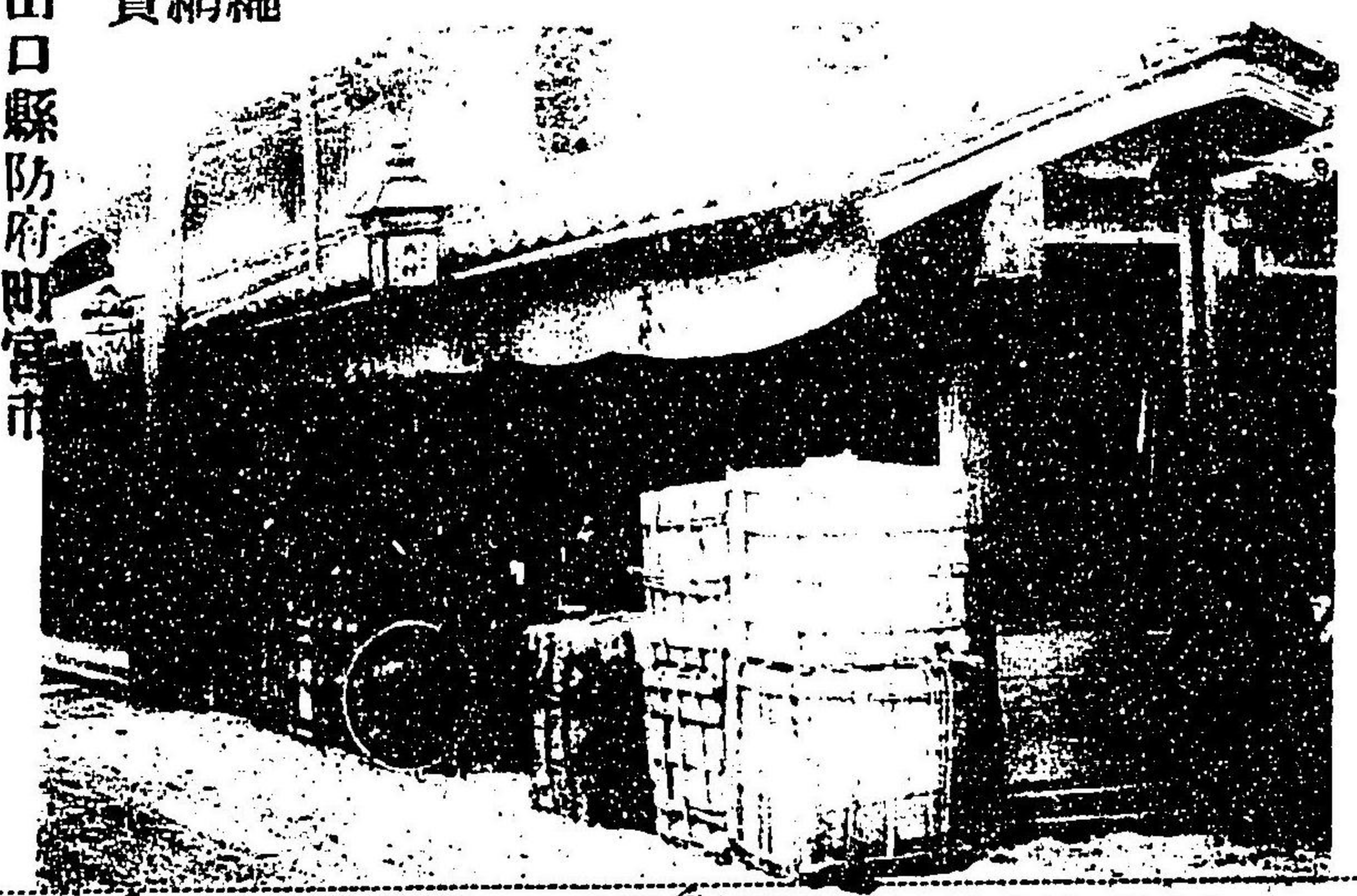
山口縣防府市



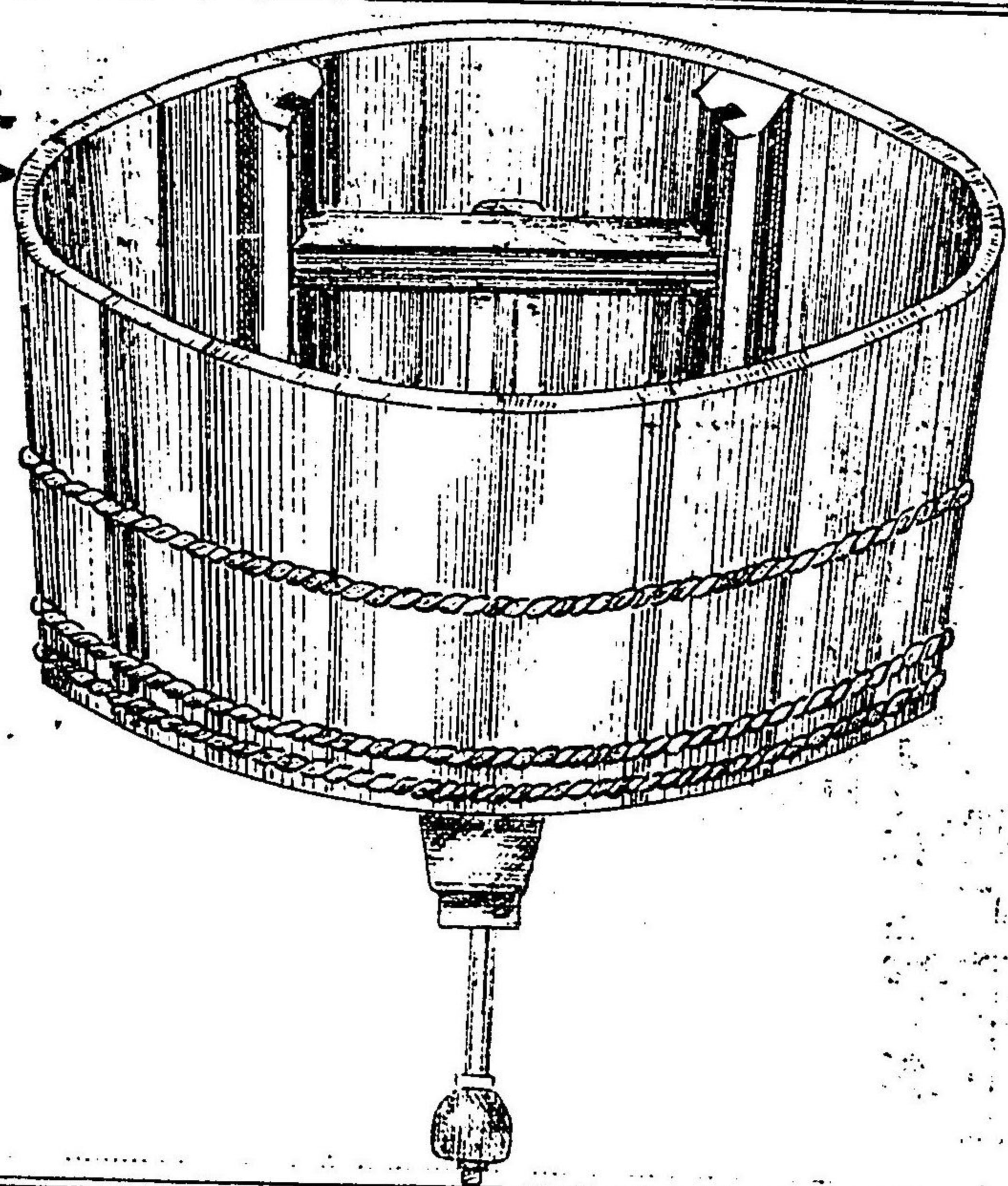
商號館平

大村平兵衛

電話百二十番
大阪振替六七三番



改良上戸



山口縣周防府町宮市

專賣特許樽
詰漏斗製造元
酒類仲買業

尾中猪之助

電信路
下振替貯金口座
語才イ 大阪四三五〇番



小間物と化粧品は

却小者共

宮市。重屋。三

限。外

造花材料

各女學校御用達

重屋小間物店

長電話三三三番

確實勉強



馬具
疊表
荒物

米國製蹄釘
器械製疊糸
特約大販賣

山口縣防府町宮市新町

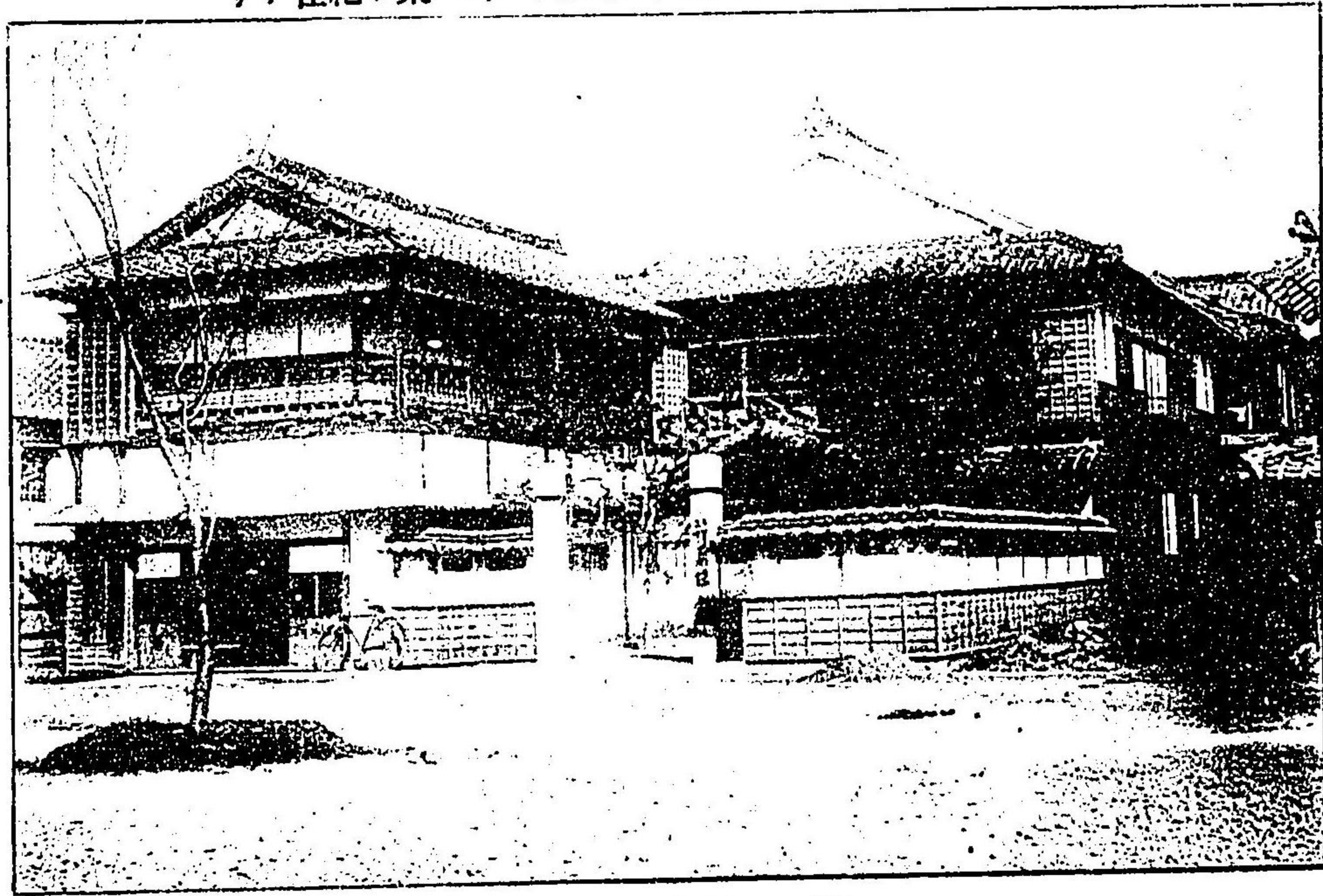
吉井忠五郎商店

振替大阪五五七九番
電話百三十九番

紡績糸繩
正條田植網
製造卸商

眞鍮牛鼻輪

●弊館ハ貴賓ノ設備アリ
●弊館ノ眺望ハ防府ノ勝景一呼ニ集リ絶佳ナリ



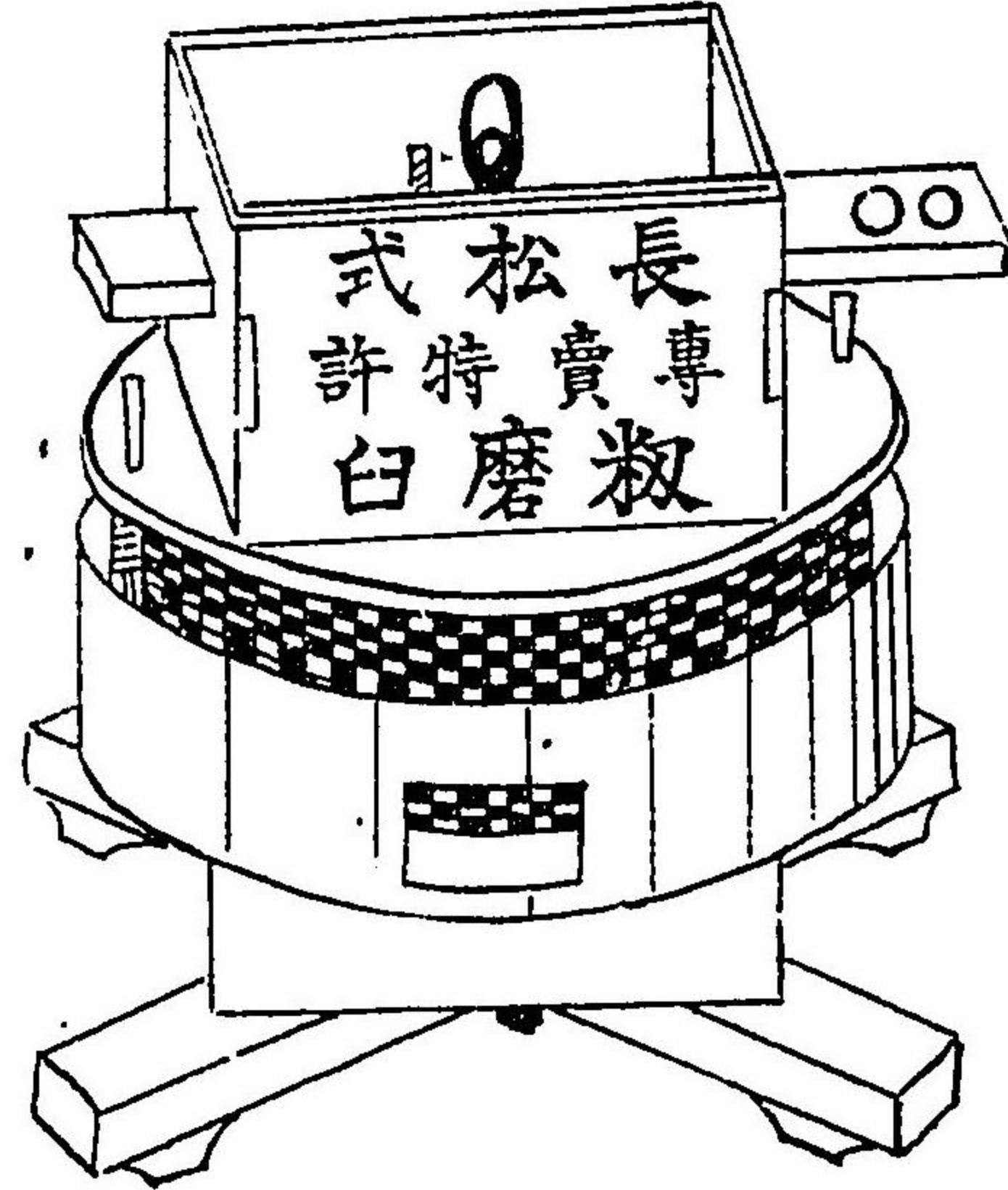
三田尻驛前 井原旅舖 長電話八十五番

- 今更長ノ多クモ 三貴願御投宿
- 桂公爵
- 聖上陛下御駐籠ニ際シ左ノ御陪從
- 長谷式部職
- 山内式部職

特別廣告

帝國農會主催全國農具展覽會褒賞受領
山口縣立農學校効力証明書受領
山口縣立農事試驗場効力証明書受領

●苦トせし扱摺は
●蟬娘老翁一人の
●作業なり
●産不改良は
●扱日ノ撰擇
●に注意ト申す



特許扱摺磨白製造發賣元
特許錄首 扱
宮市丸長扱製造元祖 商標
登録 防府町宮市
農具製造所
三田尻驛ノ北ノ七丁
兵庫縣以東申込所 同工場
播州加西郡山下村

純良なる藥品を廉價に供給し確實なる調劑を成す之れ小西堂藥局の特色なり

營業品概目

醫化學用諸藥品 醫療化學用諸器械
新藥類各種 和漢用工業用諸藥種
消毒綳帶材料品 繪具染料品
全國有功賣藥特約 滋養食料品
洋酒瓶詰類
各地病院醫家處方箋調劑所

中風藥製劑發賣本舖
調血湯
分
河野小西堂藥局
周防國防府町名市
第一〇二二番地
電話 二二二二

鯉スポンポニ食用産卵用井ニ 鯉兒販賣

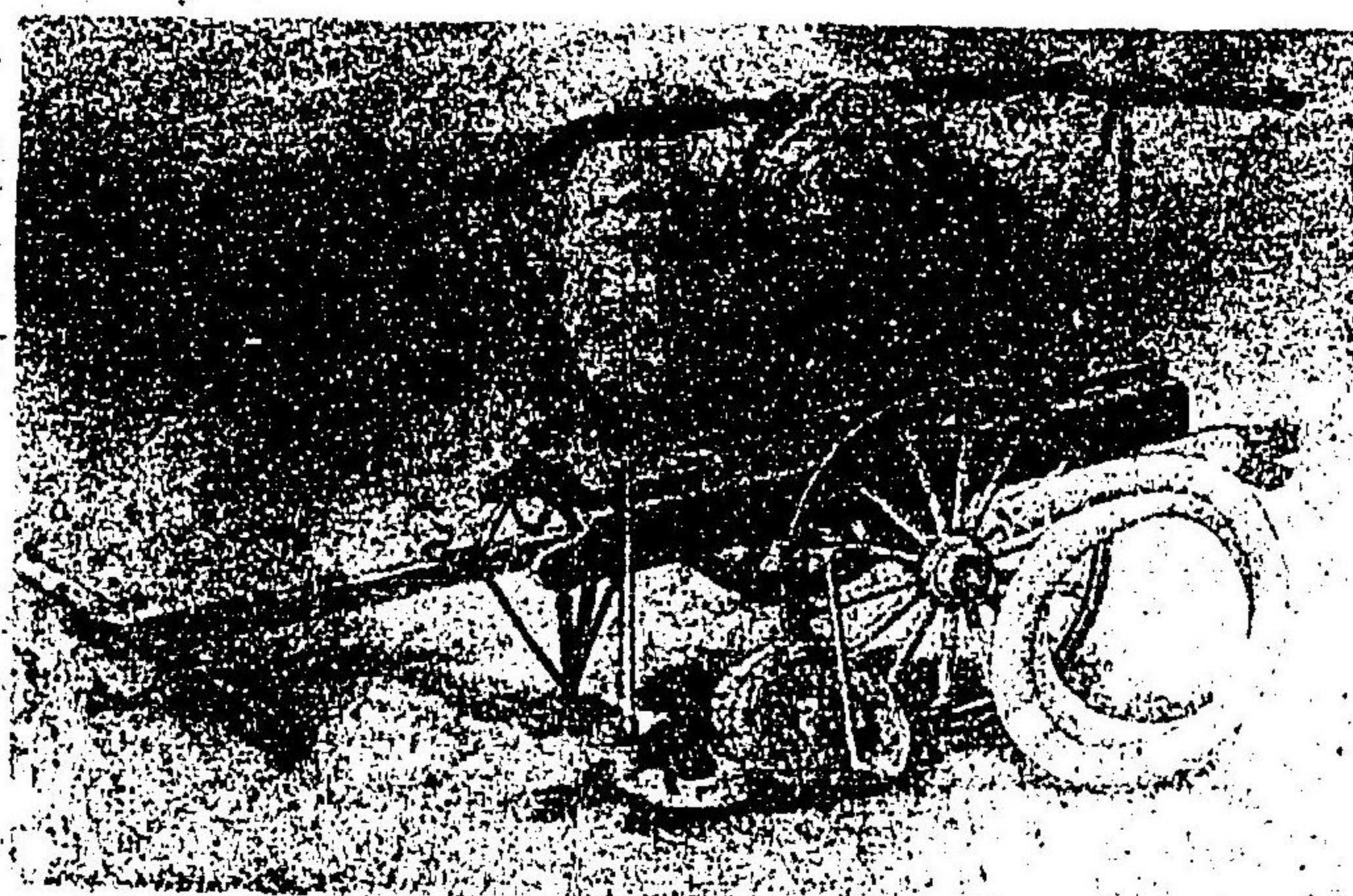


(佐波郡右田村東谷藤井養魚池之景)

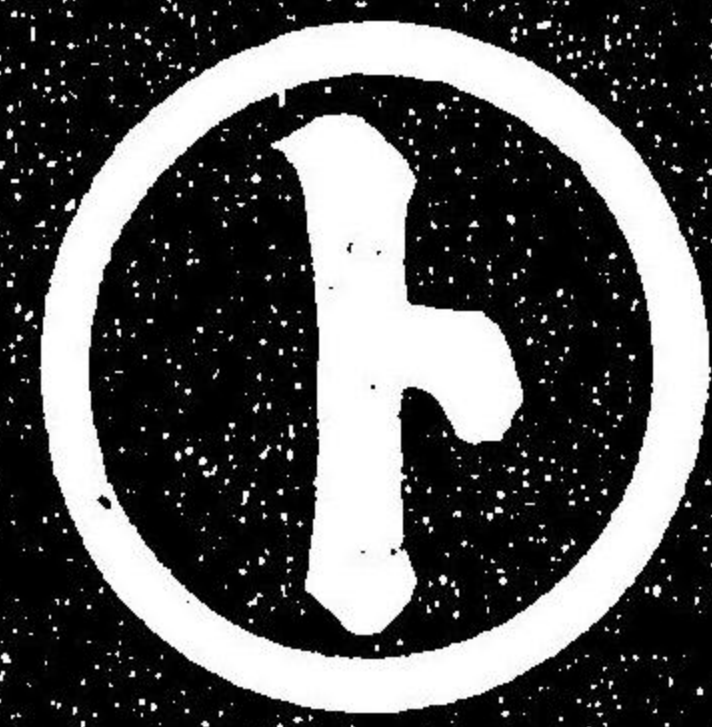
持主 藤井清一
 管理者 岡村藤兵衛

防府町三田尻新丁

消防用唧筒 船舶用唧筒
 鐵道用唧筒
 鑛山用唧筒
 田畑用唧筒
 工場用唧筒
 建築場供水用唧筒
 自家用唧筒
 其他各種唧筒
 各種器械
 消防用道具附屬一式



森脇唧筒商

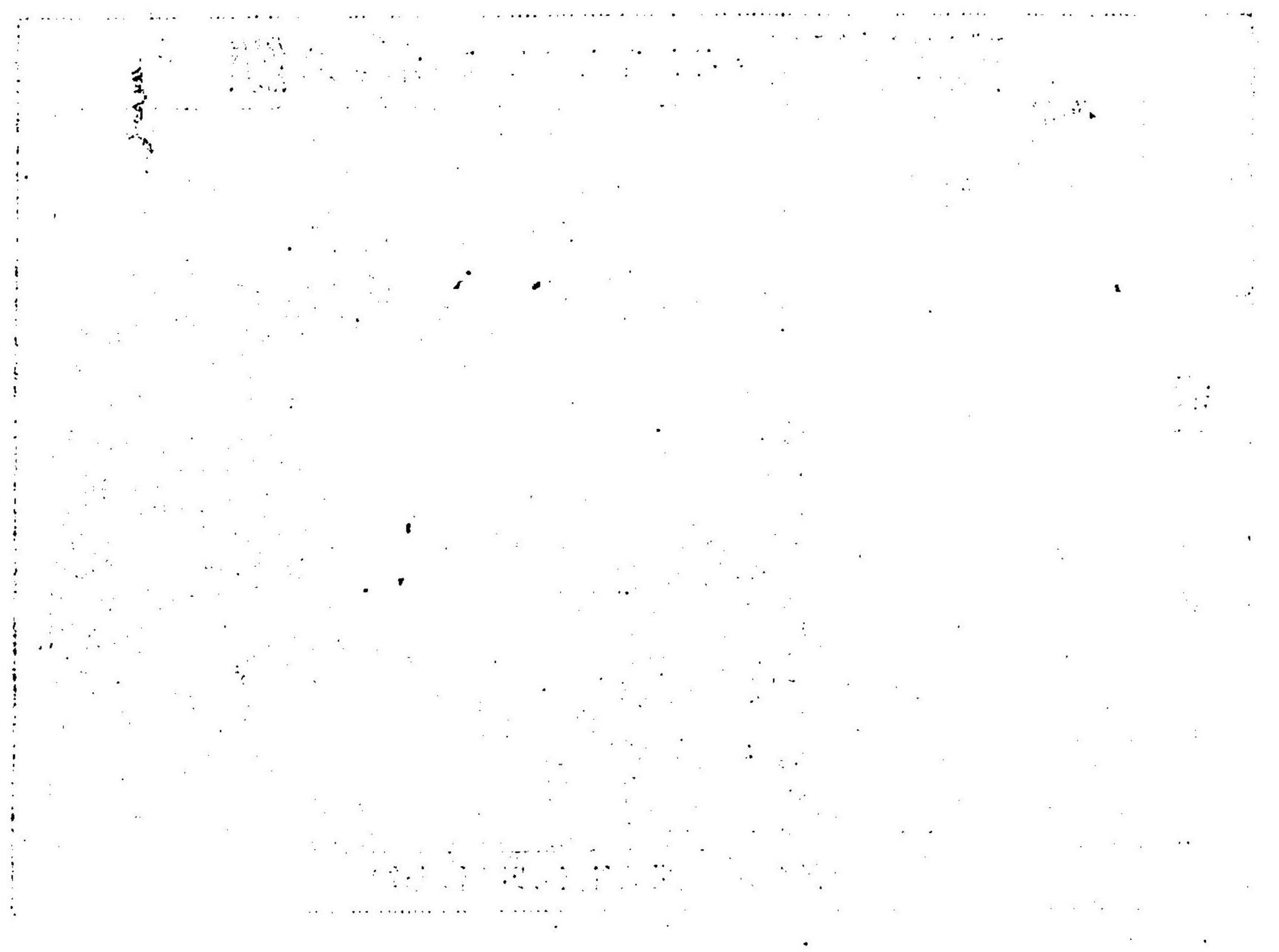


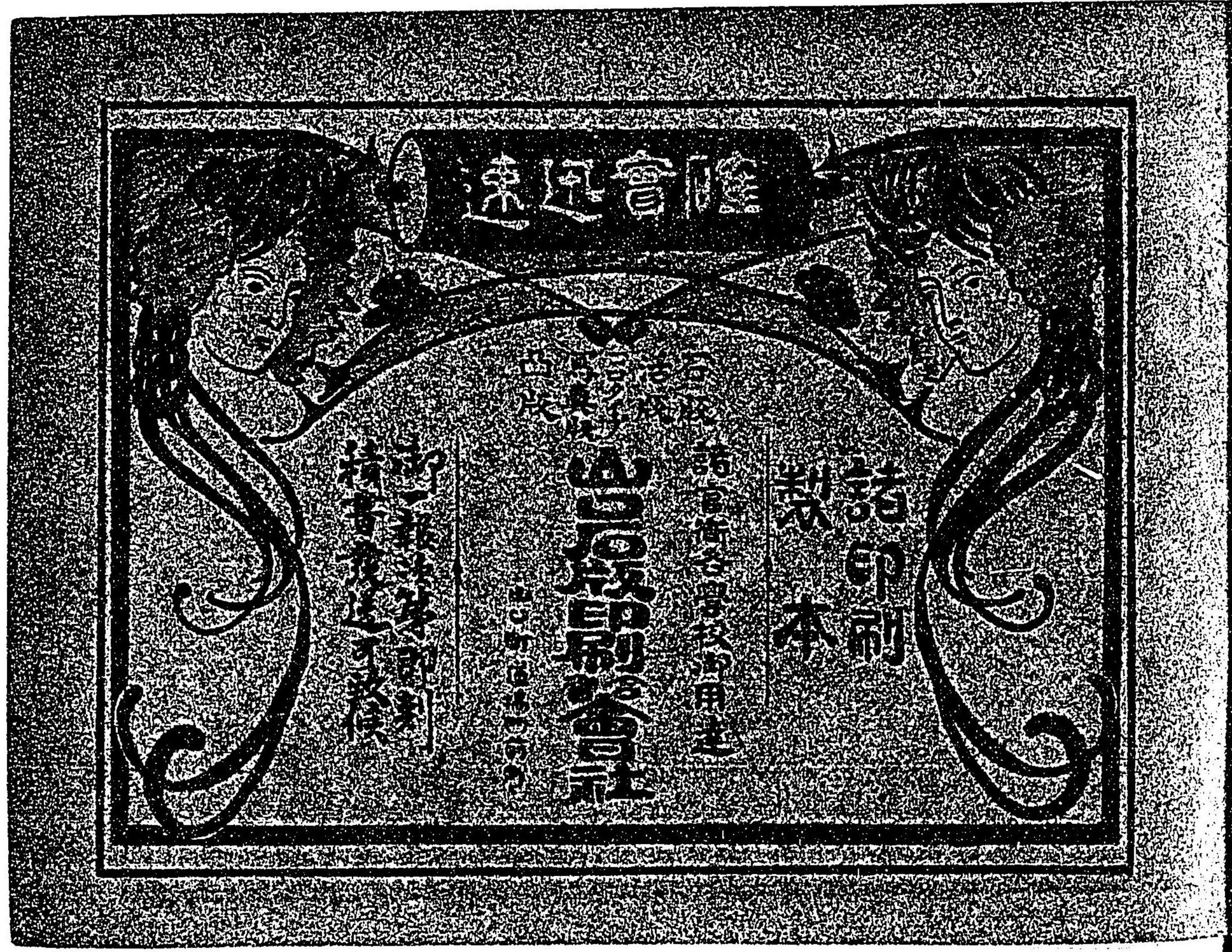
確
實
正
礼



三田
德富呉服店

長電 十九番
振替 一七〇七五





下靴式岡吉
下ツク徳八名一

專賣特許第一九〇三號

高 等 洋 服 商

三 田 尻 通 角
吉 岡 洋 服 店
(電話二五)

防 府 三 田 尻
吉 岡 助 二 郎
(電話一六二)

速迅會隆

石版 活版 寫真版 凸版

諸官衙各學校御用達

山石印刷會社

上町道場3丁目

諸印刷製本

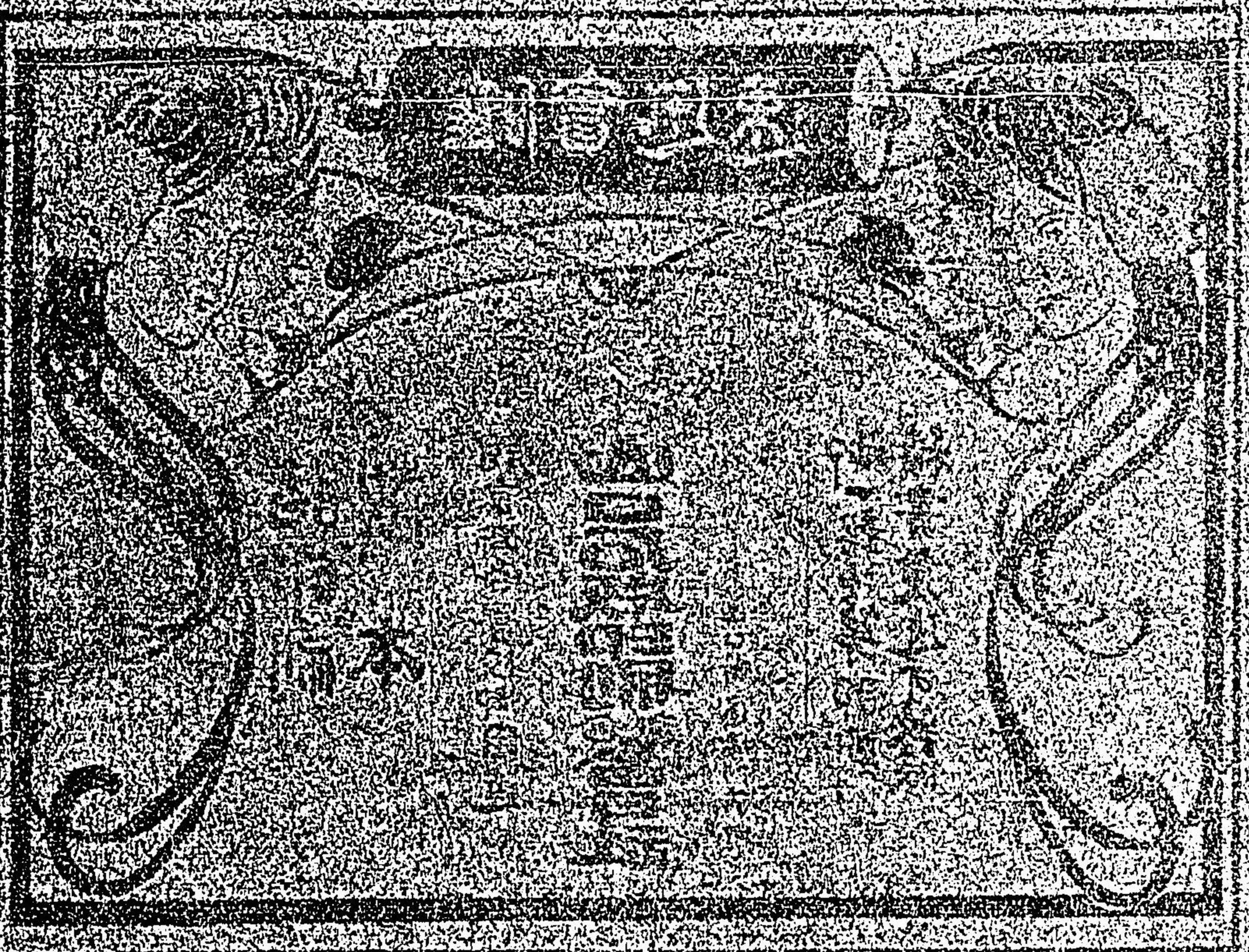
御一報決算即刻
積書發送可致候

下靴式岡吉
下ツク徳八名一

專賣特許第一九〇〇三號

商服洋等高

角通驛尻田三
(二五話電) **店服洋岡吉**
尻田三町府防
(二六一話電) 郎二助岡吉



防府案内 第一篇

矢野錦涯編

第一章 総説

防府は、山口縣周防國佐波郡南部の地にして、四峠（東は浮野峠、東北は眞尾峠、西北は鱒山峠、西は佐野峠）の内の總稱なり、此地方を斯く防府と稱する所以のものは、往古周防一國の治府を置ける地方の故に之を略稱するなり、東北西の三方は、峯巒起伏縮互して箕の如く廻り、山地を以て隣邑に接す、南は一面海に瀕せり、廣袤東西約三里、南北二里餘、面積約六方里を有す、現住戸數一万二千六百六十六、現住人口五万五千七百九十五あり。地勢は、北方總て山岳にして、南に低下して海に達す。氣候は、中和にして農耕に適し、五穀百果悉く豊熟す。

第二章 地理

一) 町村の位置

明治廿一年市町村制の發布せられし當時より、我防府の地は牟禮佐波三田尻右田華城中關西浦の七ヶ村ありしが、明治三十五年一月佐波三田尻の兩村を合して防府町を設く故に現今防府に一ヶ町と五ヶ村あり、其位置左の如し。
牟禮村 防府の東部に在り、山地を以て東は本郡富海村に隣り、北は本郡小野村に接せり、而して西は防府町に連り、南は海に瀕す、地勢東北に高く西南は低し。
防府町 防府の中央部にあり、東は牟禮村に隣り、北西は右田村に界し、西は華城村に接し、西南は中關村に連り、南は海に臨り、地勢概ね平坦なり、三田尻(二編第一圖參照)宮市(二編第二圖參照)二市街を有す別に海上五里を隔つる野島あり。

右田村 防府の西北部にあり、北は本郡小野村に連り、西北は連山を以て吉敷郡小鯖村及大道村に界し、西南僅に海に瀕し、東南は佐波川を隔て、防府町及華城西浦の兩村に對す。華城村 防府の西部にあり、北及東は防府町に隣り、南は中關西浦兩村に接し、西北は佐波川を隔て、右田村に對す。中關村 防府の南部に在り、北は華城村に連り、西は西浦村に界し、東は防府町に接し、南は海に瀕せり、向島及佐波島の二島と中關市街あり。

西浦村 防府の西南部にあり、北は華城村に接す、西北對岸は右田村の西南端なり。其他は海に瀕せり。

(二) 山嶺及嶋嶼

大平山 一名牟嶺山(海拔二千八百八十尺)は、東方に聳ゆる防府第一の高山なり、山勢優美巨人の如し、此山脈を以て隣邑との分境を爲す、麓に春日神社及阿彌陀寺あり。江泊山 一名寶珠山と云ふ、又圓山の稱あり、牟禮村の南端に孤立し、三面海に浴する半島なり、其南端は龍ヶ口の海峡を狹んで向島と對峙す、其處に荒磯の勝地あり、不肖錦漕曾て此に遊び拙作あり。

荒磯雨後眺望新 點々漁遊知幾人

自笑釣竿作無用 空看風景不垂綸

矢筈ヶ岳 大平山の西に在る高峯 海拔一千五百二十尺)なり、山勢雄峻武夫に似たり、北は小野村に跨り、西は佐波川に臨めり、西麓は畑村の小邑あり、南に多々良山、國分寺、天神山連立せり。右田ヶ岳 一名城山と云ふ、(海拔千四百九十八尺)あり、東矢筈ヶ岳と嶺を争ふ、峻峯なり、山勢崢嶸、峻巖樹間に隱居簇立し、虎の蹲るが如く、龍の蟠るに似たり、殊容異觀、奇人の如し、東

麓に毛利男爵邸、常住靈社、熊野神社及二三の寺院あり、南麓に右田小學校、天徳寺あり、又西麓に勝坂關門の故址あり。高井山 右田ヶ岳の西にあり、巖巖山嶺に簇列す、右田石を産す、南麓に琳聖太子の孫阿戸太子の葬所あり。江良山 高井山の西に在り、其南麓には桂茶氏の經營せる果樹園あり。

佐野山 江良山の西南にあり、玉祖神社、(一宮)は其東方にあり、此山の南山腹は、舊國道(維新後は南麓を廻る)にして、防府名勝の一に數へられ、詩人の口吻に上りし地なり。

天神山 一名酒滴山と云ふ、防府眺望の覇權を占むる山峯(海拔五百五十尺)なり、滿山白砂にして青松點在す、此に登臨する者誰か眺望の美を稱せざるものあらん、山南半面は酒滴公園にして松崎神社は山腹に在り、社東に觀音堂、社西に靈臺寺あり、宮市の市街山麓に連なる。

國分寺山 一名淨瑠璃山は天神山の東にあり、南麓に曹洞宗中學林あり、法華寺あり、其南に國分寺あり。多々良山 國分寺山の東にあり、山南一帶公爵毛利家の所有地なり、本邸を新營せらる。

桑山 防府の中央にあり、一名を九華山と稱し、又四十八峰とも云へり、(桑の字の草体四十八となるに依る)名山なり、海拔三百五十尺あり、登臨すれば防府勝景双眸を照す、眞に眺望に富む。

向島 防府の海口に横たわる或は風間島と稱す。東の海峡を龍ヶ口と云ひ、西の海峡を辰ヶ口と云ふ、東西壹里七町南北二十三町周圍四里九町あり、島の高峰を錦岳と名く、東北海濱に郷ヶ崎の村落あり、西北麓に小田港あり、水深七尺長港なり、島

南の海濱は勝地にして、大津野島等眼前に浮び、姫島及豊州の群峯は遠望に佳なり、舟遊者の到るもの多し、頼山陽亦曾て此に遊び鶴濱の貞永氏を訪ひしと云ふ詩あり曰く

鹽田盛海海如渠 隔水青山雨霽初

繫得輕舟故人岸 叩門偶補酒瓶虛

田島山 中關村の西部にあり、辰ヶ口の海峡を隔て、向島に對す、東麓に中關港あり、西に中の浦の部落あり、中の浦は三面山を負ひ南は海に臨み閑靜の地なり、今川岳南曾て此に到りて詩を賦せり曰く

繞過一嶺別爲村 雞犬相聞戶口繁

此裡海山風色富 避秦何必武陵源

佐波島は、中の浦を隔つる一里の海中にあり、東西二町南北壹町の小嶼なり。

野島 三田尻港を距る五里の海中にあり、防府町に屬す、戸數百九十七、人口千九十六、尋常小學校及眞宗寺院一あり。

三 池沼河川

池沼は記するに足るものなし、然れども灌漑用の溜池としては大平山に洗川の池あり、天神山の東に酒谷の溜池(善隄の堤)あり、其他各村にあるもの枚擧に暇あらず、又岸津及勝間又は三田尻等の開作地は潮溜沼あり

河川の數十條あるも皆小なり、或は砂川にして平時は水流なきものあり、其記するに足るものは一の佐波川あるのみ。

佐波川 一名錦川、錦水、錦江と稱す、源を本郡柚野木の山中に發し、出雲村堀に至りて、串村大字集山の山中より來る水と會して巨流となり、防府に入りて幾箇の砂洲を擁して西南に向つて進み海に注ぐ、流域十五里二十町なり、其上流は、岸高き

峡谷を過ぐるも僅少の里程にて自餘は悉く灌漑に供せらる、鯉、鮒等を産す、鮒は防府の名産なり。

第三章 運輸交通

一 道路及海港并鐵道

防府町は、古來より海陸交通の樞衝にして、國道東西に通じ、縣道南北に連なる、里道亦逐年改修せり、往來甚だ便なり北は石州に向ひ山陰諸國に到るべく、西北は山口及萩に行くべし、東は山陽諸國、西は九州各地に通ず 鐵道山陽線は防府を横ぎり主要地點に停車場を設け三田尻驛と稱す、此鐵道の全通せしより運輸交通上一大革命を來し人馬の往來、貨物の集散頗繁となる (第二編第二十八回參照)

二 渡津及橋梁

左記渡津及橋梁は、新橋(國橋)を除くの外は、悉く渡筏を要す人一人を付し舟楫以下牛馬諸車等、夫々差あり

眞尾渡 小野村眞尾より右田村上右田に到る

大崎渡 右田村大崎より華城村植松に到る

泥江渡 華城村泥江より右田佐野村に到る

開作渡 西浦村開作より右田村佐野に到る

船橋 防府町船本より右田村船橋本に架す

新橋 防府町新橋より右田村高井に架す (二篇第二十四圖參照)

右四ヶ所の渡津及橋梁は、佐波川筋に在り (二篇第二十五圖參照)

本村渡 中關村向嶋より同村濱方に到る

郷ヶ崎渡 中關村向嶋より防府町問屋口に到る

右二ヶ所の渡津は華浦灣より中關灣に通する海水中にあり

第四章 沿革

(一) 政務

上世茫たり、史の徴すべきなし、神武天皇東征の日此地に寄港せられしや亦未だ知るべからず、景行紀十二年九月到干周芳婆婆云々、是れ此地の國史に見ゆる最初なり、また仲哀紀八年正月參迎干周防沙摩之浦而賦魚鹽地とあり、且往古(本年より一千九百九十二年)前成務天皇十三年國造を置かれし時節(周防に四ヶ國あり、天武天皇十三年(本年より千二百二十七年前)四國を合して一國と爲し周防と稱す、國府を佐波郡佐波(今の國衙)に置かれ、朝廷より任命の守護職、交々來りて支配す、和名抄佐波郡の部に、佐波、牟禮、多良(今は多々良、勝間手祖の地名あり、是れ我防府の地なり、文治二年造東大寺大勸進俊乘坊重源國司に任せられ、爾後法胤職を襲きけるが、大内氏起るに及て其治下となり、二百餘年にして毛利氏の領有に歸す、慶安三年毛利綱廣郷の時、所務代官の制を創始し、本藩領を十七宰判に分ち代官を派す、佐波郡南部は三田尻宰判の管轄にして、治所は三田尻に置けり、毛利氏の治下に在ること三百十一年にして玉政維新となり、郡の治所を部署と云ふ、其後大區扱處と稱し、又郡役所と改名して今日に至る。

(二) 沿海地の開作

岸津濱及江泊開作は寶曆六年の築立なり、勝間には三稱あり、其最も古き地を銚物開作と云ひ、中勝間を古開作と云ふ、中道より東南の方は總て新開と稱し、安永五年毛利左近衛少將重就公の開拓せらるゝ所あり
三田尻西南部一帯の地は、もと海汀なりしを今より、二百餘年前毛利氏の經營により開作せられし者なり、其地積凡五百町、

分て四とす、其内最も先に成るは、古濱にして明治十八年十一月二百年祭を舉行し其紀念碑を鞠生松原嚴島神社の境内に建設せり、今參考のため其全文を左に誌す

古濱鹽田開墾二百年紀念碑

防之爲淵、負山臨海、膏腴沃饒、而佐波郡墾田又其最也、經緯凡五百町、鹽田間之、初郡之鞠生浦、有松林、林中奠嚴島神社、海水渺茫、浸其林麓、未曾有一畝之田也、故大守毛利公、嘗相其地謂可以大開土地、奮然欲立不朽之業、貞享二年乙丑九月之望、始執鋤就業、是爲靈元帝即位之二十三年、越三年、丁卯十一月捍潮堤成、乃大興役、民不以爲勞、皆爭赴之、日就月將、開地若干、滄海變爲平田、然以其事重大、未及觀大成、公以元祿二年己巳四月十七日、卒於江都麻生邸、享年五十有一、諡泰嚴公、公諱綱廣元就公五世之孫也、其有功民事甚博、而享年不長、人皆痛惜、其子壽德公、青雲公相繼承業、又從事於茲、而後大告竣功、蓋自創立至此、終始十有七年而成、以巖嶋神爲總開墾地之鎮守、修社殿落之、以終泰嚴公之志、是爲東山帝即位之十五年、實元祿十四年辛巳三月十七日也、壽德公諱吉就、元祿七年甲戌二月七日、卒於江都櫻田邸、享年二十有七、青雲公、諱吉廣、寶永四年丁亥十月十三日、卒於江都櫻田邸、享年三十有五、爾來地益開、民益殖、家足人給、炊烟不斷、雖凶年飢歲、無復菜色之患、所謂盛德至善、民之不能諉者、其在斯與、其在斯與、鹽田凡二百三十四町、分爲四、曰古濱、曰鶴濱、曰中濱、曰大濱、皆以漸成、而古濱之成最居先、其民四十戶、不墾咸舊之懷、相與俱謀、明治十有八年十一月行二百年祭、以當數也、又欲傳之不朽、建碑、乞銘於餘、銘曰

偉哉田切 庶民來同 千呷干歎 溝瀆維通
 其黍其稷 既稼既穡 盤利亦多 民悉貨殖
 和樂且湛 慶迨仍孫 三公一德 永世不諼

明治二十年丁亥八月

浪華

關 延永 謹撰
波部 敬 書

三) 文教及武事

防府の三田尻は、水陸の要港なれば、毛利氏水軍の府を此に設け、警固方を置き専ら船艦の事を掌らしむ、享保年間、河野養哲と云ふ者あり、勝間の人にして又警固の吏なり、人と爲り磊落不羈、廉潔汚れず、高く節を持す、最も讀書を好み、遂に家業を棄てて醫となる、然して醫も亦樂まず、則ち其居を塾とし子弟を教養す、節儉自から奉し教導道あり、遠近翕然としてこれに歸す、小倉廊門、山根華陽、小田村郎山等、嘗て其陶冶を受く、養哲死に臨み遺囑して官に告げ其家を以て長く習學の所となさしむ、官家之を偉とし命して其志を終へしむ、これを越氏塾と云ふ、三田尻學校の濫觴なり、元治の後文武興隆に際し、同地御茶屋筋船頭町に移轉し、名を講習堂と改め、擊劍銃陣をも練習す、養哲の後飯田樂軒、吉田順庵、吉武江陽、吉賀信齋、今津桐園等、相次ぎてこれを督し、宗藩學校の一にして年を経ること百八十、維新後に及ぶ、華浦學校は其跡にして其構内に養哲の碑あり、碑文(略す)は藩學館祭酒山縣孝儒の撰にして、銘は左の如し

千駟不祝、

一瓢安貧、

育英樂賢、

諄諄誘人、

矜式鄉黨、

遺德日新

右碑石の傍に小碑石あり、参照のため其全文を左に掲ぐ

防府之地、當百八十年前、首唱文教者、爲養哲河野先生、先生之歿後、以其家塾爲郷校、命曰越氏塾、以河野本姓爲越智氏也、越氏塾、連綿繼承近于元治、後曰講習堂、曰講習堂、遂曰華浦小學、先是、先生之碑、與塾共移轉者二回、於是、復移之於新校之地、時恰建碑之後百五十年也、町長吉武昌作校長居田泰輔之兩氏、專闢與干事、蓋在欲使人知防府文教之沿革、其志可謂篤矣、余亦贊此舉、記以告後人、

明治四十一年十月四日 男爵 榊取素彦撰

寛永五年、右田毛利氏文武の稽古所を創設す、學文堂是なり、後に本教館と改稱す、延寶年中、山縣良齋聘せられて生徒を教養す、正徳享保の間領主毛利廣正瀧鶴臺を聘す、鶴臺の門に若月大野あり、亦久しく學を督す、嘉永二年領主更に大田稻香を聘す、稻香建議して校舎を修築し、遠近從遊す、擊劍に至りては今田範之助擔當し文武蔚然として邑學の最たり。

文久慶應の交領主毛利氏牟禮村田合(今の牟禮小學校の敷地)に和漢の學を修め武技を練磨する場舎を設く、名けて進徳舎と稱し、子弟を教養し維新に及ぶ、當時の教職は徳永恭平、鈴木靜雄等なり、因に恭平子弟に與へたる歌あり、左に誌す

怠たらずふみ見てはらへ國にさへ虫の巢をくふ時節なりせば。暗くとも遂に岩戸をわけゆかむかたき勉めを強てつとめば。

國學者としては、弘正方、尾古重伴、鈴木直通等あり
 安政以後、國論沸騰し、人皆一大擾亂の免れざるを期す、此時に當り、我防長の少壯は、士庶の別なく武事を練磨す、社寺の鐘磬を鎖して、武器を造るに至れり、銃鎗の製造者亦所々に起る、防府の如きは、吉武伊三郎は銃砲に従ひ、矢野茂俊は製銃造刀を事とす、因に茂俊の作る處の刀にして最大なるものは、

鶴の首作り及長五尺三寸忠二尺八寸其量三貫五百目あり、此大刀は藝者に山雲大社へ奉納せり

第五章 美術工藝及特種工作物

(一) 繪 畫

南宗の畫風を學びて名あるは矢野等山なり、笠山三田尻の人、別號は竹香山民及留雲癡齋と稱す、其畫は文人畫の趣に富む、弘化二年歿す、其門に出づる林靖及釋公壽亦名あり、公壽は、光明寺住職にして半雲と號す、林靖は百非と號す、山水を善し且山鹿流の兵書に通ず

丸山派の畫を學んで今應舉の名あるものを森寛齋とす、寛齋向島の人、石田氏の出なり、別に畫三味齋と號す、少にして應舉の高弟森徹山の門に學ぶ、徹山其技を賞して義子と爲し、旗幟を京都に建てしむ、資性忠厚勸王の志深く國事に盡瘁せり、維新後畫運復興の世となりしも、名家多くは逝きて、京阪の間應舉の正派を傳ふる者獨り寛齋あるのみ、是を以て名聲益々高し、明治廿三年始めて帝室技藝員の設置あるや、寛齋其撰當る、廿七年六月八十一歳を以て逝けり、寛齋能く應舉の妙趣を咀嚼し、巧に山水花鳥を描けり

(二) 陶 器

●佐野燒(一名右田燒)は傳へ曰ふ、往昔仲哀天皇神后皇后熊襲を征伐し玉ふ時、御船を大崎の地に寄せられ、澤田(二宮の西)の長に命じて高田(姫山の麓)の土を以て三足の土鼎を作り、神供を炊き盡に盛り、玉祖神社に供へて御軍の前途を占われしごと、同神社の古文書に佐野の舊家内田鐵之助が藏せる舊記三田尻宰判風土注進案に見ゆ、是れ則ち佐野燒の濫觴にして實に一千七百十四年前なり、初は専ら土鍋土器など作りしものなるが

後には主として壺を造るに至れり、古代は型を用ゐず唯粘土にて手作の素燒なりき、慶長年間毛利輝元郷入國の比には、既に大窰二ヶ所小窰四五ヶ所あり、其二ヶ所の大窰を宮窰前窰と用ひて其に窰床は免租せられたり、維新に至りて廢せらる、而して世運に伴ひ種類及製造法も變遷し、土鍋壺の外に、火鉢井側風呂側土瓶飯鉢其他日用品を製造し、手作の外更に轆轤据型造りを發明して、黒燒又は青銅に類似する光澤色彩を施せる精巧品を調製す、二三十年來、工事頓に發達し、大窰八ヶ所小窰三十七ヶ所増築し、素燒の外油掛の品をも造り、大阪以西九州地方へ輸出し、土管等の如きは朝鮮、大連地方へ輸出するに至れり、此地斯業を營むもの現今九十六戸の多きに至れり、製造品の價格毎年五萬圓以上となるの盛況なり、願ふに精良なる陶器を出す地は、夥多あるも起原の遠きは恐らく此地の右に出づるものなからん

●末田燒(一名牟禮燒)は天明八年、佐野村の内田善右衛門なる者、末田の土質陶器に適するを認め、宇堀越に來り一の陶窰を築きて斯業を創む、領主毛利氏土地を興へて之を奨勵す、然るに時勢の非なるに會し、寛永五年衰替其極に達して、廢業の止むなきに至りしが、翌年其二子來りて再興を謀り、經營幾多の困難を凌ぎ、漸次隆盛に赴くを得たり、其子孫業を繼承し今日に至る、製造戸數四十、香窰二十四、間數百四十五にして従業者男百二十五人あり

●西浦燒吉田東一氏の經營なり、品質精良にして萩燒に劣らず製品高多からざるも販路は至つて廣し、西浦燒の聲譽高く、愛好者甚だ多し

(三) 驗 温 器

柏木製驗温器 柏木幸助氏は、地方の舊家にして世々藥種商を營めり、氏性篤實にして考案耐忍の二刀に富む、且機を見る敏なり、縣下實業及工業界の模範として尊敬を拂ふべき價値あり、少にして藥學を卒業し、弱冠已に「マツチ」製造法の研究を重ね遂に安全「マツチ」の製造法を發明製造し、大に地方に益を與へたり、而して氏は醫療上の要具たる驗温器が、外國輸入品なる上に價格の廉ならざるを以て、使用を望む者も購求に困む輩の尠なからざるを慨し、明治十四年七月これが模造を企圖し、焦



心苦慮すること二年有餘、遂に成功の端を得て、邸内に工場を設けて製造を開始せり、其價格低廉なるのみならず、輸入品に劣らざるを以て、販路日々廣まり供給の不足を告ぐるに至る、

依て屢々工場を増築し、製品も益々精良となり、内國勸業博覽會(二十八年と二十六年)より二等賞牌を、四十二年名古屋に開催の聯合府縣共進會よりは、有功賞金牌を受るに至れり、販路は帝國内及清國布哇其他の外國なり、一ヶ年の製造高拾萬個以上の上に上り、種類は五十種以上に及ぶ、是を以て外國輸入品は、殆んど跡を絶つに至れり、我國人由來模造力に富むも、未だ驗温器を製造し得たる者なし、氏にして能く之を製造せり、國利尠ならず。

(四) 工作物の改良及發明品

防府の地、工業上、在來の品に改良を加へ、又は新し實用品を發明せしもの尠なからず、今製作權の特許を得たる者、二三を

左に誌し世に照介す

●尾中式改良上戸 發明者尾中清之助氏は、防府町の人なり、數年酒類醸造業に従事し、樽詰の際、上戸(漏斗)の不完全なるが爲めに、如何に注意を加ふるも、清油の溢失を防ぐこと能はざるを遺憾とし、専心工夫を凝らし、遂に完全無缺の上戸を發明し、明治三十五年專賣特許(第五八七〇)を得たり、此器は在來上戸に改良を加へたるものにして、其取扱は簡易なり、而も仕事の成績は、既往の操作に比すれば、雲泥の差あるのみならず、何人も安全に使用し得らる、其溢失の液汁なきを以て、全國の斯業に従事する諸家に於て、悉く斯器を使用するに至れば、國家に利益を與ふること、莫大なるは言を俟たず

●吉岡式靴下 一名八徳靴下と稱す、是れ使用上八徳あるを以てなり、發明者吉岡助次郎氏は、防府町の人なり、氏は普通の靴下に改良を加へ、便益なる品を發明せんとして、多年研究の結果、遂に成功し專賣特許(第一九〇三號)を得たり、試に使用せしに實に八徳の名に背かず。

因に、靴下製造者に於て、製造發賣權の分與を望まば、其請に應ずることなり、志望者は照會すべし

●長松式糶摺臼 發明者長松舛次郎氏は、防府町の人なり、氏は在來糶摺臼が、多人數の力を要し、且摺出したる米粒に、麩米多きを慨し、輕便にして人力を省き、麩米の少なき臼を發明せんことを企圖し、多年研究を積み、遂に善良なる糶摺臼を製造し、專賣特許を得たり、之を在來の臼に比すれば、其効果磨場の差あり、使用甚だ輕易にして、糶摺歩合多し、故に此臼を使用すれば、米粒に損傷なく、産額従つて多し、且此臼は、耐久力に富むと、實に國家經濟上の良發明なり

●自轉車乗用羽織袂 發明者は中村源兵衛氏、右田村の人なり氏は和服着用の儘、自轉車に乗りたる時、羽織の裾を帯に挿むが故に、皺を生じ、体裁を悪くするを患ひて、此器を發明し新案登録(第二〇九二二號)を得たり、今此器を一見するに、体裁優美にして高尚なり、和服にて自轉車に乗る者の、必需品なりと、平素ハ、書類等挟み置く便あり。

●福永式稻扱機 發明者福永章一氏は、牟禮村木部の人なり、氏は體質弱き爲めに、高等の學科を修め得ず、少年身を風月に寄せ、千家古流三宅松巖の門に入り、生花を學び、其奥儀を究め、松樂齋と號す、此他茶道、禮法、築庭、盆景の道に通せり然れ共氏は、之を好みて學びしにあらざ、實に養生の爲めに出るなり、天性巧智、曾て自轉車に乗り走る時、「スポーク」に稻穂掛りて、其軋を落すの状を見て、以爲らく之を稻扱に仕組むことを得ばやと、是れ本機發明の動機なり、苦心考究遂に成功し、專賣特許(第九六二二號)を得たり、此稻扱器を使用すれば切穂又殘粒なく、且一時間に、六七十把以上を扱ぎ落すは容易なり、而して少しも親及腿を損傷せず、且麥扱に使用し得らるるを以て、農家に便益を與ふること多大なり。

因みに、氏は見臺(木立)付雜糞を發明して、實用新案登録を受け居れり、學校生徒に缺くべからざる發明品なり。

●宮本式自由水閘 發明者宮本浦太郎氏は、牟禮村堀越の人なり、氏は此水閘を發明せんと思ひ、明治三十二年頃より企劃し種々工夫を凝したる甲斐ありて、開閉自由なる、用水増減亦極めて自在堅牢、且掘付の至便なる品を、製造することを得たり彼の膠溜にして平坦なる地に、暗渠を布設し、水の疏流を計るは、至難にして殆んど絶望せられしものなるも、此發明の平坦

水閘を用ゆれば、容易に其目的を達し得らるべしと、猶高低ある場所には、高低水閘あり。

(五) 果樹養魚養鶏

●果樹園は、右田村の桂江良農場を以て最とす、同園は、縣下一二の地位を占め居り、桂榮氏の經營にして、明治三十七年の創始なり、耕作地反別凡七町歩あり、栽培果樹は、桃最も多く、全地の半以上に度たる、之に亞くを柑橘類とす、其他苹果葡萄枇杷等夥多植栽せり、桃李開花の時節には、遠近杖を曳き來りて觀賞するもの數千を以て計ふるに至る、又松杉檜桑等の苗木各數万本を養成しあり、何程にても需に應ずと

●養魚池として記すべきは、三田尻町藤井清一氏の經營する右田村大崎東谷の池あるのみ、同池は元山口縣水産試験養殖地として、明治三十六年四月設置せら



藤井清一氏肖像

れ、其反別壹町五畝廿歩あり、當時の目的は、當該鯉(約壹寸)を稻田養殖試験の爲め、縣下人民へ無償配付するにありし、然るに明治四十二年六月二日より前記藤井氏の個人營業となり、引續き鯉の養成を爲し、廉價を以て需用者に供給せり、側ら鰻スッポンも販賣をなせり。

●養鶏は、牟禮村秋山盛禽園を以て、防府吾縣下第一とす、同園は、明治廿五年よりの經營にして、次第に規模を擴張し、數棟(貳千有餘坪)の鶏舎を築造し、實用に適する良種白羽を撰びて飼養し、各地の需用者に供給しつゝあり、同園には此他に愛玩用の禽鳥類夥多あり、同氏を訪ふて觀覽する價値あり。

第六章 名所舊蹟其他

◎縣社 松崎神社

本社は 天神山の南麓にあり、延喜三年の草創にして、太宰府北野其他神廟天下に充滿するも、其建立は悉く本社創建の後なり、故に本社は常廟創建の最第一とす、巍々たる神殿は崇高の樓門内に聳へ、廻廊は拜殿の左右より起りて、樓門の左右に到る、蒼くに青銅を以てし、塗るに丹桐を以てす、輿輪宏壯況や幾多の喬木老樹の社頭に蒼鬱たるあり、森嚴自ら存し幾千萬人の尊崇參拜する者跡を絶す、延喜元年菅公鎮紫に赴かせらるゝ時、勝間浦に御舟を繫がれ、國府の旅館に留滞せらるゝ酒垂山(天神山)は、殊に勝れたる處にてあれば、人々誘ひ問ゆるに任せて登臨せられ、思はず其眺望の珍らかなるに、遣方なき御體憤をも強てなくさめられしならん、其際に御腰を石上に掛けられ、風光の明媚を賞せられ、我は如何なる地に死するかを知らざれども、魂は此地に留れんと語られたりと、此御腰を掛させられたる石は傳ふる所によれば、今の社殿の後にして、練堀内に在り堀外に、平安智川恩(享和二年壬戌春正月)誌す處の、碑にても知らる、其文に、此爲菅神嘗所坐之石也云云とあり、故に現今の社地は菅公所留魂の地なりと爲すべきなり。

社地は 社殿草創以來東佐波令に屬せしが、明治十二年十二月神社の宅地七反三畝廿歩の外に、宅地壹町三反八畝十五歩及び畑地二反一畝三歩、田地一反二十九歩、計二町三反五畝廿七歩は、宮市町へ分割せり、然して、天神山は依然東佐波令に屬せり本社保存金 明治四十四年末には、壹萬圓に達す。

(第二篇第三圖及四圖参照)

◎祭日 新年祭 一月一日二日三日 ●元始祭 一月三日

●新始祭 一月五日

●射的神事 前同日

●月次祭 毎月一日廿五日

●祈年祭 二月廿五日

●春祭 三月卅日卅一日

●金結祭 五月十七日

●御田植神事 六月卅日

●名越神事 前同日

●大祓式 六月卅日五月廿日

●御誕辰祭 八月三日四日五日

●秋祭 九月廿五日

●新嘗祭 十月廿五日

●神幸祭(大祭) 十一月望日

●例祭 十二月五日

●節分祭 節分日

本社の後次に次の三末社あり、(中央)老松神社、若松神社、(乾)木工社、須賀社、松尾社、(良)愛宕社、和殿惠美須社、稻荷社、本神の坤位に春風樓の聳ゆるあり、巽位に神苑の雅なるあり、此所に到れば、宮市の街屋は脚下に連り、三田尻の市橋は眼前に簇がる、茫漠たる廣野には人家星散し、渺漫たる周海には、嶋嶼密布す、忽ち汽車の出入を眺め、俄に汽船の往來を望む、双眸に映する景光は万人の齊しく歡賞する所あり。

春風第一樓 八間四面あり三階建なり、其座下には木を組み且精巧なる幾個の彫刻物あり、これは往年社地に五重塔を、建設する計畫あり、其臺基に供する爲めに遺作せしものなるが故ありて塔の建立を中廢す、明治七年斯樓の創建に付、此臺基を利用す。

(第二篇第六圖参照)

◎佐加大利公園 (一に酒濁公園)

本公園は、天神山の南半面反別約五十町歩の山地を、明治十八年許可を得て設く、一に天神山公園と稱す、園中に一池二瀑三臺四橋五亭あり、作間鴻東之に命名す、今其記文を左に誌す

名酒濁公園勝地記

作間 鴻東

酒滴公園者、在防府天神山、以全山爲園、故稱天神山公園、園中有一池二瀑三臺四橋五亭、修築竣工、監工者見徵名干余、余辭曰、菅公留魂之靈地、一木一石、神威所加、俗人何漫得名哉、監工者不肯、強要再三、余翻以爲、有物必有名、名自然而存、與物以自然之名、何憚之有、因諾之、菅公照顔之水、名曰水鏡池、菅公登障之丘、中央之高者、名曰崇高臺、東方之幽者、名曰凝美臺、西方之廣者、襲用鐘秀臺之舊名、皆從登臨之實景而名也、山既稱天神、天有日月四時、故二瀑、一名金鳥、一名玉兔、合之稱明泉、亭名尋香臥綠戀月聽雪、尋香亭在梅林之裏、臥綠亭在松樹之下、戀月亭在巨巖之傍、聽雪亭在深谷之間、別在明泉之前者、名明泉亭、架金鳥瀑下流者稱綵虹橋、架玉兔瀑下流者、稱清風橋、半入翠烟者、稱半煙橋、如渡白雲者、稱白雲橋、風雲烟虹、亦天象之自然也、余已付勝地以自然之名、來遊此園者、大人大得、小人小得、各因其所得、而自別名山水、亦不妨矣、若夫登山頂而下瞰、千里豁然、田野遠拓、煙波接天、四國九州、隱見渺茫之間、眞是造化之偉觀、誰得而名焉哉、

奉祝 皇太子殿下御成婚紀念碑 鐘秀臺の上邊に在り、御結婚の當日地方の官民數百名、此臺上に相會し、杯を擧げて遙かに祝意を表せり、依り斯碑を建設せり。

木鐘庵 昔、梶原景時、鎌倉を逃れて、長門國阿武郡川上に、隠れ住みし時營みし者なりといふ、後に萩町の兒玉某の庭に移し、明治の初年横沼素兄更に茲に引來りしなり。

酒垂岩 延喜三年十月十五日、國司土師信貞、菅公の託に依り同四年甲子二月、社殿草創の際に當り、衆多の工人等、山の中に水の乏きを憂苦せり、然るに、社殿建設地(今の松崎神社の社

地)の良位に當り、巨巖ある溪澗あり、茲に滾々清水の滴たるを認め、汲めども涸れず、衆皆喜んで之を飲みけるに、其味は全く酒なり、諸人皆以て神徳の致す所となし、感奮して工事を勤めり、これより後溪を酒谷と呼び、岩を酒垂岩と名け、山を酒垂山と稱すと傳ふ、岩の前に鳥居あり、天保十一年庚子二月の再建なり(第二篇第十五圖参照)

此他、寄居芳樹翁紀念碑、木鐘庵の碑等あり。

●淨土宗普門山定念寺

本寺は、もと西念寺と稱す、永祿年間、安達社心譽上人の開基なるも、火災に罹りしため、記録焼失するを以て、詳細を知ら難し、現今の堂宇は、天明年間の再建なり、明治四年、西念寺末六ヶ寺及淨土宗正定寺を西念寺に合併して、定念寺と改稱せり、中本寺格鎮西派に屬し、智恩院末なり、創始より明治四十四年まで、年を経る參百四十餘年、代を累ぬる廿一代なり、檀家、五百五十餘戸(第二篇第廿一圖参照)境内坪數二百二十坪、本堂 五十九坪、附屬建物 百六坪二合五勺、寺領 田反別七反四畝廿九步、保存金高七百餘圓

境内の佛堂に安置せる、三十三体の觀世音菩薩は、永祿年間當寺開山心譽上人の感得に依りて、安置せる靈像にして、恵心僧都一刀三禮の靈作なりと、其彩色彫刻の巧妙なること、殆んど其の比を見ざる所なり、就中文祿年間には、長州毛利公の御懇請に依り、長門萩町蓮池院に於て三十日間の開扉供養あり、又京都知恩院大方丈の問よ於て、貴顯の拜覽ありし時、知恩院大僧正歎稱して曰く、恵心僧都の作にして斯くも、三十三体御揃ひの、觀世音菩薩は古今其の比を見ず云云其際信者の懇請に依り、京阪間に於て約一ヶ年間の開扉を爲せしことあり、殊に毛

利英雲院公の御信仰淺からず、毎度御参詣わつて其都度、奉納品夥なからずと云、爾來二十一年毎に開扉供養、營めり。

◎曹洞宗滴水山成海寺

本寺は新町北裏にあり、元和八年の創立にして、信徳山寶成庵と稱せり、明治十九年有田玄法師住職(第廿世)となりしより、經營慘怛明治廿二年三月、參州豊川稻荷を勧誘して、稻荷堂を建立し、明治三十年本堂を再建せり、本堂は、十一間半四面の大伽藍なれば、大に舊觀を改めたり、故伊藤公爵大に賞賛せられ



(師法玄田有職住寺海成)

明治三十一年、滴水成海の額字を贈與せらるこれによりて、昨明治四十三年十二月廿五日、寺號を滴水山成海寺と改稱の儀を出願し、本年四月十日認可を得たり、本堂の外書院(約十坪)を新築し、位牌堂(約四十坪)を建設し、庭園(二反歩)を築造する等の事あり、師は實に本寺の中興僧なり。

(第一篇第二十三圖参照)

◎曹洞宗護國寺

本寺は、慶安三年九月廿日の創立にして、本尊は華嚴釋迦無尼如来、左右佛は、文殊普賢兩菩薩なり、境内反別二反歩にして、本堂四十二坪餘、庫裡六十二坪、附屬建物、十四坪なり、外に境内に觀音堂あり。

◎私立曹洞宗第四中學林

本學林は、東佐波國分寺山に在り、明治三十七年七月の創立にして、學區ハ山陰山陽四國九州一圓なり、認定指定は明治三十八年にして、宗外生入學許可も同年なり、創立以來の卒業生は百六十三名あり、現在生徒は二百六十二名(内宗外生百五名)教職員は、十八名寄宿舎寄宿生百二十五名なり、

(第二篇第三十四圖参照)

◎眞言宗淨瑠璃山法華寺

本寺は、東佐波合隱内にあり、光明皇后の勅依り、天平勝寶九年國分寺と同時に創立す、古來の堂宇破壊し、天保十三年中再建せり、宗派は高野派に屬し、別格本山國分寺末なり。境内は六百三十七坪ありて、本堂四十九坪、庫裡其他三十二坪あり。本尊地藏菩薩は行基菩薩の作なり。縁日は毎月十四日廿四日なり檀家八十二戸あり

◎眞言宗淨瑠璃山國分寺

本寺は、古儀派にして別格本山なり、往昔、聖武天皇、行基菩薩に勅し、毎國に金光明天王護國寺を創建せしめ以て、國家を鎮護す、本寺は其一なり、就中本寺は開基より明治の初年に至るまで、千百有餘年間、累代住職奉勸參内し、親しく長日御祈禱の論旨を蒙り、因て寺祿若干あり、維新の際之を廢せらる明治廿二年公爵毛利家より、廿三年内務省より、保存金各若干

金を賜る、文久元治の交まては、現今境内の耕作地と成り居れる所に、幾個の建築物あり、且樹木鬱々蒼々たり、楠樹の如きも、國道に沿へる塀内に數十株あり、幽邃玄靜の域なりしに、世勢の一變に逢ひ、悉く斧斤に付し、今は僅に兩株を門側に殘すのみ。●本尊藥師如來

金堂 境内の中央にあり、前面十二間横八間半里入呼で藥師堂と云ふ、天平九年春三月創建、爾後屢火災罹り燒失せり、現今の堂宇は、應永廿八年大檀主大内多々良朝臣持世再建、明治四十四年迄四百四十六年

聖天堂 古來の堂宇破損し、元祿十五年壬午歲、毛利吉廣再建(三間四方)明治四十四年迄二百十年

仁王門 往古の門破壞し、元祿五年三月毛利輝元再建、(前面五間横三間)明治四十四年迄四百四十六年

客殿、庫裡、文室、長屋、寶藏、道具藏、浴室、廊下は、明治四年中齋藩主毛利家より再建

所藏の什器及寶物は、第二篇國分寺圖の前頁に載す。

●村社 佐波神社

本社(元金切宮)は、仲哀天皇熊襲御親征(一千七百有餘年前)の當時天照皇大御神、外十三柱の神を。招請祭り給ひしが、始めにて、神功皇后三韓御平定の後、又報賽せられ、皇國鎮護の守神と崇め祭り給ひける、應神天皇の御宇、勅を請て社殿を建て、總社金切宮と崇敬し奉りしより、周防の國司、本社にて國內の官社を齋ひ祀り、周防國々總社として奉祭し、近く弘化の比まで祭日には舊儀に因り、數種の神饌を献り來れり斯く、國司の奉祀せし總社にして、神威千古に互り、炳然嚴然、實に尊むべく畏むべきの故に、明治四十年六月、濱宮神社、八幡宮、日枝神

社の三社を合併して、佐波神社と改稱せり、(第二篇第三十五圖參照)本社鳥居の西側に。本社の由來を誌せる石碑あり左に其全文を載す

佐波郡總社邑總社金切宮

社記及古老の傳を考るに往古 仲哀天皇の御代筑紫熊襲叛て貢奉らす 天皇自熊襲を征ひとして筑紫に幸す時國縣主祖熊襲此由を聞て當國佐波浦に參迎て飯順のしるしに三種寶物又魚鹽地を獻れり是以て天皇思食さく熊襲征けの初め吉祥なりとして此所に 天照大神 月夜見命 素戔鳴命 稚日女命 級長津彦命 級長津姬命 保食命 表筒男命 中筒男命 底筒男命 大己貴命 事代主命 經津主命 武甕槌命凡十四神を招請て寶祚勳なく熊襲征けのため殿に祭りて後筑紫香椎宮に到て軍を讀り給ふ時神等降て神功皇后に託て誨へ給はく此より西に新羅と云國わり熊襲と新羅と力を合せてかく欺けるなり若能神々を敬祭り給は、乃に血ぬらすて其國服ふへしと誨へ給へとも竟信すて忽崩ましぬ故皇后天皇の神を慢て早崩ましを悔て齋みして其誨へ給ひし神等を知らむと神託を請給ひしかは先日當所にて 天皇の祭り給ひし神等なり故神託のこと恭祭給ひて熊襲を伐しめしかは時を移さずて服ひぬ 皇后群臣と策りて輒く韓國を征平けて後海路より京に還ます時當所にて 天皇の祭給ひし神等の熊襲及新羅を討しめ給へる御蔭を恐みて御舟をよせ賽の勢昂を奉り皇國鎮めの守神と崇め給へりとぞ爾後三韓は西方金位に當ると云漢語にて西を切平けし意にて金切宮とは稱すと云り昔國司其任國に下りては必先部内の社を巡拜まるゝ恒例たり故常は國府に近き社にて國內の官社を合祀るゝ故總社と云とそ今に郷名を總社と云ふ此近郷者奈其東大寺領となりても舊式に因て祭

日に數品の神供を献られし故今以是例なりとを御社往昔高畑と云所にありしを神託によりて此所に遷しけるとなれ舊社の跡今尙多夫の樹有て枝葉茂れりも、嘗社はかくのごとく由緒いぢゆるしきみやしろなれば世舉りて仰ぎ敬ひ奉るべきは申すもがしこきことになむありけし是以て産土の衆人思起して神主鈴木定秋と共に議りてむらいに彫りて永世に傳へむとして余に記及傳の旨趣をかきつゝりてよと切に需るによりて弘化の四とせと云年の長月鈴木直道敬啓

石文のまゝを

かしこきやから國むけて多良志姫いはひましける金切の神附記 兵庫縣池田伊舟の川土手の古石碑に、日本國中一の宮神社號を彫刻せる中に、周防國一の宮は、金切宮とあるによれば、往古は、本神社が周防國の一の宮にてありしかと、思はる。

祭神 天照皇大神 素戔嗚命 三穗津姫命
相殿 級長津彦命 倉稻魂命 表筒男命 中筒男命 底筒男命 大己貴命 事代主命 健御名方命 武甕槌命 經津主命(以上元金切宮) 田心姫命 市杵鳥姫命 湍津姫命 豐玉彦命 保食命 級長津彦命 級長津姫命 水分神(以上元濱宮) 大山咋命 大己貴命(以上元日枝神社) 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后 武甕槌命 經津主命 兒屋根命 比賣神 素戔嗚命(以上元八幡宮)

茲に、を附したるは元金切宮の祭神と同一神なるを表示す

祭日 例祭四月二日 ● 祈年祭 五月廿五日 ● 秋祭 十月九日

● 新嘗祭 十二月十一日 ● 公式祭、月次祭は、宮中の御式に準ず

参考の一 濱宮は、勝間の三間屋にあり、景行天皇十二年七月

熊襲反して朝貢せず、天皇乃ち親征筑紫に行幸し玉ふ、九月五日佐波浦に到り玉ふ時、女賊神夏磯姫一國の魁帥たり、奏して曰く、我屬類將に徳に歸せんすとす、唯殘賊四人あり、願くは急に之を討玉へと、天皇乃ち田心姫外六柱の神を奉祀し、四賊及熊襲を討平し玉ふ、依て此地を勝間の浦と稱し、社を勝間宮と號す、建久以來東大寺の所領なりしが、慶長年間に至つて、毛利氏の所領となれり、然るに古例に依り祭日には該寺より神饌を進献して闕す、維新に至りて之を廢す、又安永五年、毛利氏勝間浦を、開作の時、成功を禱り後公費を以て社殿を建立せり、爾來毎歲、神饌料を奉獻せられしが、是亦廢せらる、又古傳に、享保十八年、本郡稻虫の害甚しく、牛馬其藪を食ふもの、多くは疫死せり、依て本社へ祈請し牛馬を社參せしめしもの、皆其疫を免かるを得たりと云ふ、此より防府總鎮守濱宮五社大明神と稱せしとぞ、明治四十年六月金切宮へ合併せり。

参考の二、日枝神社は、柳水の東にありしが、社地公爵毛利家の所有となりし故、移して南明庵(本寺の本尊は地藏菩薩毘河門天王にして往古琳聖太子所持の像なりしと天保十四年廢寺となり雲巖寺「今の極樂寺」へ合せり今に村人其地を呼で南明庵と稱す)に轉せり、明治四十年六月金切宮へ合併せり。

参考の三、八幡宮は、國廳に在り、天平勝寶三年、大和國手向山より、勸請せる古社なり、國廳は、往古周防國の政廳の在りし地にして、中古國廳寺と稱する寺を創造す、東大寺の沙汰處なり、維新の前まで存在す、爾後は八幡宮のみ残りしが、明治四十年六月金切宮へ合併せり

◎ 多々良

本地は、大内家記録に、百濟國の王子琳聖太子と申せしが、日

本國周防の多々良の濱へ、定居二年云云、又中國治乱記に、琳聖太子、本朝欽明天皇の御時、日本に渡り、多々良の濱に居住あり、種々の珍寶を奉獻ければ、則多々良の姓を賜り云云とある、其多々良の濱の地なり、往昔、多々良の地域、廣くして岸津に至るまでありたりと傳ふ、其當時は、地域海水に瀕せり、依て多々良の濱とあるなり、土地、白砂を交へ清潔にして、地勢高く、防府の好景一眸の中に在り、明治十七年、多々良山及山下一帯の地が、公府毛利家の所有となりしより爾來、山下の中央に當り最も眺望に富める地と、新邸を經營せらる、其規畫壯宏今猶工事の半に達せず。

今多々良の地にある、古蹟二三を左に誌す

巖岩 西多々良山の頂にあり、往昔、松崎神社の大鳥居を造りたる殘石なりと傳ふ、其下に夫婦岩、天狗岩等あり。

岩地蔵 西多々良山にあり、長さ十有餘間の大磐石に、彫刻したる地蔵尊像なり、此地地蔵尊は、古昔弘法大師の親しく彫刻し玉ひ、靈氣新なるを以て、中古以來諸人の參詣する者夥し、村人毎年祭祀し來りしが、其地毛利家の所有となりしより、參詣者跡を絶てり。

大佛堂 東多々良に在り、座像にして高さ一丈餘あり、俊乘坊重源上人の創作なり、昔時は、結構宏大にして閻浮山辻福寺と稱せり文龜二年壬戌の歲、祝融の災に遭ひ、佛軀半燒せり、永正十六年己卯歲、僧慶文ある者、之を修飾せり、享保十年堂宇を再建せしが、其地公府毛利家の有となりたるに依り、移して東方半町餘の所に轉せり、(元は國道矩折の上側にありしなり) 柳水 多々良山中央の麓にあり、名水なり、往昔、柳木の大水ありしと云ひ傳へり、神功皇后、征韓御發向の際に、此水流に

薙刀の刃を洗滌せられし所にして、溪の形亦薙刀を逆にせし如く見ゆると云ふ、中古九州國主參府の節、鎗刀等の刃を洗ふ、是其向後銷蝕せずと云ふに依る、稀世の麗水なり、其東に胡山寺と云ふ寺の在りしが、往昔は、七堂伽藍の梵刹なりし、遠く今の國道を南に越へて仁王門を立つ、今に地名に仁王田と云ふがあり、其當時の道路は多々良山の北よして、今の畑畔にてありしと云ふ。

獅子堂 佐波神社の東側にあり、松崎神社、大祭日の行列に加はる、木製朱塗の大獅子を納むる堂なり、二三十年來此儀廢せられしより、今は此獅子は同神社の寶物庫中に在り、堂のみ存す

● 國衙

此地は、文治二年、詔して南都東大寺の僧俊乘上人重源を以て周防の國司職に補せられし時、國府を置き國政を行ひし地なり爾後、法胤職を襲くこと三百七十年、此地千石を以て東大寺の采邑とし、良は南明寺、巽は牛の森、坤は大師堂、乾は十王堂を以て境とし、八町四方の内悉く奈良領と稱せり、其中央八幡社に、八町石と稱する石あり、今猶存せり、文明四年國府火災に罹り諸文書皆燒く、大内左京大夫政弘更に領地先例に準し、收納せしむるの印書を興へり、毛利氏、防長二州を領するに及んで、國衙の地、數百石を東大寺に寄附せられしといふ、明治二年版籍奉還より、王政に歸す、今國衙の舊蹟を左に誌す

國廳の碑 八幡宮境内、數百年を経たる松樹の大木、散點せる中に建設ありしが、明治四十年、八幡宮の金切宮に合併せる後、樹木は斧斤に付せられ、碑石も抛例するの時運に接せり、有志者之を慨して、夙に古蹟保存の計畫を爲し、同所に少許の地を得て碑石を安し、以て後世に遺せり、碑文は上司主税平重

寛の僣にして、安政七年庚申三月五日建立せり、其文に曰く、此廳、周防國守之遺應、而碑而二大字、東大寺今存海上人所書也、謹案、成務天皇五年、始置國造後改曰國司、又改曰國守、文治二年、詔以造東大寺俊乘上人、補吾周防之國守、自後法胤襲職者、三百七十祖、東大寺采邑、今猶存於此者、以是也、廳內有八幡祠、蓋天平勝寶三年、所遷自大和國手向山者、每歲九月三日、修祭、重寛家世任奉奉行、祭日代拜之使、亦忝命焉、嗟夫、古昔每國有廳、今也寥寥無聞、而此廳猶存、是豈可不記乎、因謹據典稽古、書其事於碑、以傳不朽

東林寺 元東昌院と稱す、南隣に法林寺と云ふ寺ありしが、明治四年、合併して東林寺と改稱す、東昌院の碑に曰く、周防國衛東昌院寺、東大寺子院也、建久五年、造東大寺大勸進兼周防國司俊乘上人草創、距今六百七十年云云、因に碑は、明治二年六月建設す

木船神社舊蹟 國廳の東隣、道路の東側にありたり、樹木鬱蒼幽邃の境なりしが、明治の初年、熊毛郡田布施村へ移せしより、今は變じて畑地となり、其故址を知るもの稀なり。

朱雀町 往昔、國廳造築の際前は、朱雀、後は玄武、左は青龍右は白虎とて、四神相應の地を作爲し、總て奈良帝都の制に倣倣す、其前而に、朱雀町を建てしより、今に至るまで其名を存せり

◎ 勝間

勝間は、東佐波合の小字なり、往昔、清原元輔、周防國守に任せられ、天正二年此地に於て子の日の遊を爲せり、歌あり曰く、千早ふる勝間の宮の姫小松老を手向て仕へまつらん

思ひ出よ千歳の春の今日毎に勝間の浦の岸の姫松
右歌中の勝間の宮は、濱宮(今は金切りに合併)を云ふなり

又勝間浦濱殿に建設する菅公遺蹟の碑文を左に誌す

● 鴨沼浦神蹟記

鴨沼浦、隸于周之津摩郡、菅公所維舟之地是也、謹考、延喜元年春、公之赴筑紫也、遊海而下、舟泊于此、大守土師信貞爲公族也、乃迎之而館焉、公雖留者數月、嘗觀于酒滴山曰、美哉山川、吾死之日、魂必歸于茲矣、其五月望、終饗而西、信貞及其臣藤井某清水某等、送至此所、後三年、公薨、是日紫雲自浦上起、連延酒滴山、信貞視而異之、無幾公之計至、越翌年、以公志、奏事於朝廷、建廟於此、以棲其神、自時厥後、每歲祀典、奉神輿于此來、信貞及二氏之後者從焉、其地南北五十餘步、橫半而有奇、世不稅之、以存其舊云、夫德之熾、思其人則愛及其樹、嗟乎菅公之遺蹟、豈可不表著乎、藩士某等、鑽仰之餘、捐財樹碑、邑人助其役而成、直乃採掇舊史以爲之記、

文化四十二歲次丁卯 飯田直謹撰 矢野允淳敬書

◎ 岩屋山

岩屋山は、鑄物師に在り、聯聖太子三世の孫、世農太子の葬地なり、石窟堅固、千体の觀音を埋む、窟中の廣さ六坪以上、高さ六尺以上なり、巨石を以て造る、天井の如きは、一枚の巨石を置けり、今猶本尊觀音の小石像、脇立の小石佛と共に、此中に安置せり、

◎ 海軍局舊蹟

本舊蹟は、北福聚町にして、毛利輝元公、本城を萩に移し、同時三田尻に水軍の府を置く、文久年間、制を改め、西洋に模倣し、海軍局と稱す、依て今に此地を局の内と云ふ、而して當時の情況は、左に誌す鐘銘の序にて、其梗概を知るに足る、碑文は、周防の吉田文獻の撰なり

附記 海軍局廢せられてより、數年の間、時鐘を聞かず、其後鐘は桑山大樂寺に移り、舊の如く時鐘を聞く

周府官船塲鐘銘并序

周府之爲地、我侯東觀、所從舟之要路津也、藩移封之後、置官船塲於此、維小大數百艘、新造修理大率無間日、舟楫之設、可謂盛矣、是以水軍兵士吏人舟子、群萃州處、百爾吏舍船器諸庫、森然臚列、群吏百工出入以時、於是乎、建棧於營作吏舍屋上、懸洪鐘報於關塲、聲聞數里外、故鐘元祿中所鑄、歷年已久、漸至毀損焉、上山泰昭、知縣以來、與復百廢、因請行國二相、(國行相益田越中藤原就祥相高洲平七平就忠)改作之、當此時也、侯狩于周南、留滯數日、以農隙講習武事、而褒賞孝子善行者、且屬鄉耆老賜酒食及金若干、蓋視耆老之意也、爲民之父母之心、其深矣哉、鑄匠設鑪冶日、適狩于牟嶺、路次狂駕、來臨鑄冶所、觀其作業、實安永五年丙申十一月二十七日也、於是乎、工人衆欣欣然有喜色、勉勵倍他日、竭力成功、新鐘發于銘、毫無毀損、豈有梁惠愛牛之憂乎哉、因誌其由、并題執事姓名、以傳後昆、且爲之銘曰、

鼓鐘千樓以報昏晨、當事官吏百爾工人、卯辰辰退待已述申、行于畫者促裝維續、守於夜者擊拆數巡、鼓鐘將將以警士民、茲銘勳績千秋日新、

安永五年丙申冬十一月 (以下略す)

◎ 郷社 老松神社

本神社は、三田尻新丁にあり、創立は、白雉三年壬子九月九日にして、佐婆氏之を祭り、同族の氏神とす、初め須佐神社と云ふ、其後貞觀十四壬辰年、境内に老松繁茂せるに依り、老松神社と改む、承安三癸巳六月、當時三田尻は院の御料地にして、

目代前以後守季助、御相殿の三柱を合祀す、寛保三年、明治廿一年の兩度、火災に罹り、寶器文書、焼失するもの多し。

祭神 素盞鳴尊、大己貴命、天穗日命

相殿 菅前道真朝臣、吉祥女君、菅原淳茂朝臣

祭日 十月八日九日 ●氏子千百戸

社有財産 田地九反餘と金六百圓

◎ 來目皇子殯殮地

皇子殯殮地は、桑山の山頂に在り、面積四坪、宮内省御用地に編入せらる、同皇子は、推古天皇の十年春二月、擊劔羅將軍に任ぜられ、筑紫に到り、烏郡に屯し、出征準備中、六月病に臥し、征討を果さず、十一年(千三百八年前)春二月、同地に薨せらる、天皇之を聞き玉ひ、周芳婆に質す、十師連猪手、殯事を掌せらる、故に其孫を婆連と曰ふ、明治三十五年、御殯殮地と確定せらる。

◎ 桑山招魂塲碑

碑は招魂塲の小丘上にあり、(第二篇第八一頁参照)畔面の全文左の如し

桑山招魂塲碑

陸軍大將兼議定官大勳位熾仁親王蒙顯文久慶應之間、國家多難、我長藩君臣、唱勤王之義、四戰敵愾、死傷相繼、人々且不測夕、於是、御楯隊及海軍諸士相謀、卜地桑山、各自堀土鑿石、以爲定窆之地、先收癸亥馬關之役、以降各地戰沒者遺骨瘞之、實乙丑之秋也、再後每有戰沒者、必葬祭于此、丙寅之秋、四境敵退、諸軍凱旋、御楯鴻城二隊、合爲整武隊、己巳之春、諸軍滅函館之賊、而海内兵權、一歸天子、於是、我君積年艱苦之功、始赫耀天下、戰役者祭祀之制亦定、庚午之歲、藩政兵制解除、解隊之後、則藩祭之、廢藩之後、則朝廷

祭之、令縣官司其典、以傳無窮、國家遇勅王之士、可謂重且厚矣、神靈宜以瞑泉下、頃日隊中同志之存乎今者、相議欲建碑明蹟末後世、使余作之銘、銘曰、

夙慨式微、憤彼跳梁、我公唱義、我武維揚、櫛風沐雨、將士遄々、戮血築骨、忘身勤王、王政復古、爰祀忠良、桑山高登、海潮天長

明治二十五年十月

樞密顧問官陸軍中將正二位勳一等伯爵山田顯義撰

從六位 岡守 節書

右招魂碑の臺地は、約方七間にして、砲彈二十六個を使用し、一間毎に之を置き、鐵鎖を以て之を綴りて外柵とす、其下傍に小碑石あり、砲彈柵の來由を記せり、其文に曰く

此紀念碑ノ外柵ニ使用セル砲彈ハ日露戰役順旅口ニ於テ敵艦ノ鐵橋ヲ破壊シ港内ノ戰艦ヲ轟沈シ以テ絶大ノ功ヲ奏シタル我廿八珊米突榴彈砲ノ彈丸ニシテ其距離ハ一里半内外ヲ最良トシ一筒ノ重量ハ約六十貫ナリ

明治四十二年一月建之

正三位勳一等功一級男爵寺内正毅
從四位勳二等功三級 池田正介

幹施者

曹洞宗放光山大樂寺

本寺は、桑山の東麓にあり、本尊は釋迦如來にして、開基は從五位下十師宿禰重枝秀貞なり、秀貞菅家頼姓に依り、朱雀院の御宇、勅願奉幣となり、宮市天神祭事の節當國へ差遣さる、仁井令(華城村)に住居せり、永徳辛酉年刑部左衛門泰昌西仁井令に大德禪院を建立し花香寺と稱す、其後重枝滅亡、寺亦兵火の爲めに灰燼となり、遂に古蹟となり居りしが、元祿二年右田天德寺

六世石秀峴和尚、重枝刑部左衛門の先志を追て、信者を募り一寺を建立し大樂寺と稱す、自後六百八十二年の星霜を経て、明治四年に至り、東仁井令日輪寺と合併し其山号を探りて放光山と号す、明治五年桑山法積寺廢せられたるに依り、其堂宇を買受け引寺す、創始より七百二十二年なり、本寺には鐘樓ありて時の鐘を撞けり。(本寺海軍局舊蹟の記事及第二章第四十圖参照)

◎ 登記所

明治十九年八月登記法公布に依り、三田尻登記所を佐波郡役所内に設置し、同二十年二月一日より事務取扱開始、同廿一年司法省令第一號に依り、同年十一月一日山口治安裁判所三田尻出張所を三田尻新子町(下町)へ設置同月五日より開應、同廿三年五月裁判所構成法公布に依り、同年十一月一日より山口區裁判所三田尻出張所と改稱せり。

明治卅五年六月十五日、防府町大字三田尻元三田尻村役場を借受け移應し、同四十三年七月迄繼續せり、四十二年應舎改築の必要を生じ、同年十二月起工し四十四年七月廿日落成同廿五日新應舎に移轉せり。

◎ 眞宗南派山明覺寺

本寺は、三田尻新丁に在り、開基は明西房俗姓五十香川信盛なり、信盛伊豆國に於て六萬石を領す、應仁亂後本願寺第八世蓮如上人に歸依して子弟となり、一尺の木佛を譲與せられ、周防國に布教し、師命を蒙りて三田尻に寺堂を建立し、明覺寺と稱す爾後其血脈繼承して現今に至る、檀家七百戸信徒二千八百人あり、歴代の宗主に仕へ功勞尠からず、本山より永代上座二等の待遇を與へらる現今(第十八世)住職香川默識師は、特に上座一等の待遇にて本願寺顧問の職に就き、第十三管區探訪使事務取

扱に任せられ、山口縣下一般眞宗寺院の統轄事務を處理しつゝあり、(第二篇四十二圖参照)

◎眞宗正智山西法寺

本寺は、三田尻中塚町に在り、開基は釋正尊にして、寛永年間の創立なり、境内一反八畝十四歩あり、檀家五百戸を有す

◎鞠生松原

鞠生松原は、防府勝景の一なり、土地白砂にして數町あり、幾百の老松叢生す、其勝光古來文人墨客をして心腸を惱ましむ、元中六年、足利義滿此地に宿を留め、其舊跡たる櫻の御所と云へる所あり、又其附近に大友氏より獻せし豊後石あり、當時義滿に隨從する今川貞世、歌あり曰く

四もところ植つるものを生添へて

鞠生の村の松のむら立

松原や高州の木するこゆるまで

月の出しほの更にけるかな

又文久三年防長諸隊並薩長聯合の兵士此地に勢揃をなせり。

◎村社嚴島神社

本社は、松林幽閑の裡に建立せり、白鳳十四年歲次乙酉十一月の創始なり、扶桑拾葉集、今川貞世のものせし足利義滿嚴島詣の記に、元中六年三月十三日、この國の國府の南、高はまといふ浦ばたの、三田尻といふ松原に、御旅所を立たり、この松原は、そのかみ嚴島の明神、爰に天降りまして、今の嚴島にはうつらせ給ひければ、げにも神さびたるなり云云、

氏子 八百五十戸 ●保存金は參千圓

祭神 市杵島姬命、田心姫命、湍津姫命、●合祀天照大御神、

崇徳鳴命、大己貴命、事代主命

祭日 十月十六日十七日

◎築堤

三田尻港は、由來水淺くして、干潮の際は、上陸又は乗船の旅客が、水中を徒渉するの不便困難あるを以て、汽船の寄港は、中關に轉せんとするの景況あるより、地方有志者大に驚き、明治二十六年株式會社を起し、此築堤を成就せしなり、是より旅客に不便を與へざるのみならず、港頭新に好眺望の地を得たり防府圍繞の山巒は、灣内萬頃の鏡波に映し、共に其佳麗を誇るものゝ如く、欸乃の聲を朝暮に聞き、鱗鱗の烟を西東に望み、目を憐れしめ心を娛ましむ、始めて此に到る者の激賞する亦宜なり。(第二篇第五十圖参照)

◎聖蹟紀念碑

碑は間屋口に建つ、是れ明治十八年七月、山口へ御巡幸の際、海路此灣内へ着、御上陸遊ばされし地點なり、無前の光榮を永久に傳へ、追懷の料に供するためなり、此に碑面の全文を誌す

聖蹟碑 從一位勳一等候徳大寺實則家額

明治十八年七月、車駕西進、經岡山廣島、而二十九日聖艦達三田尻港、駐蹕於毛利別邸、即發至山口街、又以毛利氏野田別邸充行在所、三十日車駕親臨於縣廳法術及學校、三十一日還幸於三田尻港、一縣老幼填咽路傍、迎拜翠華、鼓舞歡呼、於戲盛矣、縣民以此地、爲車駕往復之所由、相謀將建石勳文以永表聖蹟、使素彦記其事、素彦嘉此舉、乃請待從長徳大寺候之家額、刻之石、亦以候當時扈聖駕也、

明治三十二年七月

正三位勳二等 男爵 梅取素彦撰

正三位勳二等 男爵 野村素介書

真宗崇隆山法輪寺

本寺は、牟禮村東山に在り、本派本願寺派にして、延寶五年の創立なり。元阿武郡にありしが、七十五年を経た後、延寶五年中、光宗寺二世、華城村に引移し、明治四十年、現今の地に移轉せり。●檀家五十戸

本尊 阿彌陀如來(木像)は惠信僧都の作(鑑定書あり)にして本派本願寺第十二世准如上人の表札許可を得、爾來崇敬せり。本堂 坪數は四十九坪、庫裡 二十三坪、本門 五坪あり。寺領 反別二反七畝

曹洞宗法蓮寺

本寺は、牟禮村浮野にあり、慶安元年九月二十日の創立にして本尊は、釋迦如來なり、毎年四月十七八日に、開山祭を営む。檀家百二十戸あり、●境内坪數八十五坪、●本堂二十八坪。附屬建物 三十坪。

八伏觀音 法蓮寺山にあり、縁日は一月十八日と七月十日なり。

曹洞宗瑞宗山極樂寺

本寺は、牟禮村岩島にあり、往昔真言宗にして、國分寺末なりしが天文中、曹洞に改宗し、吉敷郡鳴瀧泰雲寺末に屬す、其間凡三百五十年以上を経過せりと傳ふ、天正年中に至り、堂宇大に頽破せし時、都濃郡長穗村施文寺十一世永州和尚、來住して復興せり、其後寛永年中、永觀和尚(本寺五世)の時に毛利家天樹院の靈牌を祭祠せるの故を以て、同家を開基とし、寺號を雲嚴寺と改稱せり、蓋寺號は天樹院雲嚴宗瑞大居士の靈嚴を取りたるなり、維新毛利家改祭後は、舊寺號に復して現今に及べり。檀家二百十六戸

本尊は阿彌陀如來 ●建築物 本堂坪數六十一坪 ●庫院五十坪

六坪 ●觀音堂九坪 位牌堂二十一坪 ●長屋十二坪なり。寺有財產 田反別一町五反八畝五歩 ●山林十五町一反 ●宅地五反二十二歩 ●畑地六反六畝。境内に日清戰役記念碑あり明治三十四年建設せり。

村社熊野神社

本社は、右田村上右田に在り、創始は明徳二年大内氏の旗下右田城主野上修理亮紀州熊野神社御分靈を奉戴し、歸りて鎮祭。氏子 五百五十戸

祭神 伊弉册尊、相殿 速玉勇命、事解男命 ●例祭 十月八日

境内 建築物 神殿 六坪二合五勺 拜殿十五坪七合五勺

幣殿 六坪二合五勺 神饌所五坪 神庫三坪七合五勺

參籠所十五坪

境内に神社二椽あり、其例祭は四月十五日なり。社有田地四反餘 保存金現在叁千貳百圓。境内は清潔にして幽靜なり、松杉其他の老樹は、鬱然として繁茂し、社頭の森嚴自ら存す、後に右田ヶ岳の峻峯を負ひ、前に佐波川の清流を帶ぶ、川の東なる矢筈ヶ岳は、右田ヶ岳と對峙し、天門中斷江開くの看あり。

曹洞宗萬年山天徳寺

本寺は、右田岳の南麓にあり、源頼朝の開創にして、其法號は淨圓庵主征夷大將軍頼朝大禪定門と稱し、標榜としては銀杏の老樹ありて、桐幹高く堂側に聳へ、枝葉廣く滿庭を蔽へり、然るに星移り物換り、源家一門と遠ざかりて、右田毛利家の祖先天徳寺殿の英靈を寺地に安置し、其法名に依り寺號を天徳寺と號す、爾來同家の香華院となり、諸堂宇の建立は勿論諸祿を給せられ、山門の隆盛を極めたりしが、明治三年兵燹に罹りて、

堂宇悉皆焼失せり、依て毛利家より假に一字を建らる、本寺は年に兩度の江湖會を勤修す。●檀徒百八十戸

境内反別六反五畝歩あり地勢上二處に分かる其一を中庭と云ふ

本堂 間口八間奥行九間、●附屬建物、庫裡間口五間奥行八間

突殿 三間一四間、●鐘樓堂一間半四間、●山門二間半
は二間、●經堂二間四方、●土藏長屋七坪、●風呂場四坪、●其他二棟あり

地藏堂 建立は、大同三年大内家の發願にて、奥行四間一四間口二間の堂なり、堂内には一丈六尺の大地藏脇立不動明王、毘沙門天王及び千体地藏の御像を安置せり。

緣御香堂 寺門より登ること、數町の山腹にあり、間口二間半、奥行三間半の堂なり、大内真弘朝臣の建立にして、正觀音の像を彫刻して安置す、明治三十年春、左右佛子安馬頭の兩觀音を安置せり、常圓三十三ヶ所靈場中の、第二十五番の札所なり、信徒八万余人あり。

羅漢窟 本寺の背後約二町の山中に在り、岩窟内約五間四面なり、中に十六大阿羅漢の古代石像十六軀、外に釋迦無尼佛及弘法大師の石像あり。

右田毛利家墳墓 本寺の北方約三町の地あり、同家祖先墳墓あり、五輪塔なり、何れも高さ一丈有餘ありて、地方に比なし、般若心經の彫刻石 右田岳の絶頂迄十有八町、其中腹の小丘上にあり、勅特師性海師の御親筆なりと云ふ

●勝坂關門の舊址

勝坂關門の舊址は、勝坂橋の北一町以内の地なり、其殘塁は、今猶橋北の左右にあり、元治元年長州征伐の事起るの際、此關門を設け、吏を置き通行人を誰何し、印鑑(管轄役場の証明ある

旅行券)を檢す、これ幕府間諜の、山口に入るを禦ぐためなり
明治三年二月九日諸隊擾亂の後、之を撤廢せり。

●右田岳の城址

城址は、右田ヶ岳の南峯にあり、大内盛房の弟、盛長右田の庄に封せらる、右田攝津守と稱す、右田氏の始祖なり、蓋し保元平治の際に當れり、大内氏強大に及び右田右京亮城堡を築き、宗家の羽翼たりしと云ふ

●中關港

本港は名色なり、熊毛郡上關豊浦郡下關に相對して古來より、世に聞ゆ今は港名を採りて、此地の村名とせり、舊藩時代には遊里劇場の如き一定の場所あり、故に此地又は遠右(都濃郡)等に到らざれば觀劇するを得ず、是を以て劇場開催の時は四方より雲集し頗る繁盛を致せり、其最も繁華の時節には、娼婦妓女幾百人の多きを見しと、現今僅かに餘影を存す、不肖錦涯此地に至る毎に、今昔の感想を懐く、作あり

絃聲寂々奈荒涼 那處當年歌舞場

舟船連帆不來去 港頭僅見二三橋

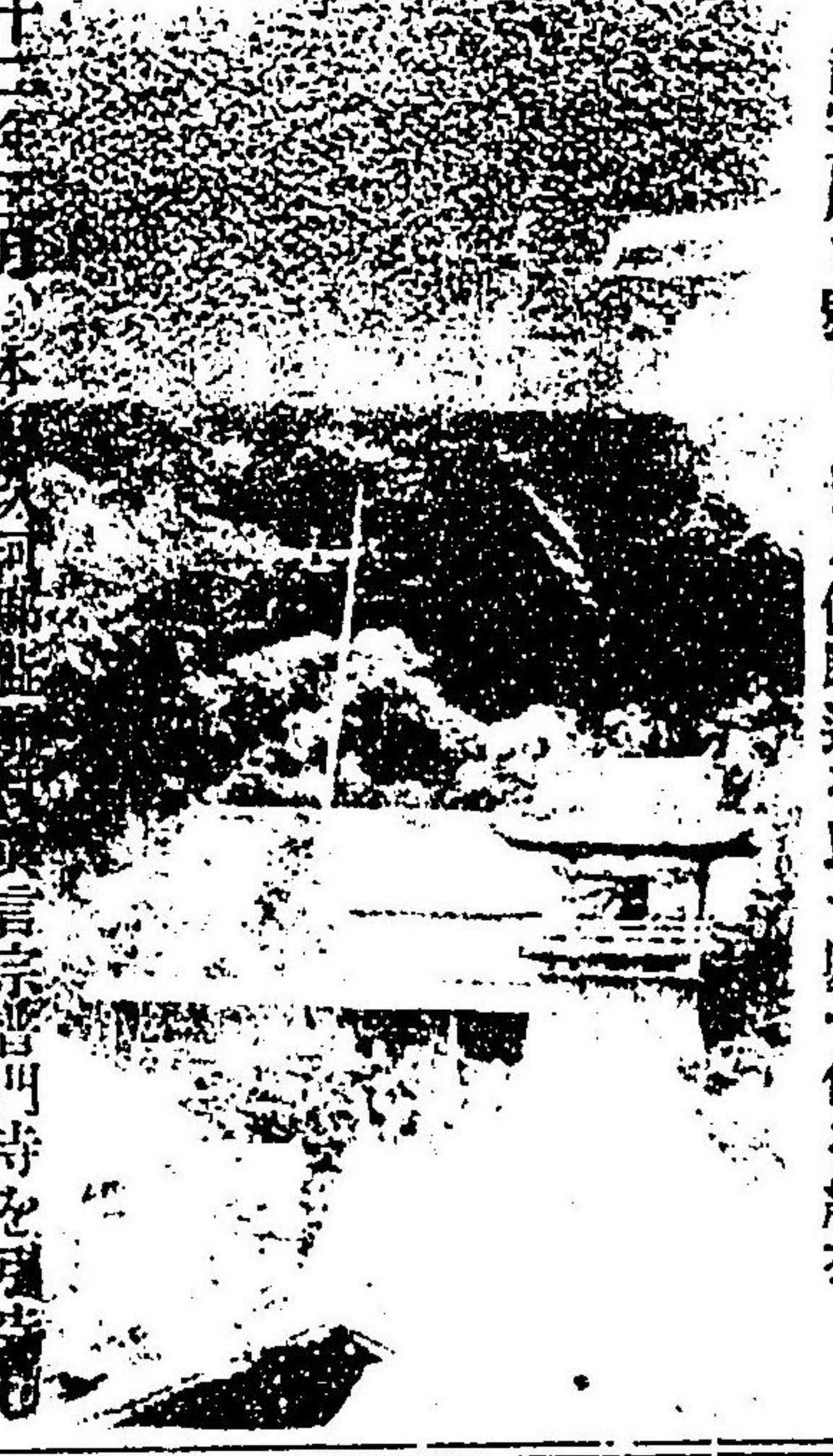
然れ共有名の三口尻鹽は、昔時に同しく依然此港より輸出せり又此地より名菓を出す、上山新次郎氏の製造する、園の露、日の本是なり、氏は多年苦慮して、此二菓を發明製造することを得たり、其効用は茶席雜食に止まらず、滋養も富めるを以て、病者乳兒に與ふるを得べし、依て聲譽高く各博覽會共進會等に出品し、金銀賞牌及褒賞を獲得せるは、獨り氏の名譽に止まらず、實に地方の名譽なり

●普門寺

本寺は、中關村中關にあり、本尊不動明王は、靈驗顯著にして

遠近信仰利益を蒙むる者多し、往昔天曆年間三善清行の八男釋淨藏の作にして、山口大内氏の念持尊たりしも、轉々本寺の本尊と仰ぎ、龍寶院と號し、世々修驗道を以て數十代を經來り、

(景の寺門普)



過る明治十二年五月、本寺以河内縣縣令真言宗普門寺を稱せたり、山上に鎮守稻荷神社あり、於清稻荷と稱へ、昔より町中火災なきは、此神社の守護によるとなし、人々信仰せり。又山上に八十八ヶ所の弘法大師を配置し、本寺より、約八町の山中に、奥の院として小堂宇あり、小瀑ありて參籠する者絶す。●本寺境内二百坪 本堂二十三坪 庫裡十二坪あり ●緣日毎月廿八日 信徒參百人

●玉林寺

本寺は、中關村中の浦にあり、永正八未歳の創建なり、境内坪數三百三十五坪 建物に本堂三十三坪 庫裡十五坪七合五勺 其他八坪二合五勺あり ●本尊十一面觀世音菩薩緣日毎月十八日 檀家家七十二戸あり (防府案内第一篇畢)

* * * * *

—〔内美業營濯洗洋和〕—

染色商

- △羅紗帽子 △婦人コート
 - △洋服類 △マント
 - △和服類 △トントン
- 所屬品付替修繕一切

館自清廣友

筋川兒遊町新市宮

第五回内國勸業博覽會褒賞受領

清酒

松の琴 玉藤
友鶴 萬龜

醸造

周防三田尻

大村酒場

電話九七番

遠近信仰利益を蒙る者多し、往昔天曆年間三善清行の八男釋淨藏の作にして、山口大内氏の念持尊たりしも、轉々木寺の本尊と仰き、龍寶院と號し、世々修驗道を以て數十代を經來り、

(景の寺門普)



過る明治十二年三月、本縣玖珂郡龍寶院真言宗普門寺を因寺たり、山上に鎮守稻荷神社あり、於清稻荷と稱へ、昔より町中火災なきは、此神社の守護によるごなし、人々信仰せり。

又山上に八十八ヶ所の弘法大師を配置し、本寺より、約八町の山中に、奥の院として小堂宇あり、小瀑ありて參籠する者絶す

●本寺境内二百坪 本堂二十三坪 庫裡十二坪あり
●緣日毎月廿八日 信徒參百人

●玉林寺

本寺は、中關村中の浦にあり、永正八未歳の創建なり、境内坪數三百三十五坪 建物に本堂三十三坪 庫裡十五坪七合五勺 其他八坪二合五勺あり ●本尊十一面觀世音菩薩緣日毎月十八日 檀家家七十二戸あり (防府案内第一篇畢)

* * * * *

—{ 内 案 業 營 濯 洗 洋 和 }—

染色商

- △羅紗帽子 △婦人コート
 - △洋服類 △マント
 - △和服類 △トントビ
- 所屬品付替修繕一切

館白清廣友

筋川兒遊町新市宮

第五回内國勸業博覽會褒賞受領

清酒

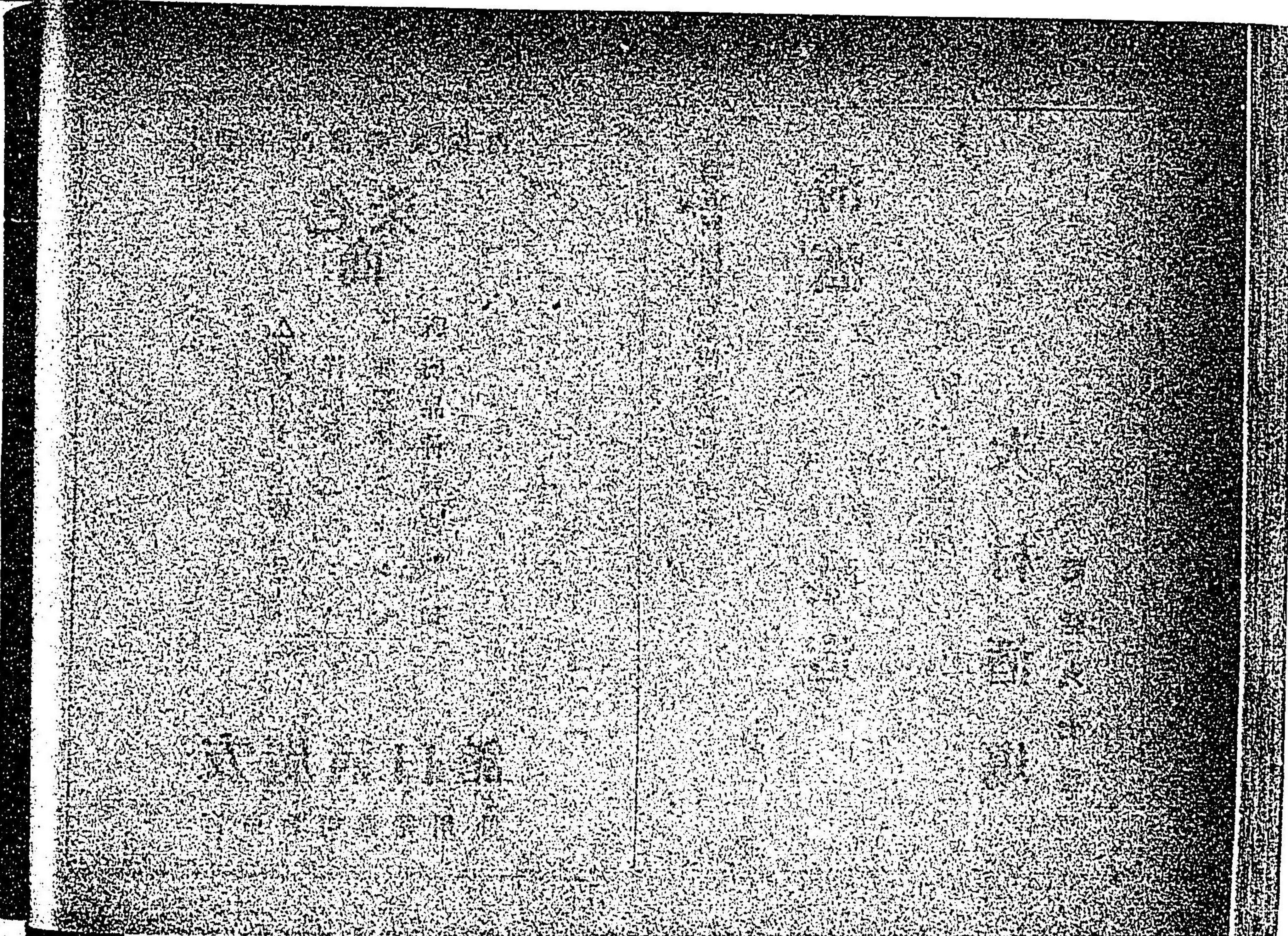
松の翠 玉藤
友鶴 萬龜

釀造

周防三田尻

大村酒場

電話九七番



防府案内 第二篇

第七章 寫真圖

矢野 錦 涯 編

凡實地の景光は、所謂百聞一見しにかず、然れども其見たる景光と人に語らんとすれば形容甚だ困難なり、故に寫真に據るの外なし、是以本篇は勝景中の寫真圖數十葉を收む是即ち已に遊ぶ者の記念に供し未だ遊ばざる者の想望に資するに足らん、先づ圖の最首に載する兩市街より説明せん

三田尻は、防府中央の海岸に簇がる市街にして古來よりの要津なり、毛利氏防長を領有せられしより繁盛を極む、山陽線三田驛開設より爾後運輸の状況は、舊時の如くならざるも亦頻繁なり

宮市け、三田尻の北に當り天神山下に横わる市街なり、中古大内家山口在城の時は、城下の市場を東西に設く、東の市場を佐波の市街地に置く此市街を宮市と名くる始は建徳二年の頃ならん又斯く名けしは松崎天神の宮あるゆによる、

山口縣三田尻

砂糖商 神本勘五郎

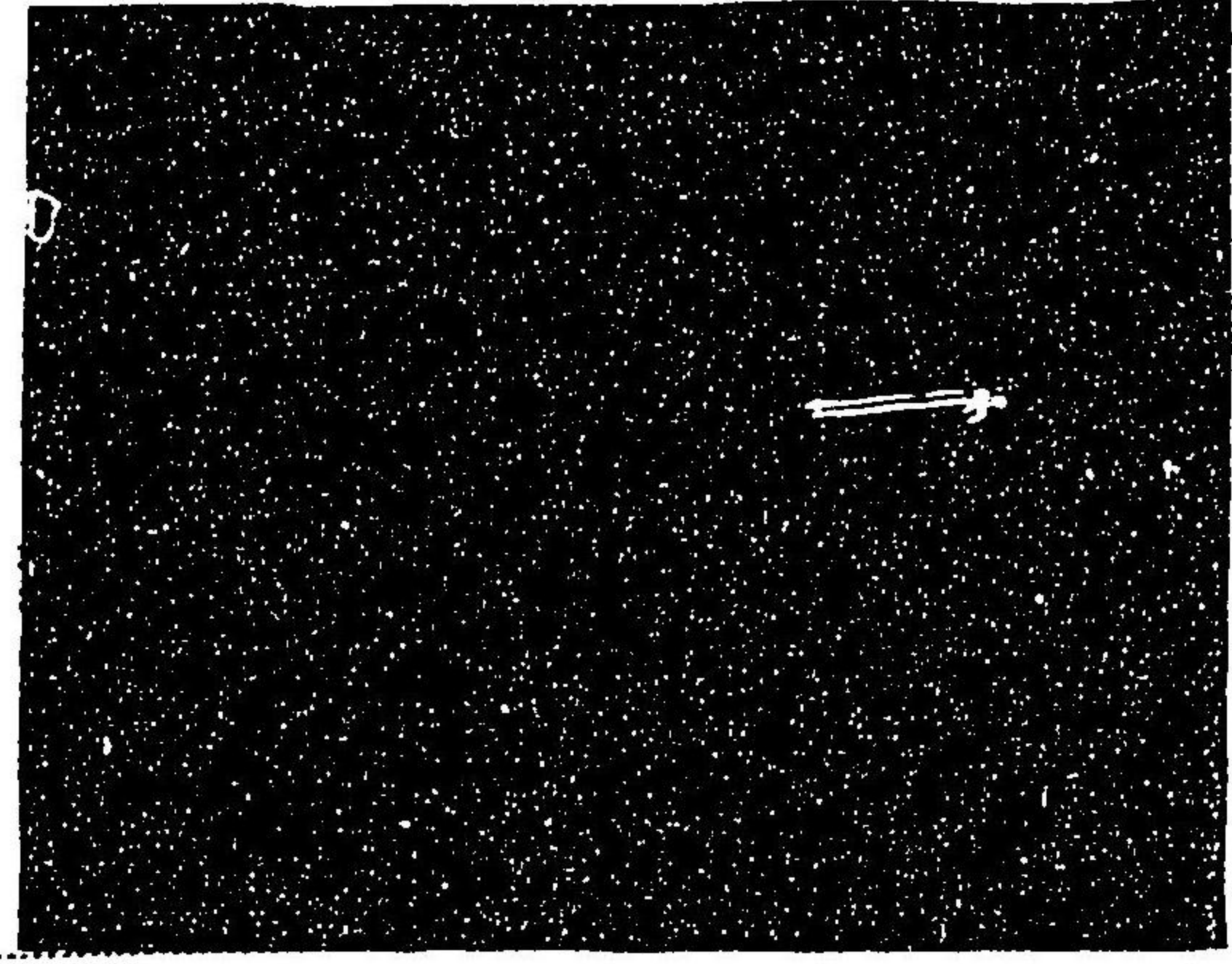
電話一八九
電略(カミ)

各博覽會有効賞受領
示度正確柏木体温器

自己ノ考案ニ依リ
明治十六年創業ス
爾來現今ニ到ル迄
本邦中他ニ製造家
ナク東洋唯一ノ製
品ニシテ日本帝國
内ハ勿論米露清墨
諸國南洋諸島ニ供
給シツ、アリ
四十三年度ニ於ケ
ル製造高拾万本

山口縣
三田尻

柏木驗溫器製造所



生蠟萬油製造
穀物肥料卸商

池田市藏

佐波郡三田尻町

電話長一二五番
電略イケ(又ハ)イ

但麥安大麥年中貯藏致居候ニ付

御注文を乞ふ

一 第 景
【部一】 (街市 尻田 三)



此市街には上の丁、中の丁、青木町、立丁、上町、
中塚町、下町、北福聚町、福聚町、片河町、本町、
新丁等數十の街あり

婦人小間物

萬囊物類

内外化粧品



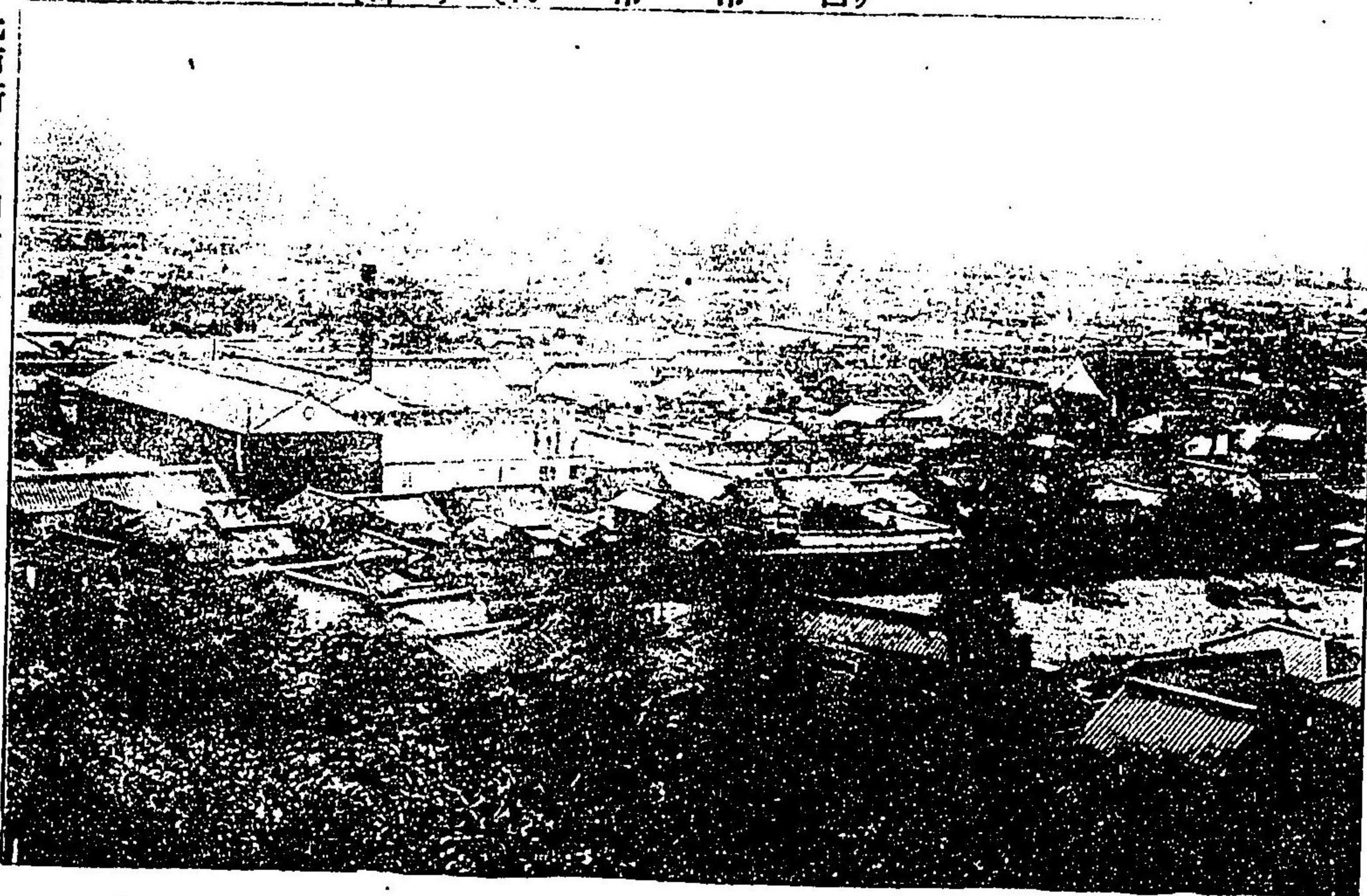
周防宮市

卸問屋
中中安本店

長電話一三六番
振替大坂二二八五番

三 第 景

{部一} (街 市 市 宮)



此市街には御館、松崎町、前小路、立市、中市、新町、今市、徳町、恵比須町等數十の街衢あり

和傘製造販賣業

防府町宮市今市

田中道藏



山口縣防府町象古堂

製油業 林喜太郎

防府町宮市前小路

電話略號(ハヤシ)

三 第 景
(面 南 山 神 天)



圖の中央にあるは、松崎神社なり、前方に高く聳ゆるは、春風第一樓にして、最も西(左方)に在る

は靈臺寺なり

宮内省御買上品

本店 世良商店

佐波郡防府町三田尻港

目	品	造	製	店	弊
鶏卵	まんじう	あは雪	煉羊羹	カステラ	延壽の露

内閣勸業博覽會有功賞
第一回菓子品評會褒賞



三田尻驛停車場入口

和洋菓子
調進所

支店 世良萬壽堂



四 第 景
と 社 松
樓 拜 崎
門 殿 神



樓門と拜殿との中間
東側に老松ありこれ
相生樹なり、其周囲
の石柵は寛政元年八
月の建設なり

和洋金物雜貨卸商

度量衡器販賣

內外藍商

確實と勉強とは

是れ弊店の特色なり



防府町宮市

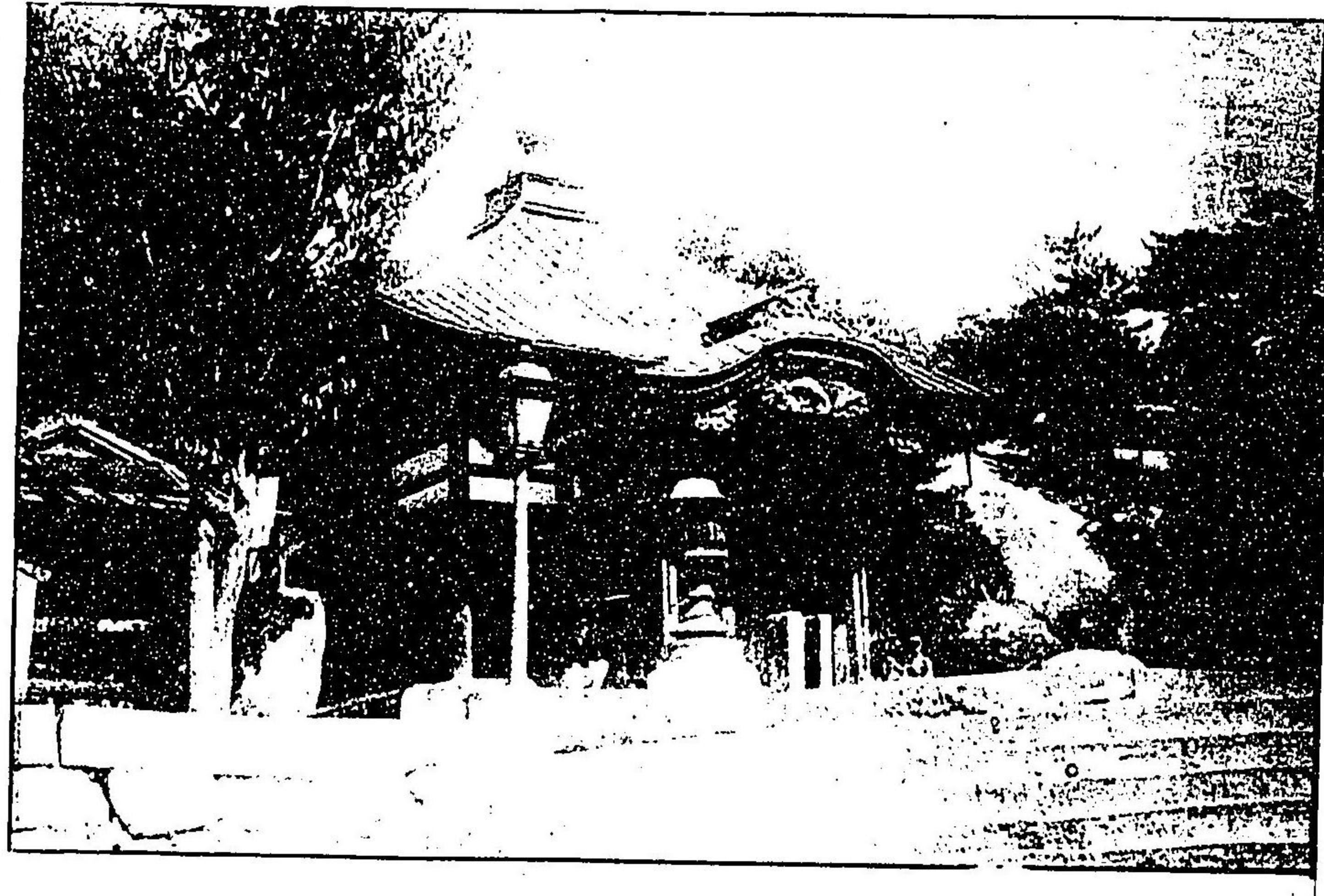
佐竹第二支店

長電話(二三二番)



(10)

五 第 景
《堂 音 觀 山 垂 酒》



八月回祿の災に罹れり、今の堂宇は再建なり

本堂は十一面觀音（身長四尺八寸五分）行基菩薩の作なり、延喜四年土師信定奉勅爲本地堂と傳ふ、明治二十年

和菓子調進 山根花兄堂

防府町宮市中市

各種靴製造 岩見丑藏

防府町宮市中市

和洋書籍 今岡茂一郎

防府町宮市中市

諸新聞雜誌
學校用品
理化學器械

電話八六番
電路ヲカモ

教育
玩具

卸商

山口 電話

縣長

防府

臺

町

臺

市

番

●團扇類

●蚊卓提灯

●三五月人形

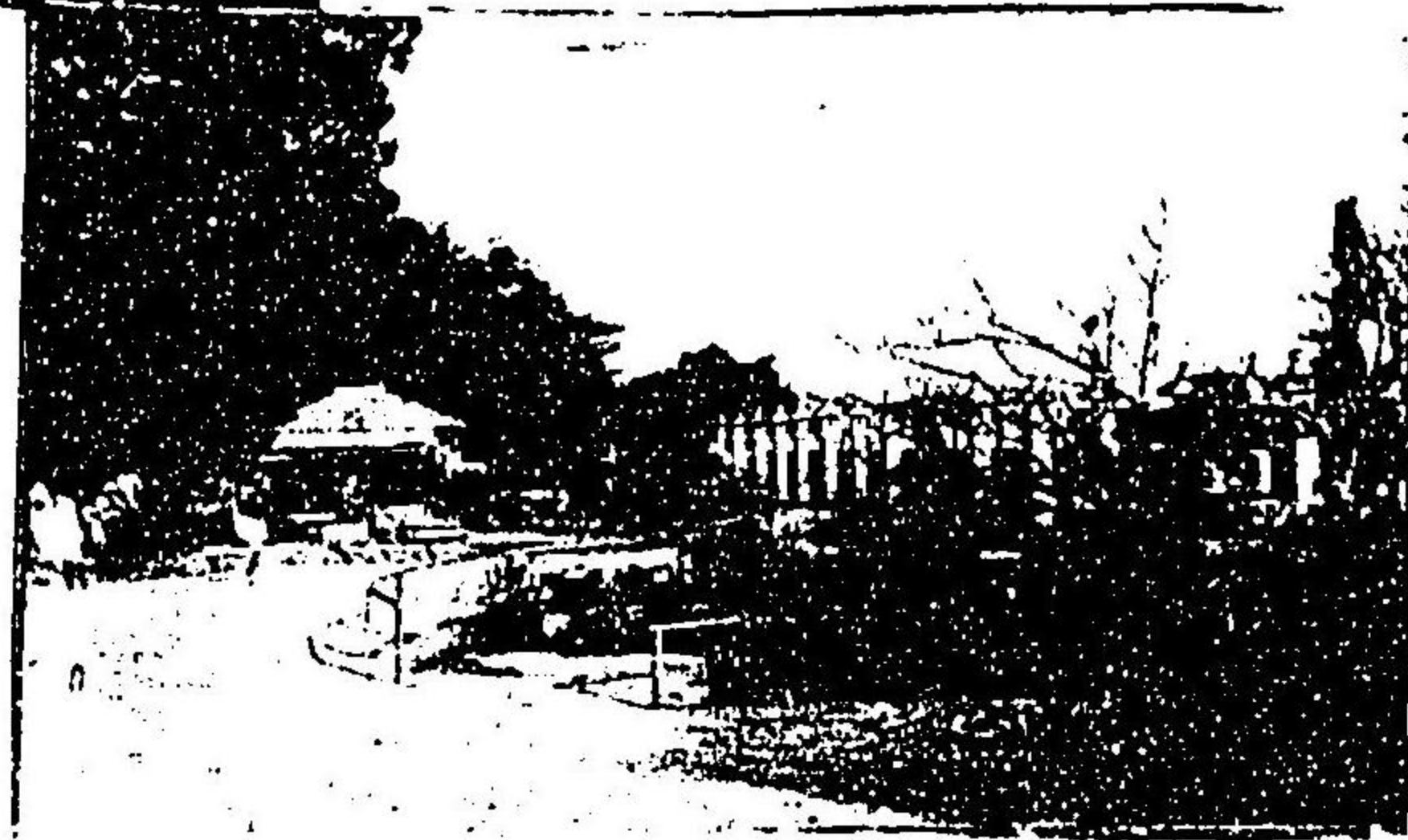
●玩具ハ日々新流行品着荷仕候

玩具店



六 第 景

春風第一樓と神苑



此神苑は松崎神社の東なる観音堂の前にあり、池あり心の池といふ、其形草体の心字に似たり幽雅の境なり（春風第一樓は第一編第六章参照）

和洋御料理 天満宮鳥居内
並仕出 山 龜 樓
(電話四六番)

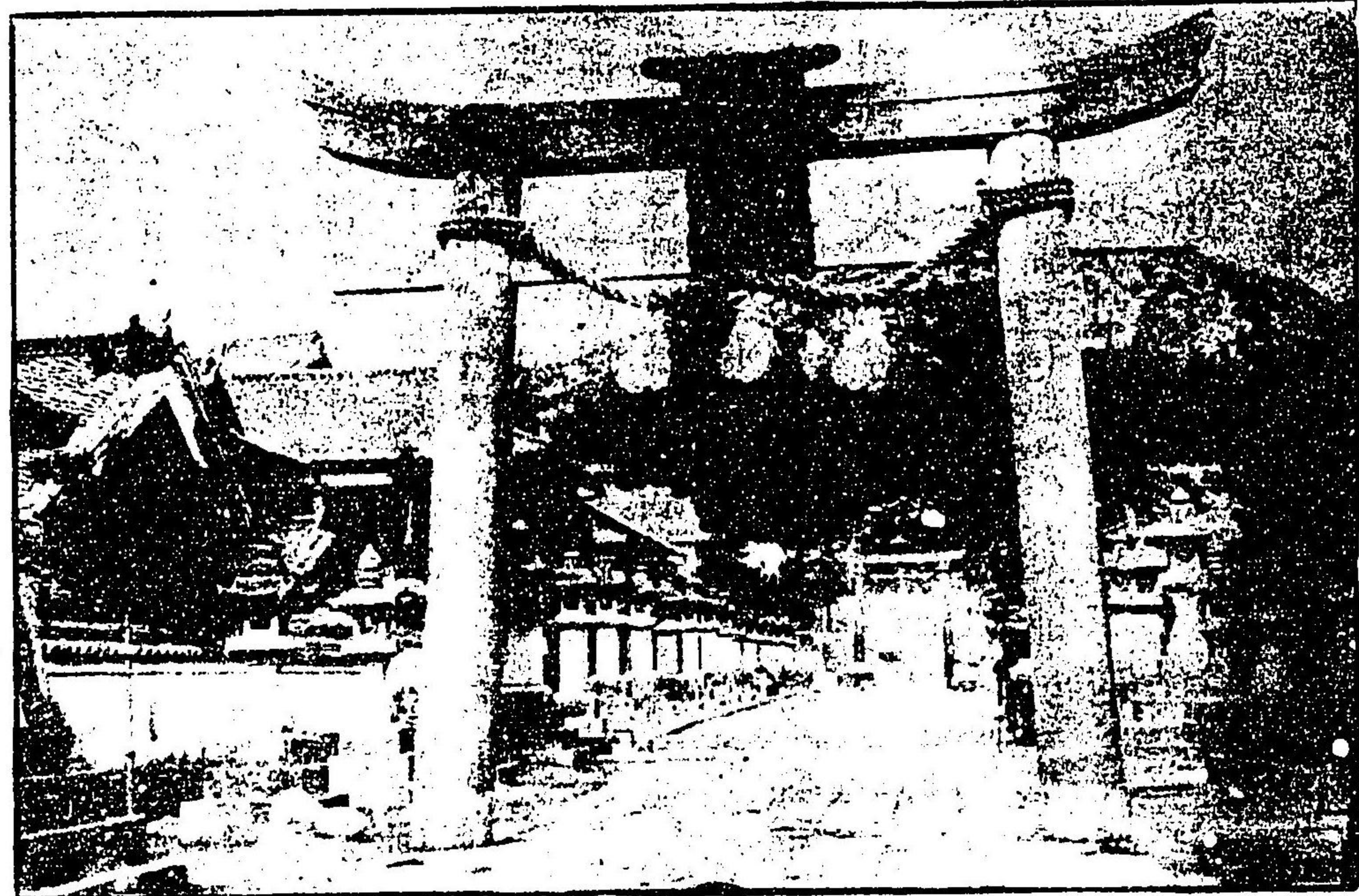
和洋料理店 宮市鈴虫坂(天神馬場西へ入ル)
並置屋 梅 見 樓
(電話一六七番)

和洋御料理 宮市天神馬場
並仕出 共 遊 樓
(電話三四番)

御料理 天神馬場西へ入ル
並仕出 宮 内

天神馬場 平川寫眞館

七 第 景
(町 崎 松)



松崎町に二つの鳥居あり、一は石造大鳥居にして
寛永六年の建立にして扁額は明治九年五月大政大
臣三條實美公の揮毫なり奥は銅鳥井にして明治十
二年の建設なり

○御駐輦好紀念

○御土産最適品

○防府名勝

(えはかき帳)

金波帖、銀波帖トシ、名勝二十四景ヲ蒐
メ、由來傳説ヲ詳述シ、詩歌俳句ヲ加ヘ
タル、艶麗優美ノ小冊子ナリ

○防府の栞

(寫眞帖)

防府ニ於ケル、名所舊跡、會社工場、旅館
其他商業交通ニ關シ、巨細ニ説明ヲ與ヘ、
鮮明ナル名勝寫眞二十餘景ヲ揚ゲタル、
小冊子ニシテ防府案内ノ一大指針タリ

○紀念發行 名勝えはかき

行在所 其他名勝舊跡ハ剩サス、鮮明
優美ニ印刷セラル

防府町宮市

發行所

和洋諸紙類
文房具樂器
繪葉書發行

竹村商店

(電話二二三番)

全町下鳥居筋

竹村分店

八 第 景
(碑 念 記 祭 大 年 千 一)



此碑石は國道に面せる大鳥居の東側にあり碑面の
文字は有栖川威仁親王殿下の揮毫に係る明治三十
五年一千年大祭を執行せり

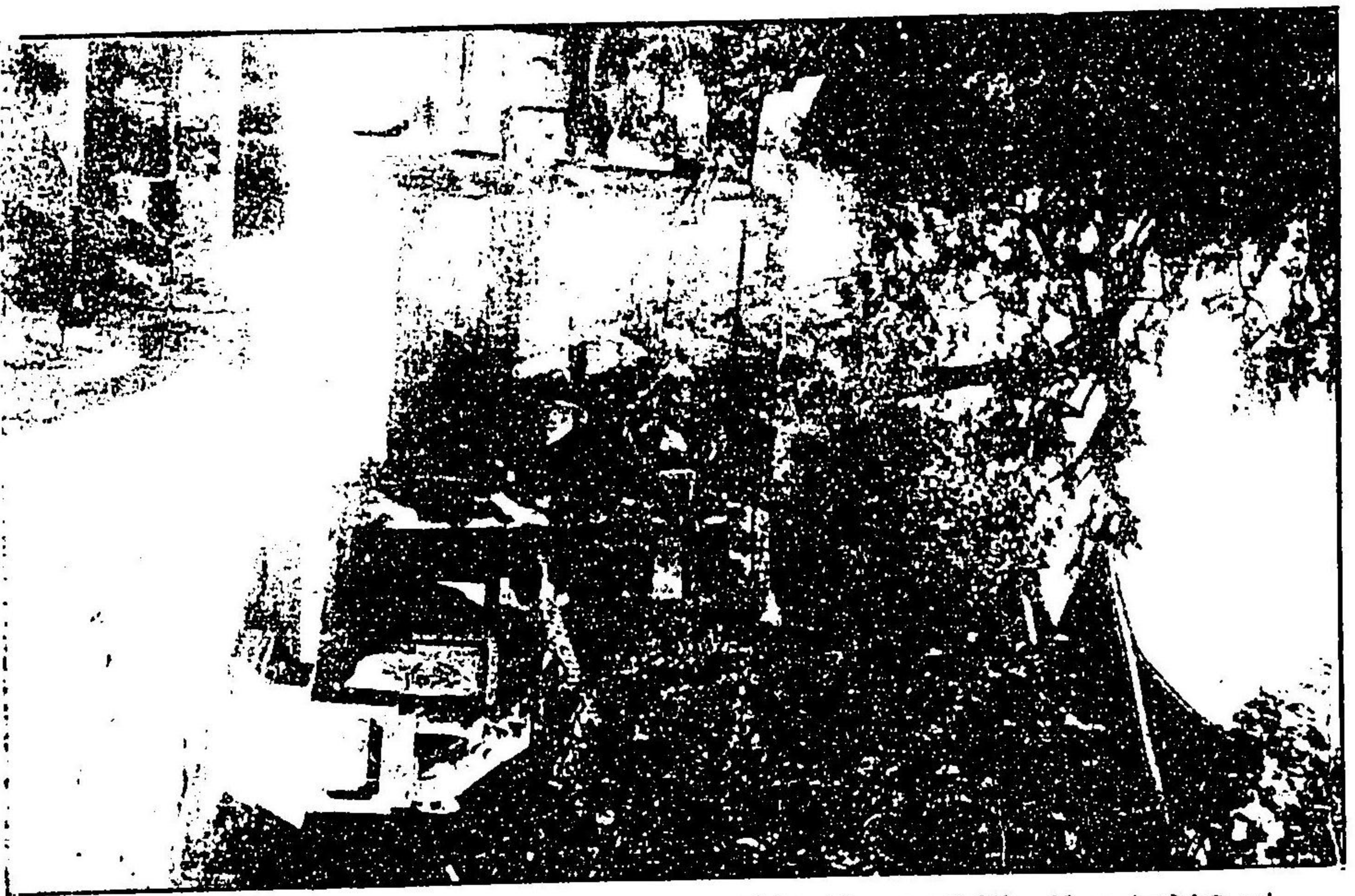
材木商 重岡正一
防府町迫戸
兼 建築請負業

石材販賣 河村善藏
防府町迫戸
兼 石面彫刻

(營業品目)
箆筒長持
葬式加籠并二小道具
防府町迫戸
大村太吉

米穀商 市川商店
防府町迫戸
兼 水車業

烟草販賣 原田商店
防府町迫戸
並 諸雜品



景 第 九
美哉水、溶々乎として白砂の上を流るゝ追川戸に架する虹形の石橋を渡れば、石鳥居(文化二年六月建設大谷新橋爾氏の寄附)あり、夫より幾十百の石段を昇り終れば、春風樓前となる
(松崎神社西裏坂)

建具、指物
西洋家具
掛物箱調製

防府町迫戸

郡司房次郎

乾物、果實
青物、穀類

防府町宮市迫戸

商刃鎌田市之進

美術絹布悉皆染物業

并ニ上繪切付紋調進

防府町宮市迫戸

大村

穀類、酒類
防水布、雨衣
煙草

防府町宮市迫戸

販賣山田商店

十 第 景
(寺 茲 靈 宗 言 真)



本寺は、天神山の南麓にあり、境域閑雅なり、
東には松崎神社あり、屋後には酒滴公園あり、
國八十八ヶ所の霊場を設け、八十八個の大師石像

を境内に列す、最も櫻を以て名あり花時杖を曳く
もの多し

眼科專門
內外科一般診療

宮市今市

磯部醫院

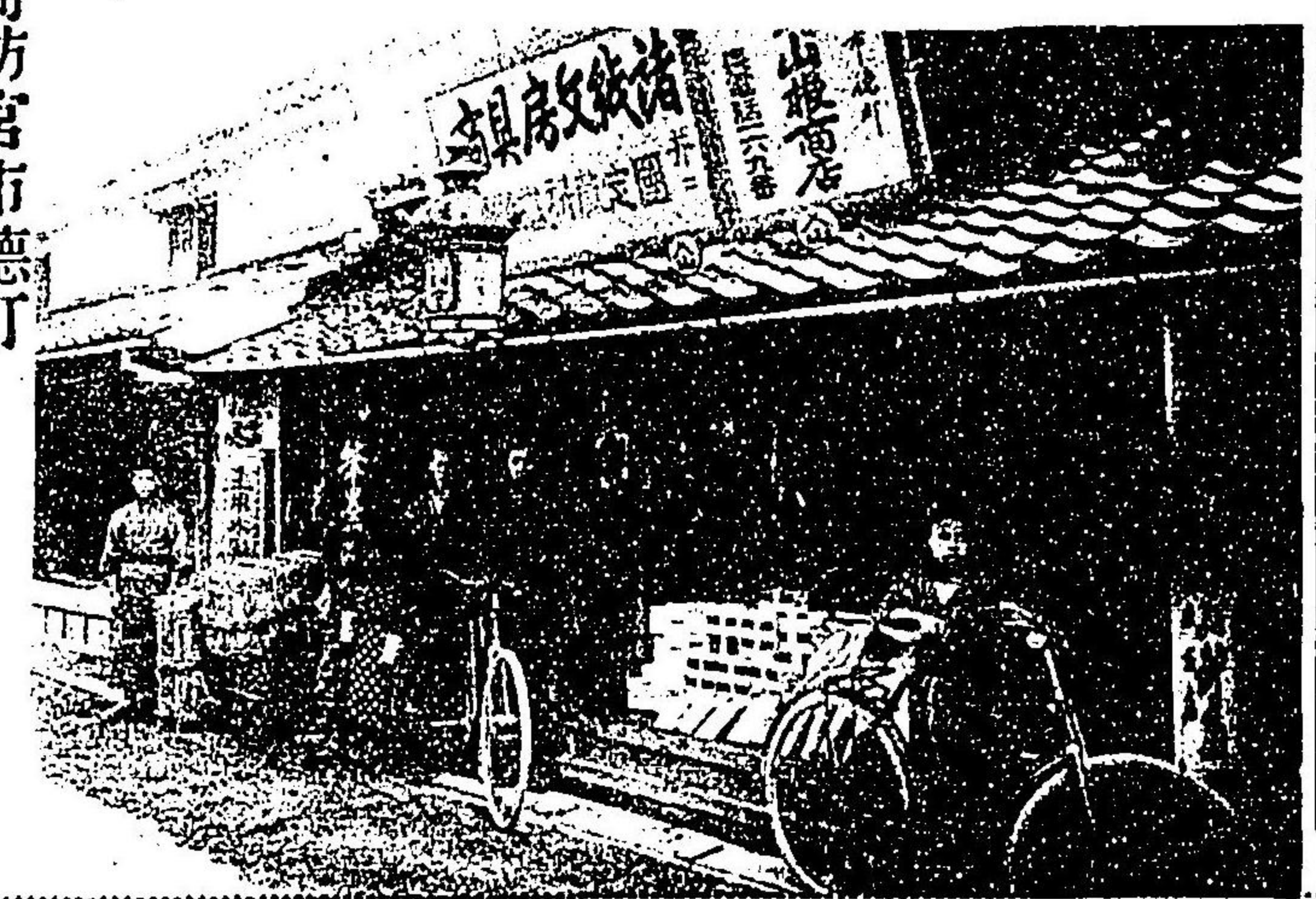
醫學得業士

磯部源一

和洋紙類
文房具

卸小賣

國定教科書
取次販賣



周防宮市徳町

山

山根民三郎

長電話一六九番

十 第 景
(口入園公利太加佐)



此入口の左方に、真宮殿下御遺物を収めある倉庫あり
同宮御養育主任たりし楳坂男爵の建造なり

防府町宮市中市一丁目

尖

乾物
八百屋

商 大村商店

並ニ洋酒、罐詰、甘露醬油

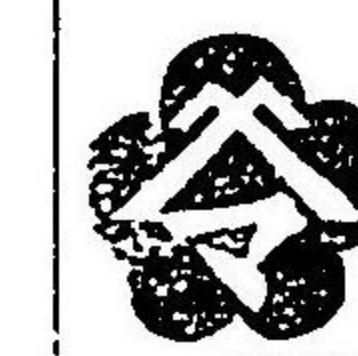
防府町宮市中市一丁目

まからずや

最新履物調進
流行 塩見商店



諸油蠟燭製造元
宮市ひん附
防府町
本店 重屋萬藏
電話三番



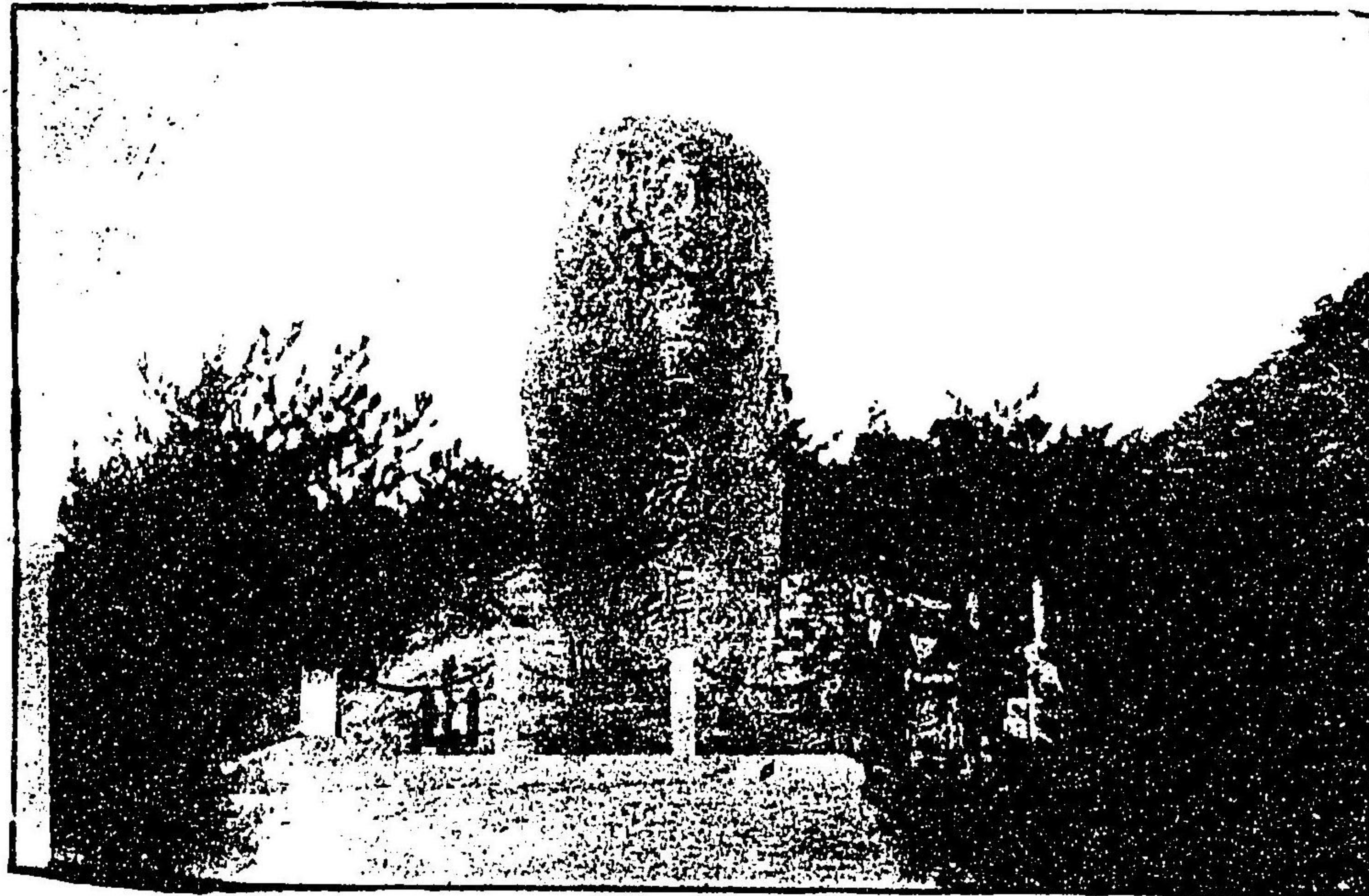
防州宮市新町

和傘提灯製造所 松井忠吉

並ニ原料品卸賣

二十第景
(碑魂忠軍海)

毛利元照公の筆なり



公園内、崇高墓の上に在り、碑石墓の四隅に砲彈を置き中間石柱を建て鐵鎖を以て之と結る、明治四十一年十一月の建設なり、碑面の文字は從二位

(18)

吳服美術京染商

御婚儀用
諸祝儀品 衣裳調進仕候

防府町宮市
中市二丁目

京都

中川支店

印章版木彫刻所
ゴム印

并ニ

スタンプリンキ
高等印肉販賣

山口縣防府町宮市

阿曾沼玉心堂

團扇引紙刷
柱掛紙刷
諸印

加根曾明新堂

防府町宮市前小路

三十第景

(瀑 兔 玉)



又三伏の日此に到れば樹陰深泉暑炎を消し、清涼の氣入を襲ひ爽快を覺ゆ

云

(瀑 烏 金)



此所を水源を呼ぶ、松崎神社の前の大水盤に蛇口より吐く水の源なるを以てなり、又公園開設より多々楓樹を植栽す依て或は紅葉谷と稱す老秋此に遊び錦楓の青松に映するを觀れば眞に一興を催す

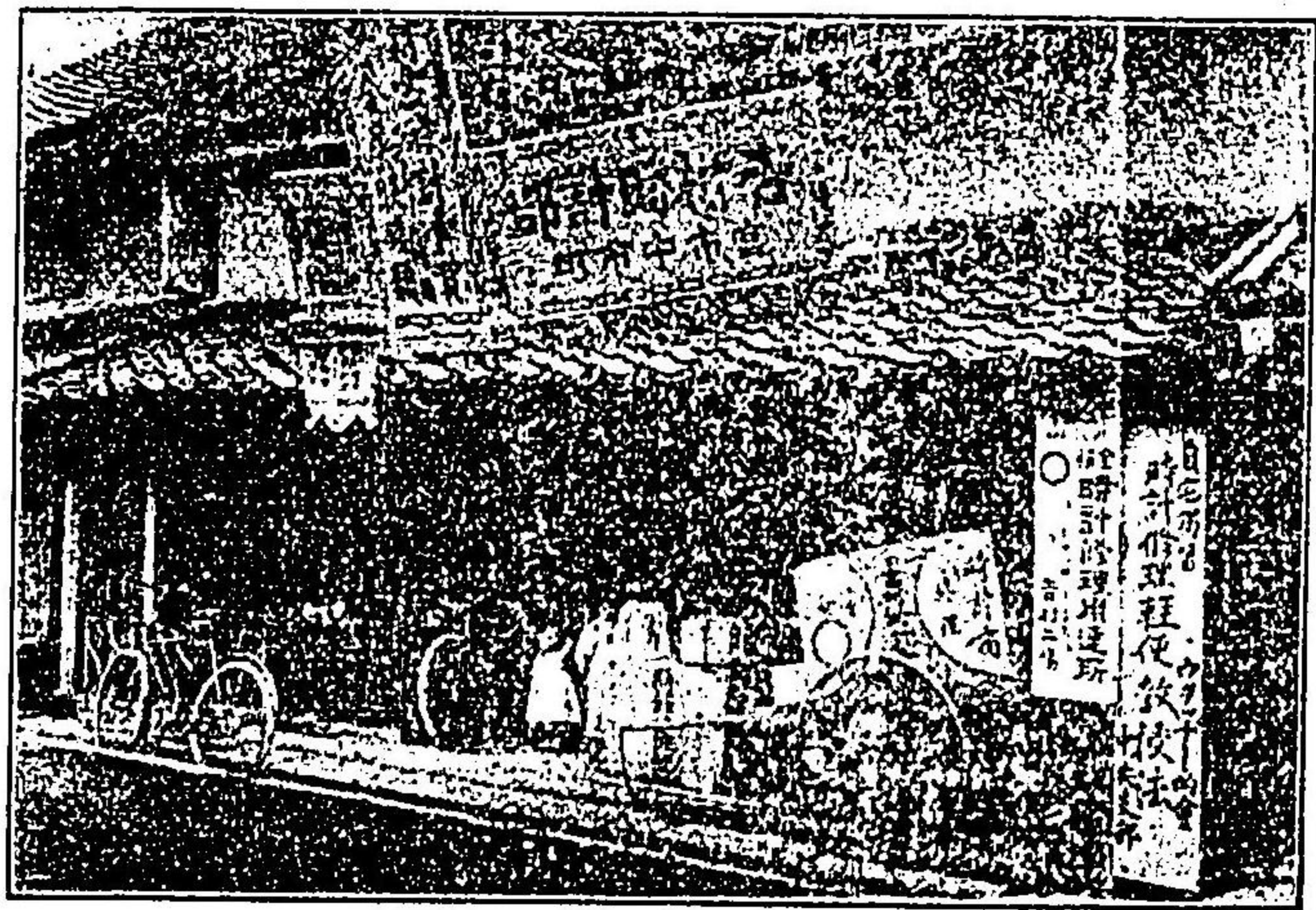
迅速取扱

美術京染 周防宮市新町
 吳服悉皆 今原田喜代松

三

時計部	佛具部	五月節句人形 并ニ鯉幟	輕便 カバン マント	新案 自轉車 自在輕便	特許 ヨロケ
-----	-----	----------------	------------------	-------------------	-----------

周防國宮市
 吉村虎吉商店



乾物
 陶器

森富商店

宮市徳町

四十第景
(林 梅)



舊は、今の通夜堂の敷地にあがりしが、同堂の起工に
つぎ其前面公園入口に移せり、又公園修造の際、多
くは鐘秀堂の南畔に移植せり開花の頃には観客多し

和洋
文具
煙草
小賣

防府町宮市立市

波多野本店

各國諸板販賣
建築材料請負
并荒物卸小賣

防府町宮市立市

大月梅之進

電話(㊦ウ)

酒類販賣
雨具一式
製造

防府町宮市立市

河崎商店

籠唐
箕製
卸小賣

製造人

岡正七郎
山根良之助
福永竹二郎

防府町宮市立市

籠唐箕同盟商會

五十第景

(岩垂酒)



酒垂岩は、天神山東南の山腹にあり、もと天神山
は樹木叢生たりしが、其防府に郊たるを以て人烟
の濃厚となるに従ひ、斧斤の入りてより風雨の暴

す所となり、山骨を露はし水源涸れて今は一滴水
を見ざるに至れりと云ふ(第一篇第六章参照)

宮市天神馬場角
旅館 松川屋 牛見九三郎

長電話四十七番
三田尻驛北六町

最新流行形

各種時計

販賣

并ニ修理

防府町立市

丸山時計店



和洗濯并ニ帽子修繕

インバコート洋服染替

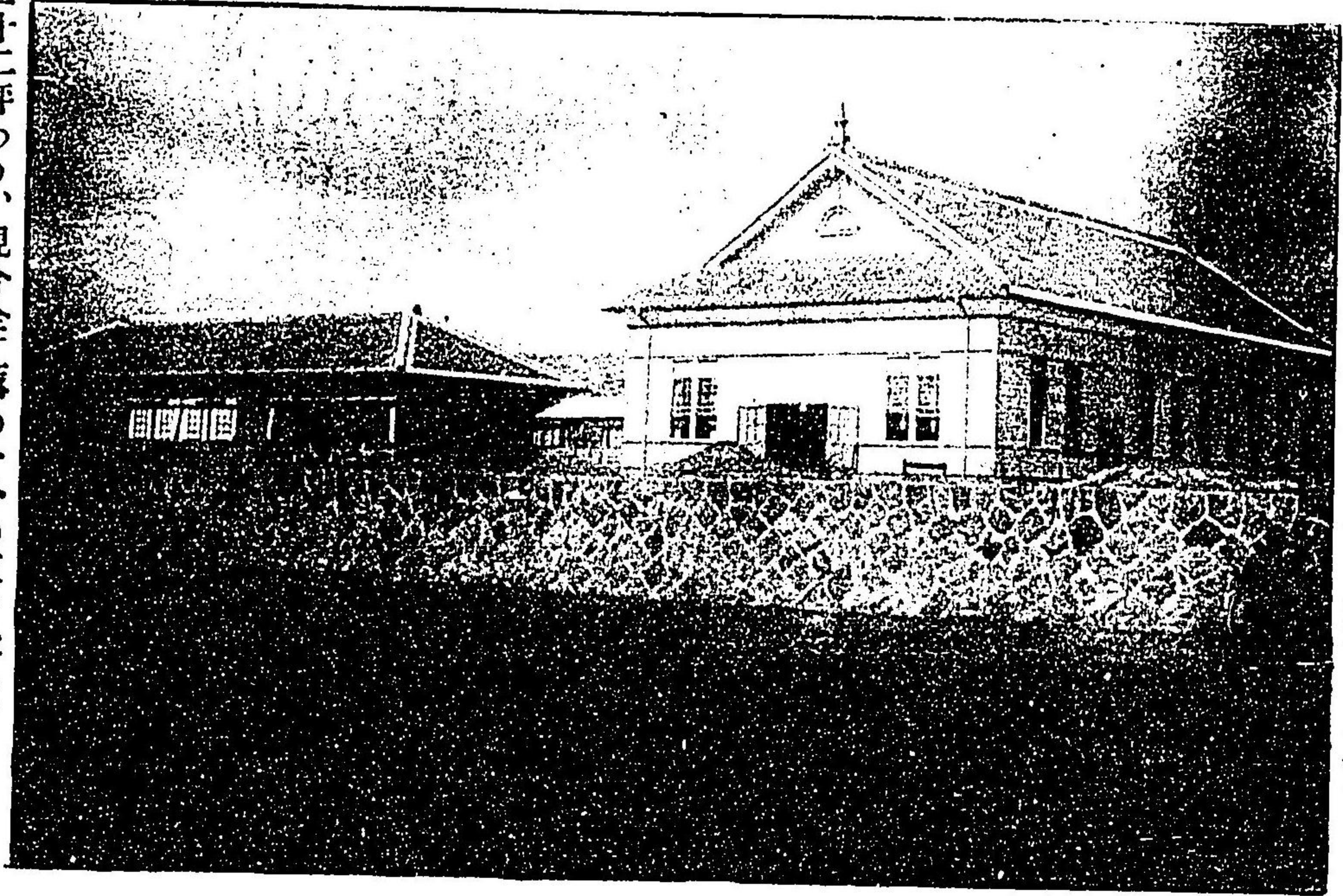
兼業 旅人宿

防府町立市
ラカン市

光田商店

六十第景

(校學小等高常尋崎松立町府防)



本校は、遊校舎及校地共狹隘に付新築中なり校地
六千四百六十坪内校舎用地四千四百八十坪運動場
千九百八十坪あり岡中大なる建物は講堂として百

三十二坪あり、現今全工事の十分の三を竣へす

和菓子司

齊藤清美堂

周防宮市下鳥居

ランカン橋

板ガ
船来
厚ラ
鏡ス
美椅
術子
額類
縁
ペンキ塗料品

防府町下鳥居二丁目

吉末
吉末
ブリキ工場

八百屋物

熊谷商店

並ニ烟草小賣

防府町下鳥居ランカン

關西唯一
種苗供給所

防府町下鳥居

町田豊作

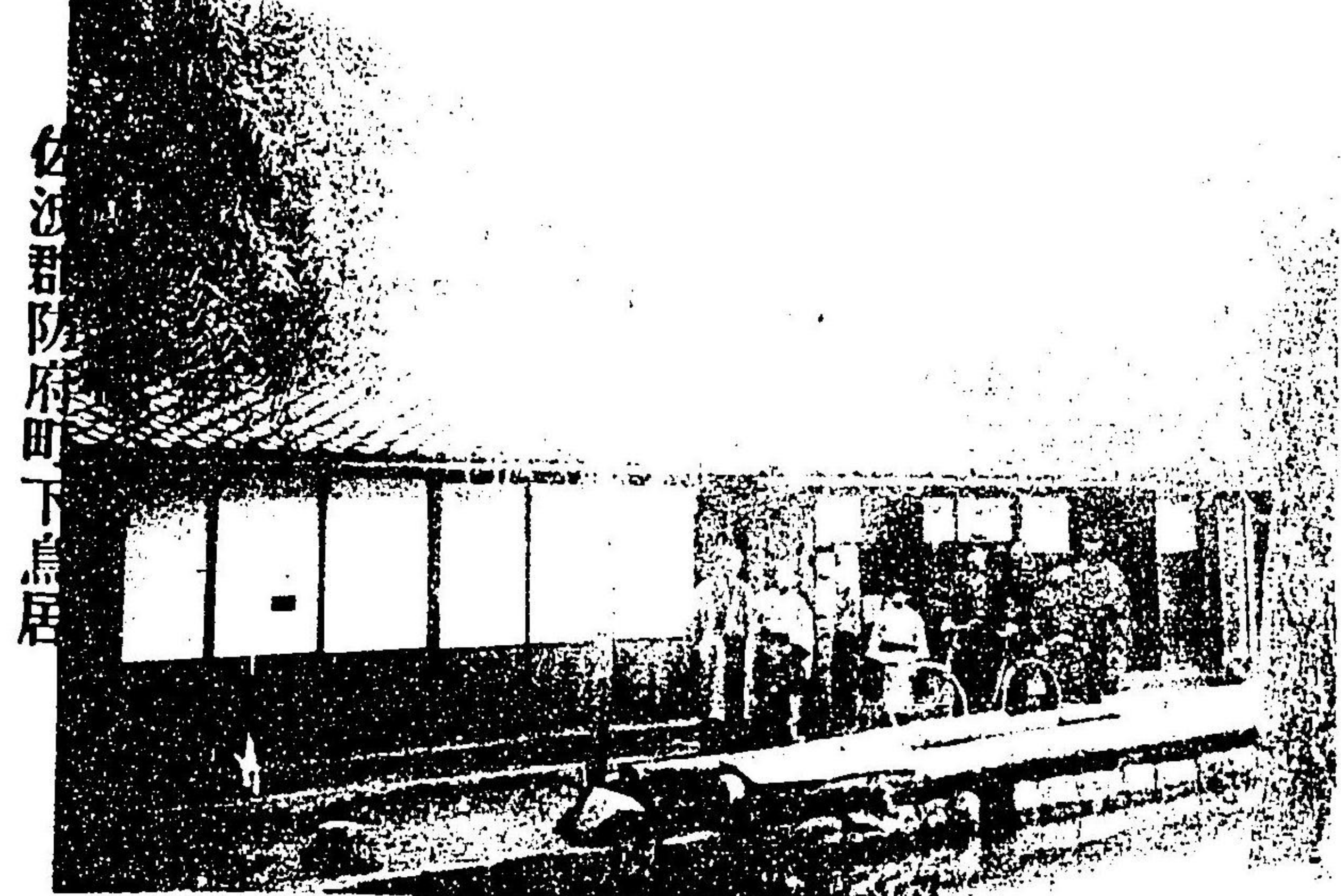
七十第景
 (一其) 居 鳥 下



ちに鳥居二つ立てり、御手洗河は道にそひて流て
 けり(其二へつづく)

下鳥居は、往昔、松崎神社の前鳥居の在りし地な
 りしなり、今川貞世の道行振の中に、北のみやま
 にそひて、南向に天神の御社たてり、御前の造り
 道は廿餘丁ばかり、濃ばたまでみえたり、そのう

商 木 材 板



佐 波 郡 防 府 町 下 鳥 居

齊 藤 榮 三 郎

電 略 (サ イ ト)

(昭 三)

八 十 第 景
 {二其} (井 鳥 下)

弘正方、之に註して、此鳥居二つの内一つは寛永
 六年に建立して今時も、存る御社の鳥居則當時の地
 なるべし一は今時野崎ふ云ふ地に下鳥居と呼ぶ地
 あり其地に立りしなるべし(中略)應永九年大内盛



見より、田地寄附の文書に、周防國府中宮市と云ふ
 こと見ゆたり此日記書ける建徳二年よりは卅二年
 後に當れり(其三につづく)

元祖

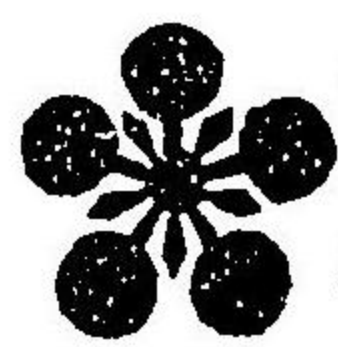
櫻麥製造

防府町下鳥居

山本乙市

防府名物

元祖



栗乃岩

防府町下鳥居

製造元

上田富三郎

年中

無休

氷

防府町下鳥居

小方氷室

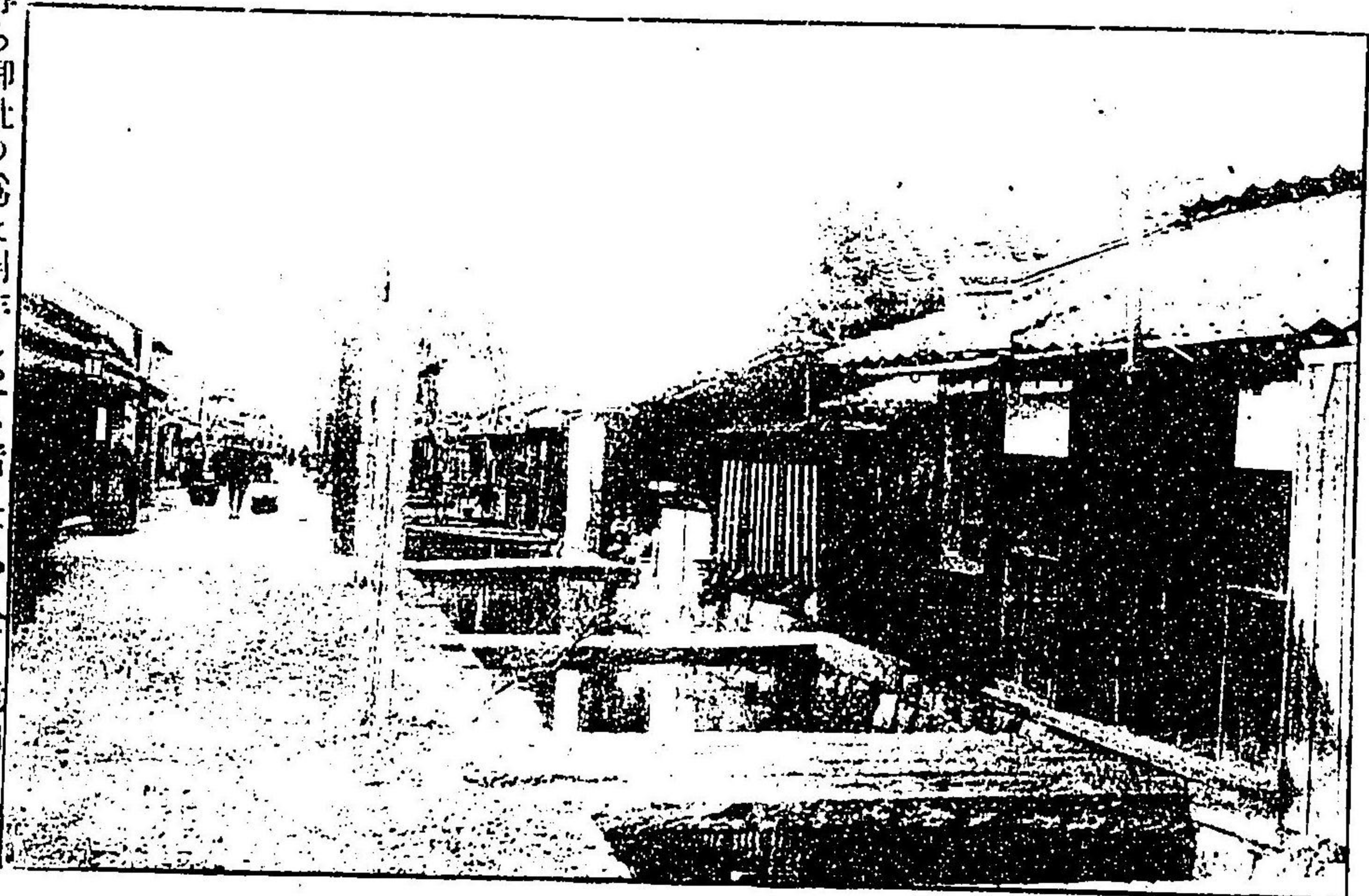
(電話百六十八番)

諸油醬附生蠟卸小賣
各種折箱製造販賣

防府町下鳥居

原田兄弟商會

九十第景
 (三其) (居 鳥 下)



専ら御社の爲に開作したる者にて、全く境内の地
 所なるを肝要と有る下鳥居ははれて年月経るま
 ね、偏に牛馬往還の道路の如くのみ變りぬるは、
 最たしむべきわさなり云云

三

然るを斯はかり厥か、御社の下鳥居は、
 たるまに、修造をも加へ、さきつるは何時
 わりけん、足利氏の悪かる人々、天の下申し
 亂世の間のことなるべし、抑此御前の造り道は、

五雲閣

一 登臨御望の御方は左の時刻中に御
光來被下度候

但 無料

夏期 午前八時より午後四時迄

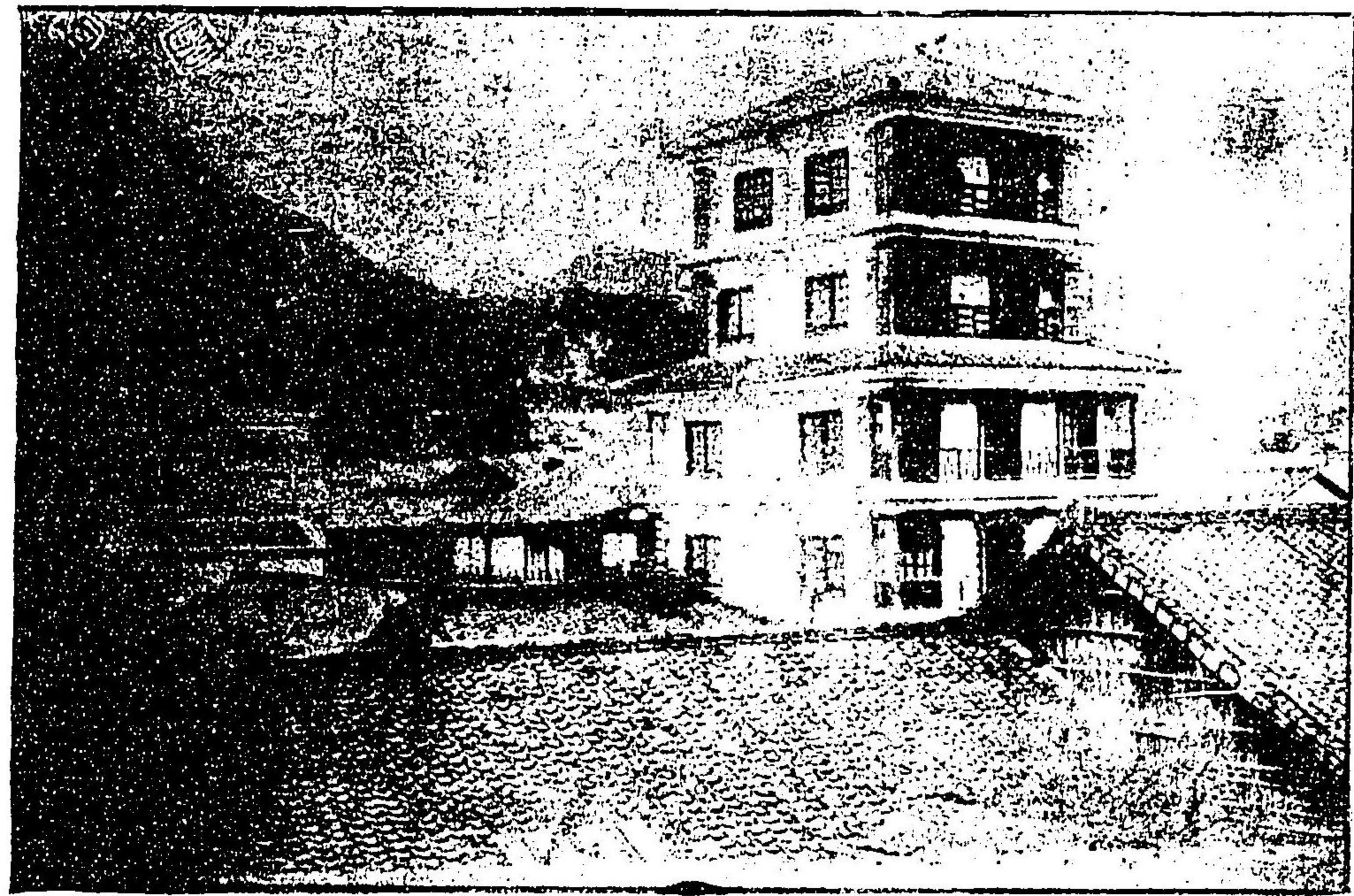
冬期 午前九時より午後三時迄

一 會席御料理は何時にても御需用に
應じ迅速調進可仕候

一 萬事丁寧親切を旨とし廉價を以て
総ての御注文に應じ可申候

五雲閣主敬白

第十二景
（閣雲五）



五層雲閣は宮市町字中市二丁目の南裏にある五層樓なり街屋連擔の中に屹然として聳ゆ

乾物 防府町宮市中市角
 青物 販賣 秋貞商店
 銘飛梅

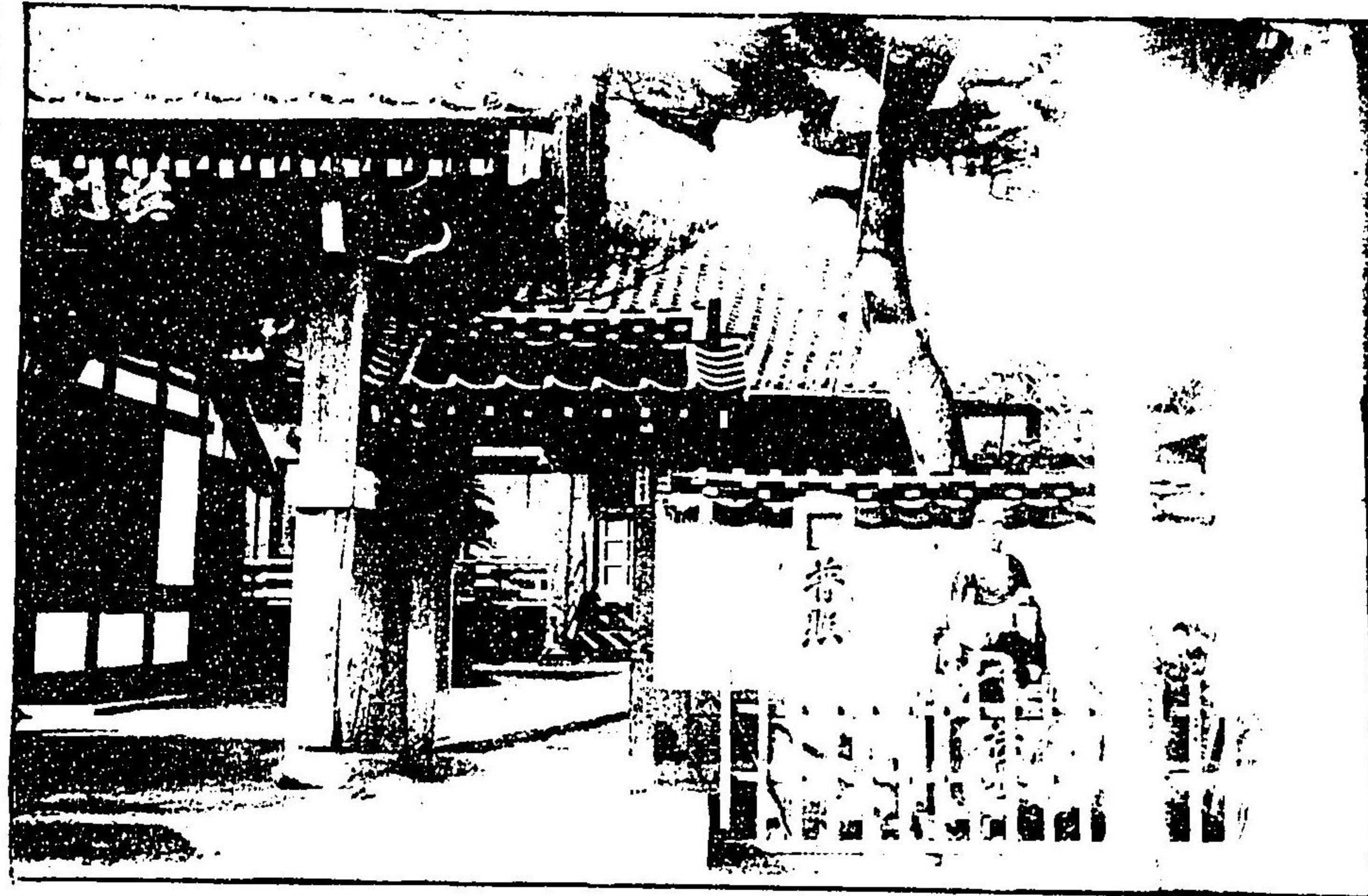
紙類諸帳簿 山口縣周防國宮市町
 建具提灯白張 三牧松之助
 卸賣問屋

{目科業營}
 ●處方藥調劑
 ●純良諸藥品
 ●各種新藥類
 ●有功效諸賣藥
 胃腸病
 最新藥
 デアチン製造所
 宮市中市 防府藥局
 主任藥劑士 福本貞弋



電氣機械 販賣 防府町宮市
 瓦斯機械 阪田電機商店
 工事設計請負

一十二第景
 (寺念定山門普宗土淨)



本尊阿彌陀如來、脇立觀音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩、(定
 期法要)三月一日より七日迄宗祖圓光大師御忌●
 四月五日より八日迄同降誕會●八月四日より十五日
 俄鬼●八月十五日迄同盆會●十一月十日より十五日
 日迄十六夜法會●毎月四日十四日廿五日法筵を開

(第一篇第六章参照)

和洋紙

防府町宮市

井關商店

兼業塩元賣捌

特電話六八番
振替大阪四四四三番

舶來雜貨

防府町宮市新町北側

上原雜貨店

(電話六四番)

材木
食鹽商

防府町宮市新町

山根莊次郎

并ニ戸障子及砥石販賣

和洋雜貨商

防府町宮市新町南側

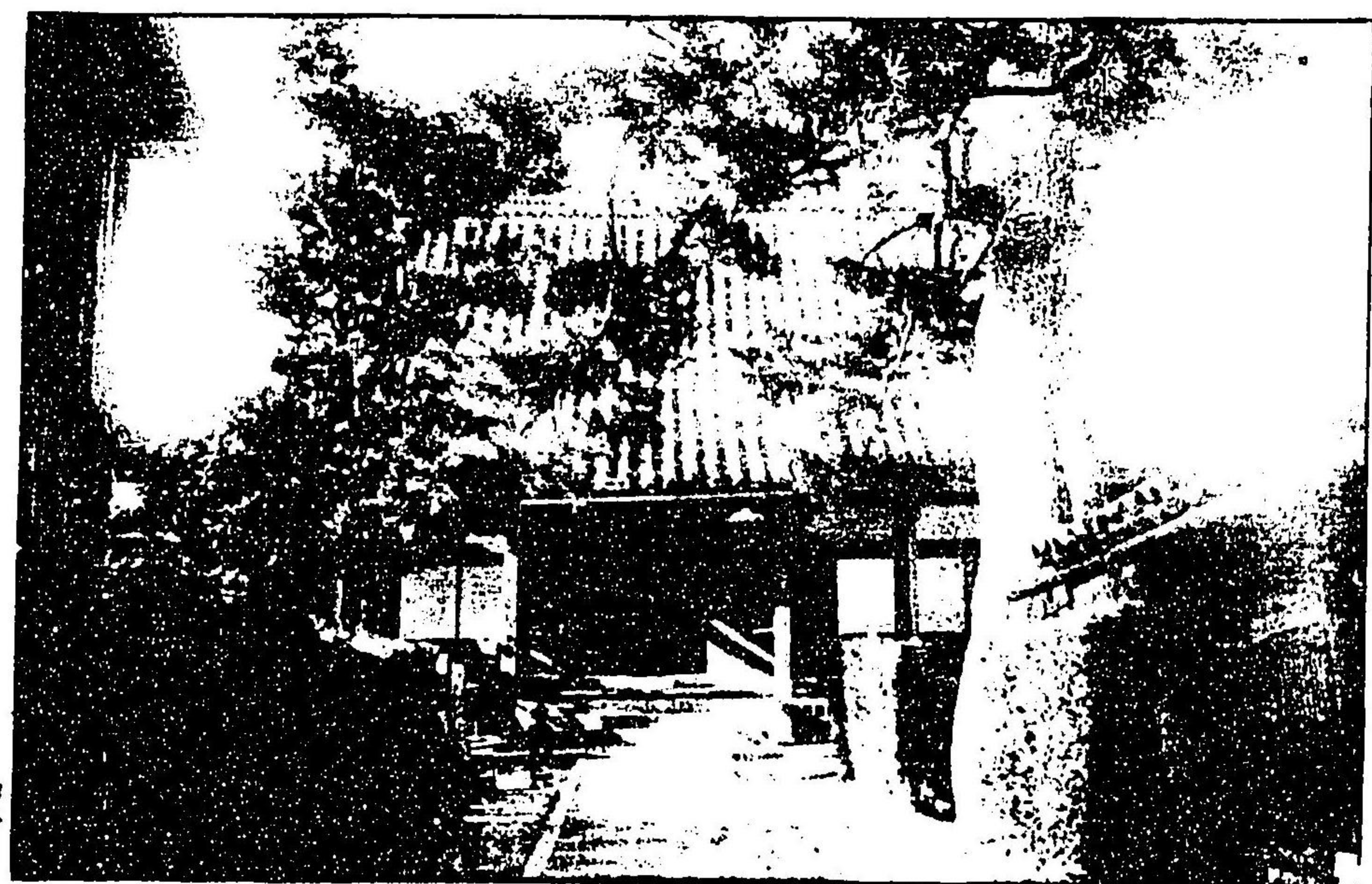
砂本商店

ミ
ン
裁縫
并ニ
雜貨商

防府町宮市新町

中丸商店

二十 二 第 景
(寺 善 安 宗 眞)



●本寺は、宮市新町に在り本派本願寺派にして、延
寶六年戊午六月、開基了玄師現在の地に創建せり
●境内四百六十五坪にして●本堂五十五坪余と本
門二坪余あり檀家は百余戸なり

各地名産
醬油仲買商
卸小賣

絹布染物所

松屋治右衛門

電話
ヤツマ

和傘

防府町宮市新町南側
商號 松田本店

提燈製造

岡本萬藏

卸小賣

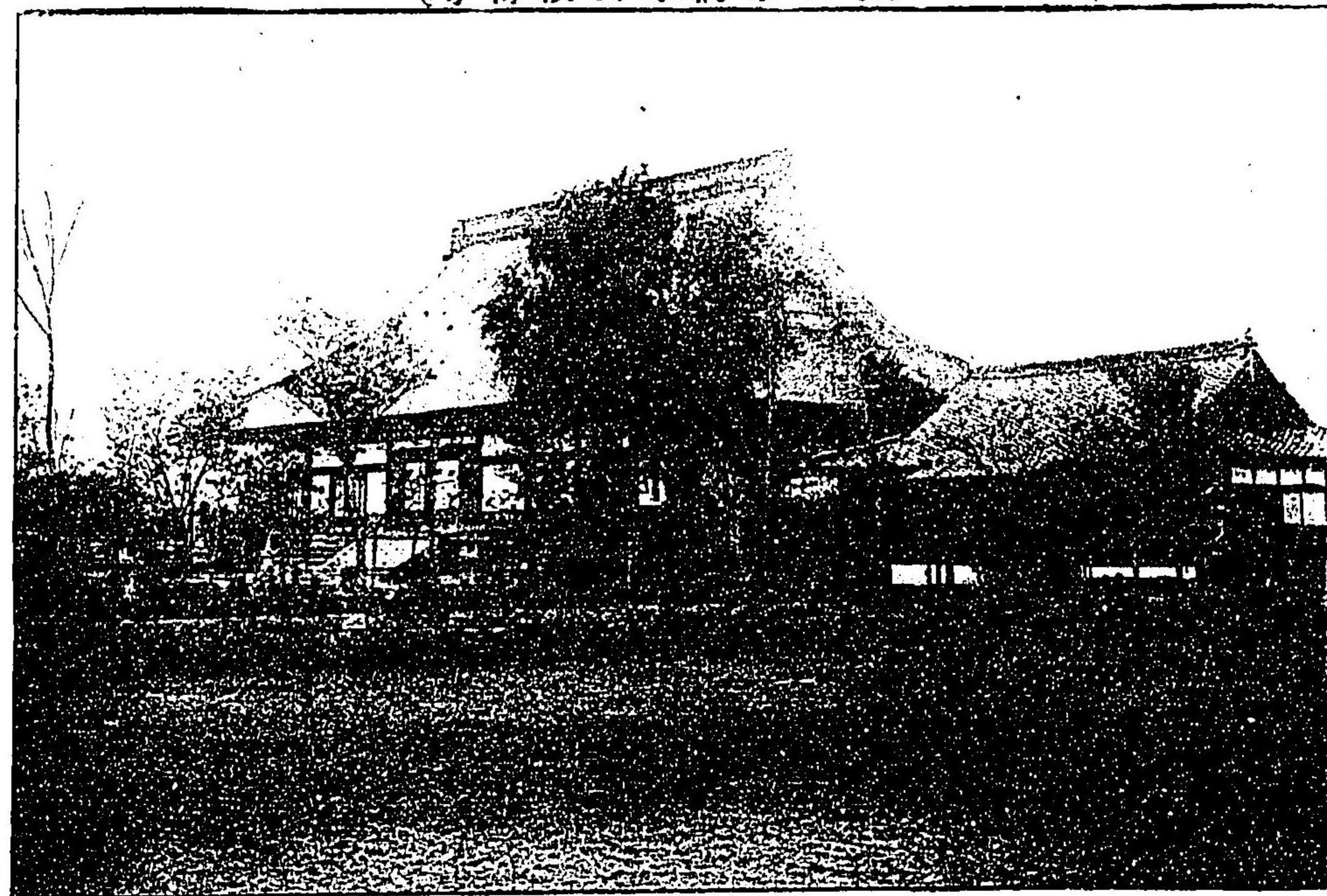
山口縣宮市新町

胃腸虛弱煉藥
貧血諸症ノ丸藥

歸命丹

本舖 澁谷藥房

三十二第景
(寺海成山水滴宗洞曹)



本寺は、もと潜り小路より入りしが、當代を法師
明治二十一年寺の當面の宅地(五畝半)を買入れ
同廿四年家屋を取除け寺の馬場を開く依て本街よ

り直通す(第一篇第六章参照)

醬油
釀造業

防府町宮市船本

內田百合藏

商号(山口屋)

家傳秘製
保險附

唐箕調進田中屋清左衛門
并ニ修繕

防府町宮市船本

防府町船本

酒造機械製造所 渡邊 銀藏
并ニ新樽製製

海產物
四十物

防府町宮市船本
志 重田庄之助

并ニ穀類販賣

電略(シロチ)又(シ)

防府町宮市船本

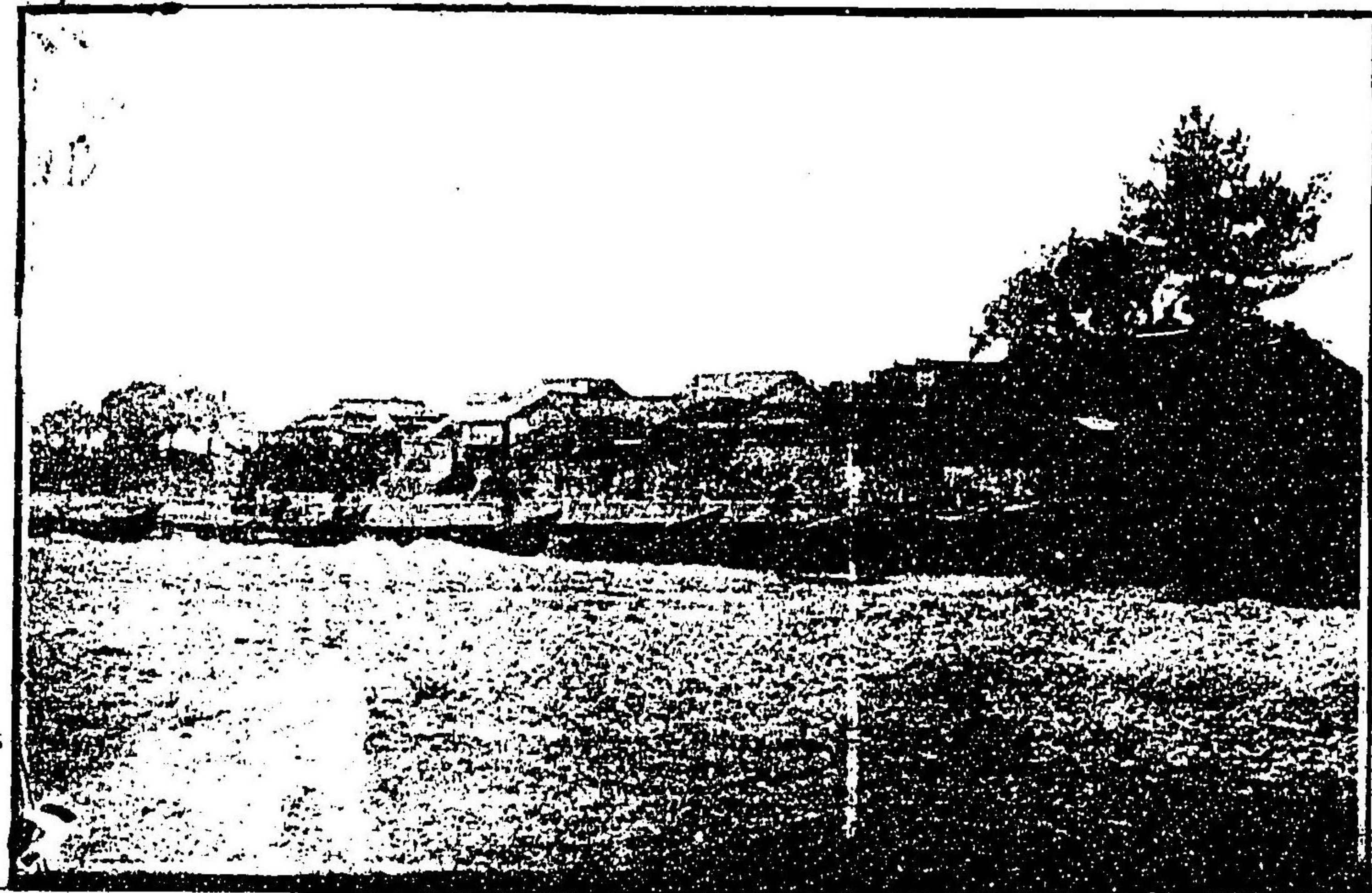
草子製造商



荒瀬苔巖堂

四十二第景

(橋 船)



八年六月、今の幅に擴めしなり、橋北より右は石
州に到るべき街道にして左は山口へ行く便道なり
究

時代の創設にして關西絶無の奇橋なり、長さ二十
二間幅二間あり、もとは幅八尺なりしが、明治十

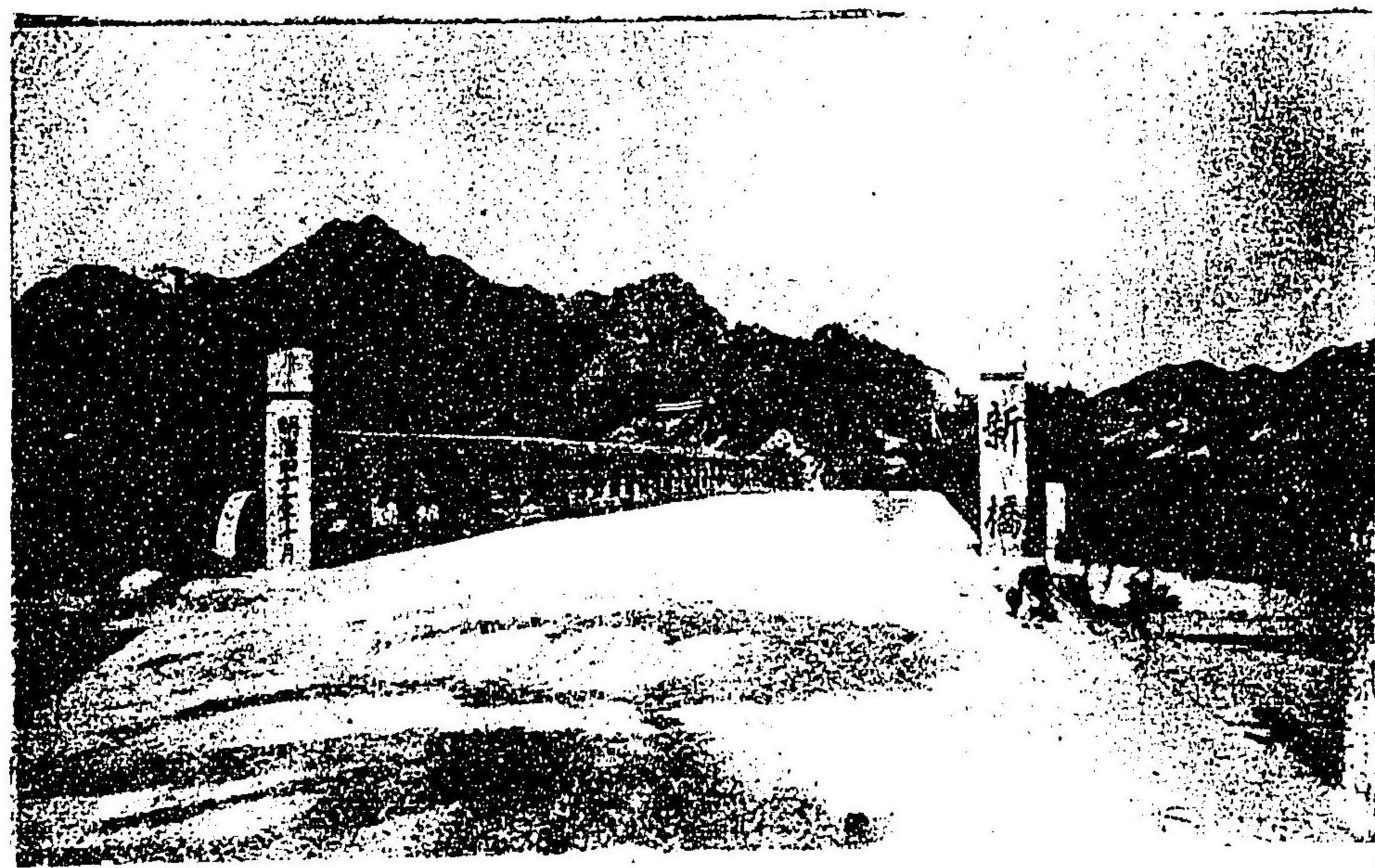
結うなぎひ
御料理
二橋亭
防府町新橋
(電話一四八番)

防府町新橋
共同商會
肥料米穀商
同町三田尻堀口
(長電一八一番)
共同商會支店

防府町新橋
旅館
朝日屋

防府町新橋
佐古幸次郎
乾物、相物、鮎、鰻、鰹、鰯
并鳥製造
電話(廿三)

五十二第景
《橋新》



此橋は、佐波川(船橋の下流)に架す、國橋にして
明治十八年六月の建設なり、長六十四間幅參間あり、
橋北を西北に直行すれば四里にして山口に到

るべく、東北は石州街道にして約十五里を經れば
津和野に達すべし又西南に國道を行けば四里三十
町にして小郡に着す

萬金物製造
石道具專門
和洋鉄鋼販賣

防府町宮市

刃 柏 鐵 工 所

防府町宮市徳町

材 木 商 久 野 米 藏

並ニ戸障子販賣

防府町宮市尻

荒 物 商 松 村 商 店

並ニ肥料及疊表疊製造所

防府町宮市尻

菓子製造卸商 永 田 榮 壽 堂

祝儀及
法要用 アンパン并ニ食パン製造

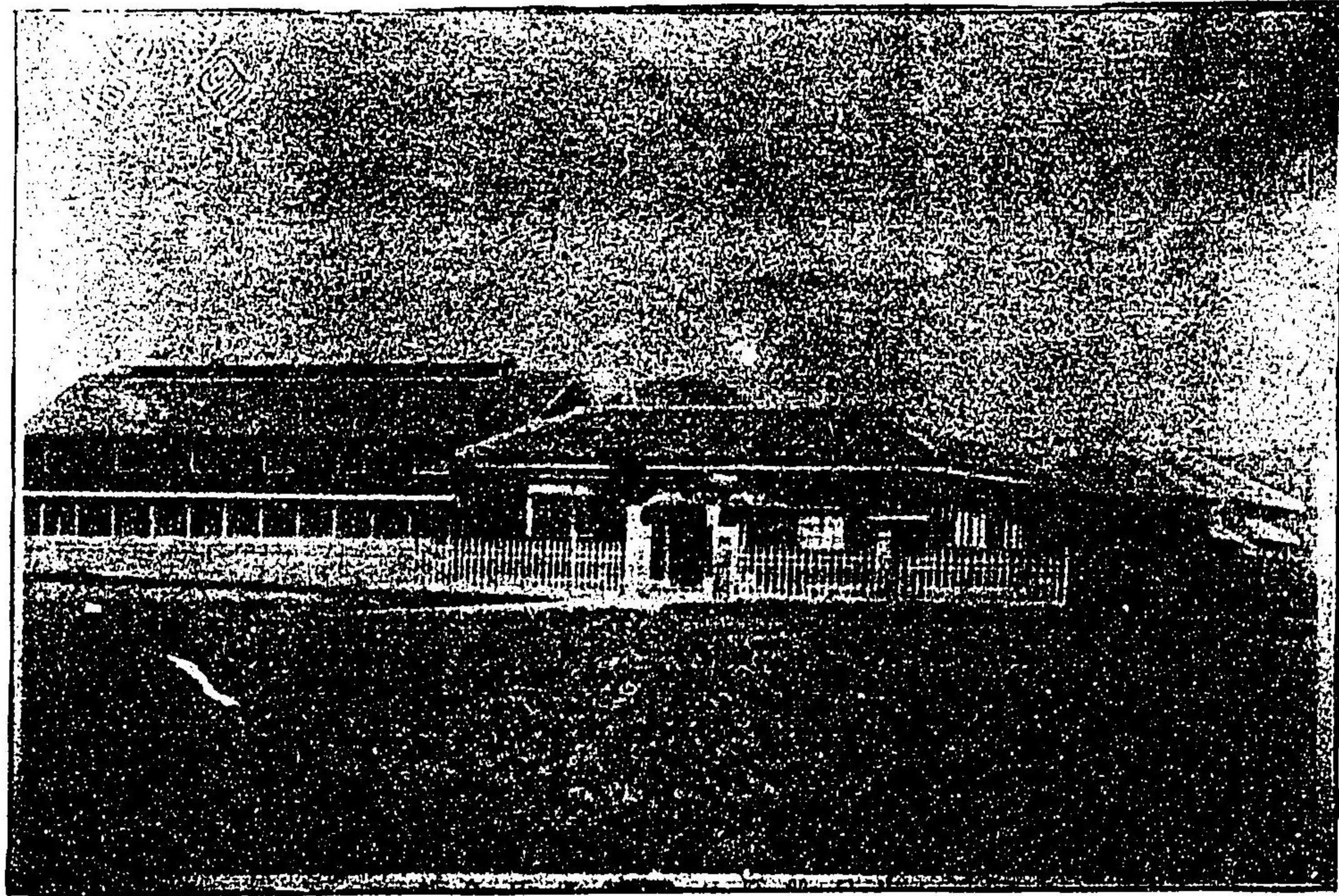
防府町宮市尻

穀 物 肥 料 商 森 田 音 熊

並ニ荒物履物販賣

(電話一八四番)

六十二第景
 (所造製種園原縣口山)



本所は、新橋の南にあり、明治四十一年度より
 建築にして四十一年四月廿八日より事務を開始せ
 り、現今建物の惣坪数は百七十八坪七合五勺大抵
 平家造瓦葺なり、内二階建は葺室(七十坪)のみな

り、敷地総坪数四百十二坪あり●桑園は、佐波川
 下流寄洲に二ヶ所あり、其総反別一町五反五畝歩
 三

和洋
御菓子司

周防宮市新町東角



阿武清壽軒

乾物、八百屋物
瓶詰、諸罐詰
雜穀、甘露醬油

防府町新町戎町へ入ル西角

羽小田常介

福友堂

原田活版所

防府町宮市戎町

▲大勉強▼
各種時計販賣
並ニ修理

防府町宮市戎町

嶋津時計店

外ニ大聲蓄音機
レコーダー販賣

七十二第景
(町 須 比 惠)



本町は、三田尻前より新町へ直通する道路長四百六間なり、明治四十二年四月工を起し同年十一月三日の天長節を卜し開通式を舉行せり

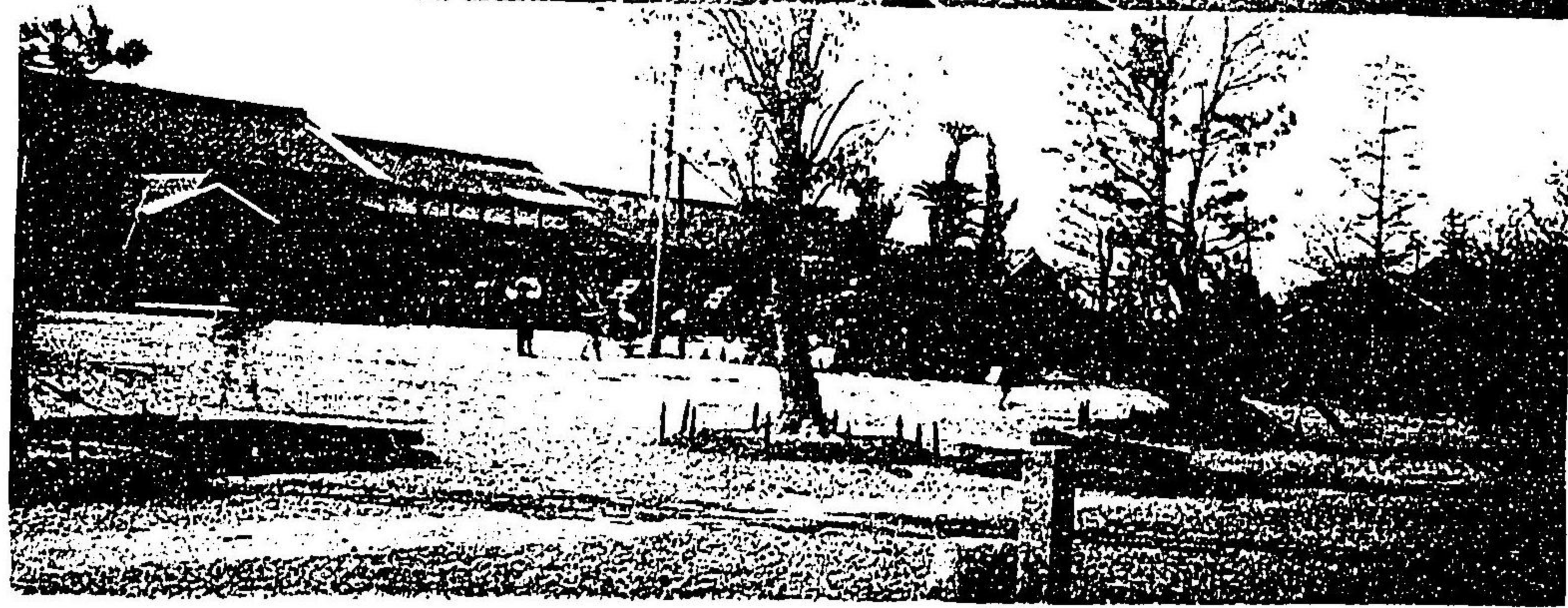
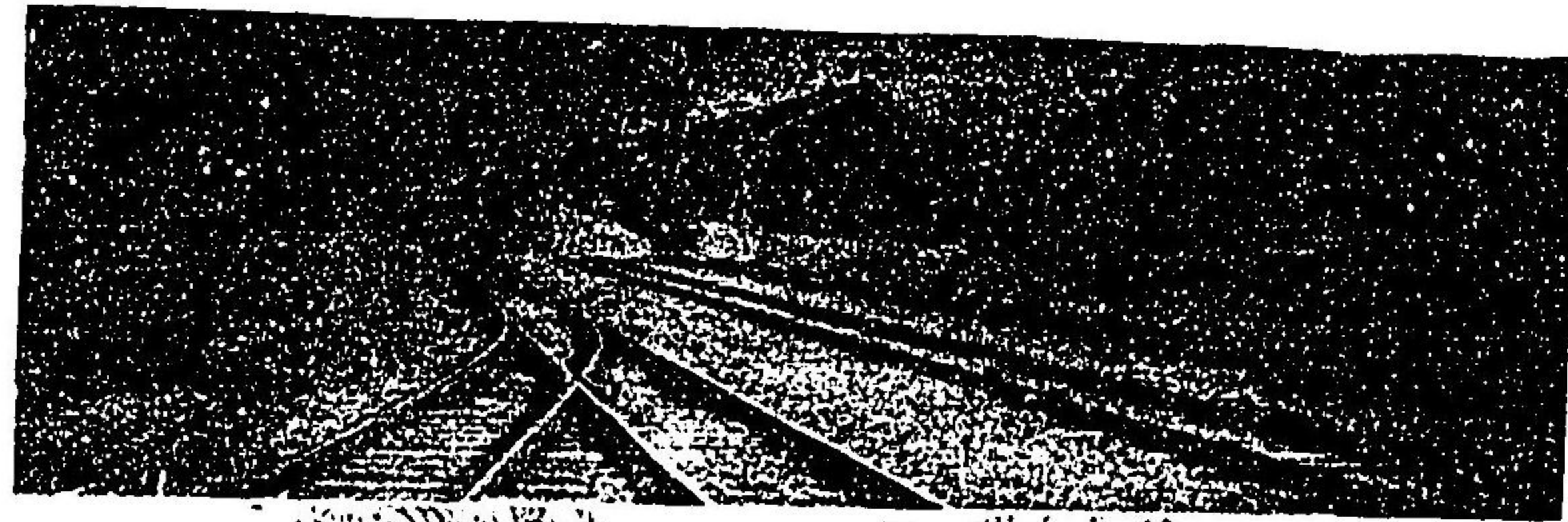
三田尻驛通
國本旅館

本店 三田尻驛前(長電話六三番)
石田旅館
支店 小郡驛前(長電話二十一番)

三田尻驛前
待合支度
木 村
辨當仕出
(電話一六五番)

防府町三田尻驛通
清水パン製造所
各種パン製造専門
食パン 味噌菓子パン
アソパン シヤムパン
ミルクパン ビスケツパン
請合

八十二第景
(驛 尻 田 三)



三田尻驛は國鉄山陽線中の主要驛の一なり明治四十四年驛前に庭園を新設す其費は地方有志者の饋たり金より出づ此庭園は防府町の玄關に一方有光彩を添へ

質屋
古物商

防府町三田尻驛入口上

久富勇太郎

美術染物處
并洗張悉皆

小林區署横平

高染工場

履物商

防府町三田尻車塚下ル

吉本夕力

雜貨類
荒物商
洋酒罐詰
化粧品

防府町三田尻車塚下ル

横見十五郎

水飴製造元

防府町三田尻車塚

奥田商店

九十二第景
(場役町府防)



本役場の敷地は三百五十五坪なり、建物総坪数は
百三十三坪にして事務室あり食堂、宿直室及村會
議事場等ありて設備完全なり

諸車製造

横尾千代松

防府町三田尻停車場南

牛乳

重國牧場

防府町三田尻岡村

電話百八番

西洋洗濯

小田清洗堂

防府町三田尻車塚

并ニ洋服染替所

三田尻上岡

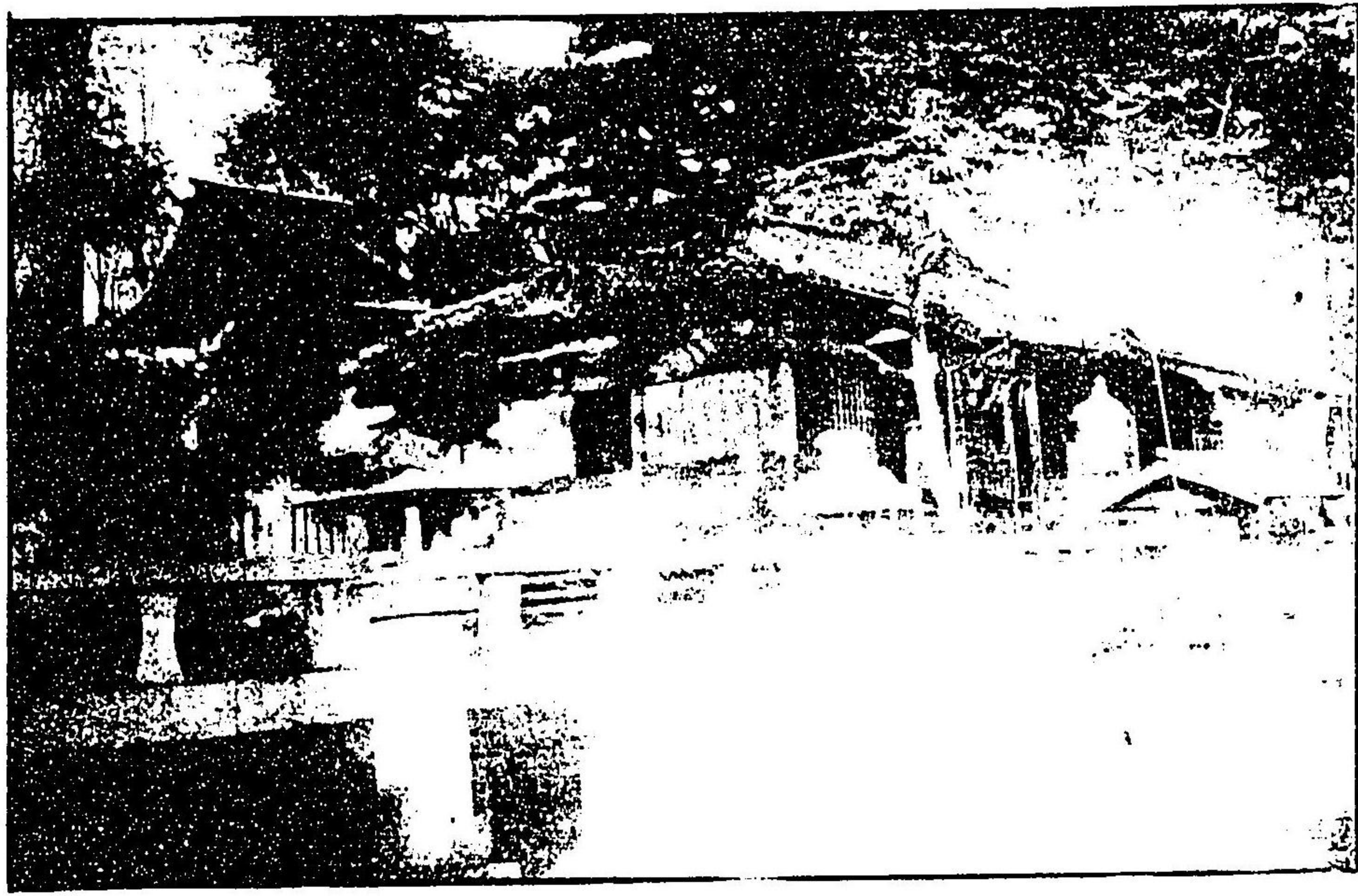


眼鏡商 井藤愛信堂

并ニ貴金屬細工所

(車塚下ル左側)

第十三景
(社神主中御天)



●祭日 九月一日●信徒一千人●保存金貳千圓

本社は車塚に在り、創立は推古天皇二十四年八月なり、中古大内家の信仰厚く、引續き毛利家の崇敬深く、社殿の建立營繕祭費等悉く寄付せられたり

鍋釜
温目
鋤先
其他

鑄物類

防府町三田尻車塚
妙見社東側

製造所



松村吉二郎

正眞
元祖

パン各種 高部金鶏軒

防府町三田尻車塚妙見社東側
並ニ和洋菓子製造其他美術物いろく

防府町三田尻車塚下ル

東屋鶴藏

琴三味線製作張替所

蚊帳染替洗濯色揚所

並ニ仕立替

美術京染呉服悉皆商

並ニ和服洗張湯のし

防府町車塚

醬油釀造

山根支店

並ニ酒類卸小賣

景 第三十一
(三田尻警察署)



建築は、明治三十二年十月五日工事着手、三十二年三月一日堀口より移轉開始、敷地反別一反四畝六歩あり、建物坪數本館二階二十八坪事務室二十八坪其他四十一坪二合五勺外に官舎十八坪あり

(六)

陶磁器
宇治茶

商

叶

時

政

猪

之

助

防府町三田尻驛入口

電話 壹 貳 番
電略 (トキ) 又 (ハ) 上

各 國 最 新 式
流 行 靴 製 造
并 二 修 繕

防府町下鳥井

羽 織 屋

各 種 印 刷
和 洋 製 本

山口縣防府町三田尻

守 富 活 版 所